テイルズ オブ ファンタジア

なりきりダンジョン

下巻



スーパーダッシュ

結城 聖

イラスト／松竹徳幸

主要登場人物

ディオ……ちょっとお調子者だが、勇敢な少年。メルの双子の弟。

メル……面倒見がよい、しっかりもの。ディオの双子の姉。

クルール……ディオが拾った謎の生物。「うきゅ」「きゅー」と鳴く。

エリック・フォート……ディオとメルの父。『魔科学』の研究に熱意を傾ける学者。

ファーメル・フォート……ディオとメルの母。高名な画家。かなり心配症。

チェスター……時空の六勇者の一人。伝説では、最も攻撃的な性格とされている。

クレス……時空の六勇者の一人。英雄中の英雄として語り継がれている。

ミント……時空の六勇者の一人。偉大な法術師であり、伝説の聖女。

すず……時空の六勇者の一人。『忍びの里』の頭領（とうりょう）の孫むすめ。

アーチェ……時空の六勇者の一人。ハーフエルフの少女。年を取らないらしい。

クラース……時空の六勇者の一人。研究の末、失われた召喚術を復活させた。

ノルン……ディオとメルの秘密を知る謎の精霊。半透明の姿をしている。



装丁／小松　昇(Pencil Studio)

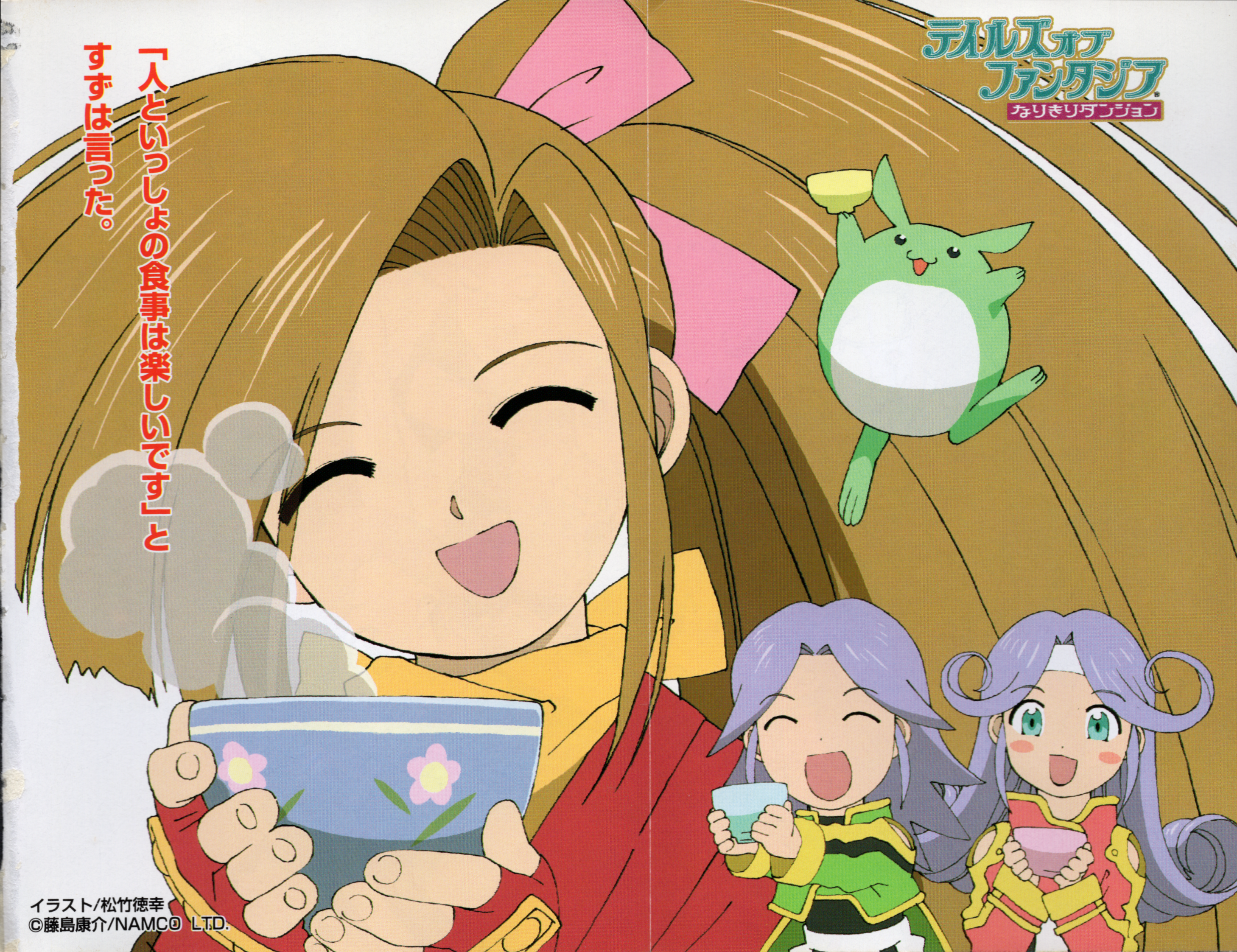
テイルズ オブ ファンタジア

～なりきりダンジョン・下巻～

結城 聖

集英社スーパーダッシュ文庫


Mint Adnade
ミント・アドネード
Chester Barkelight
チェスター・バークライト
Erick.Fort
エリック・フォート
Suzu Fujibayashi
藤林すず
Cless Alvein
クレス・アルベイン
Formel.Fort
ファーメル・フォート
Mel
メル
Kruelle
クルール
Dio
ディオ


テイルズオブファンタジア
なりきりダンジョン
「人といっしょの食事は楽しいです」と
すずは言った。
イラスト/松竹徳幸
©藤島康介/NAMCO LTD.

テイルズ オブ ファンタジア

～なりきりダンジョン・下巻～

結城　聖

集英社スーパーダッシュ文庫

テイルズ オブ ファンタジア
～なりきりダンジョン・下巻～

CONTENTS

イラスト／松竹徳幸

スーパーダッシュ

上巻のあらすじ

アセリア暦四四〇五年。クレスたち「時空の六勇者」の活躍から、
百年の月日が流れた。双子のディオとメルの住む町では、
今年も子供劇『聖六勇者物語～時空城の決戦～』が行われていた。
その舞台上で二人は役に"なりきり"、使えないはずの
「奥義」と「魔法」を放ってしまったのだ！
謎の精霊ノルンの導きで、不思議な能力"なりきり"のルーツを巡る、
二人と謎の動物・クルールの旅が始まる。
前世の罪のために本当の自分を押さえ込まれ、両親の望みどおりの
いい子に"なりきって"いるだけの二人の感情を解放する条件は、
「時空を越えて十二の精霊と戦い、勝利すること」。
クラースやアーチェなどの伝説の六勇者の助けもあって
順調に精霊の試練をクリアし、
なりきり能力を
パワーアップさせて
いく二人が、
次に訪れたのは
クレス達の時代
だった・・・。



テイルズ オブ ファンタジア
〜なりきりダンジョン・下巻〜

一　バークライト家の子供達

「何者だ、おまえたち」

チェスター・バークライトの声は、静かだが斬りつけるようで、僅か十三にしかならない少女と少年の口をつぐませるには、十分過ぎるほどの迫力だった。白磁のような肌の端正な顔の中で切れ長の目が細められて眼光が鋭さを増すと、双子の肌は粟立ち、彼らが連れていた、エメラルドグリーンの毛皮の獣――クルールの耳はぴったりと寝、短い尻尾の毛は逆立った。

「それは、おまえたちが知るはずのない、俺の名だ」窓から吹き込んだ風が、ざあ、と項でまとめられた青みがかった銀髪を揺らす。「なぜ知っている？」

――未来からきたからです。

少女――メル・フォートはそう言いたかったが、声は喉元で凍りついて出てこなかった。こんなことなら『弁士』に《なりきって》から来るんだった、と思ったがもはや遅い。青年と同じ聖六勇者の一人、《孤高の召喚術師》クラース・F・レスターと初めて対したときも同じように声を失った二人だったが、その時とはまるで質が違った。

クラースのときは、偉大な人物に出会ったことで舞い上がった結果だった。だが今、二人と一匹を金縛っているのは、畏怖の心だ。

世界を三度滅ぼしかけた、魔人ダオス——それを倒した聖勇者たちの中でも、チェスター・バークライトは最も攻撃的な性格に戯曲などでは描かれる。それは、多くの勇者たちが『使命感』で動いていたのに対し、チェスターの動機はあくまで『復讐』であるとされているからだった。

魔人ダオスと聖六勇者たちの戦いの伝説には、クラースがメルとディオに語り聞かせた、三万人の人間と八千戸の家屋が魔光によって溶解消滅した『ミッドガルズ王都灼滅』の真実をはじめ、幾つもの悲劇が描かれている。勇者クレス・アルベインの旅立ちのきっかけとなった『トーティス村襲撃』もそのひとつである。

『トーティス村襲撃』は、アセリア暦四三〇四年に起こった《史実》として確認されている数少ない事件である。

黒騎士団として知られた、ユークリッド独立騎士団が、突如、トーティス村を襲撃し、住民のほとんどを殺して火を放った事件は、ユークリッド騎士団の名を地に落としめた大事件であり、百年後のメルの時代にも、ユークリッド公文書館に当時の新聞や裁判記録などが残っている。

それによれば、黒騎士団を率いていたのはマルス・ウルドールという男で、事件の数カ月前

からユークリッド大陸南部の巨大な地下墓地と思われる遺跡の探索の任についていた。その後、騎士団は丸ごと行方知れずになるのだが、彼らは遺跡に近い森の中にあった無人の古い館を拠点に活動を続けていた。

その場所が判明したのは、トーティス村が壊滅して半月の後である。村の付近で捕らえられた騎士が白状したのだ。だが騎士は、自分たちはあくまで王家の命令で動いていると信じていて、ゆえに非常に驚いた様子であったと記録されている。五十人からのユークリッド騎士が館を急襲したときも抵抗はなく、館の地下からは牢と、逃走用の抜け道であろう地下水道が見つかったが、拷問の末に殺されたと思われる女の死体がひとつ見つかった以外はなにもなく、マルス・ウルドールはとうとう発見されなかった。

捕縛された黒騎士団員の証言から、トーティス村の襲撃は、村人が盗掘を生業にしていてすでに遺跡から重要な宝を盗み出していることが発覚したゆえ、宝の奪還と殲滅の命を王家から受けた、とマルスから聞かされてのことだったと知れた。他にも、ユークリッドの富豪、オルソン・ブライトン夫妻の殺人も彼らの仕業とわかったが、これは村の生き残りである男を匿った罪で処刑したのだという。牢で見つかった女は、これも盗掘者であり、娘と共に捕らえ、拷問にかけたのだということだった。

ユークリッド王は、彼ら黒騎士団の全員に死刑を宣告し、その家族を追放処分にしたとされている。

では、マルス・ウルドールはどこに行ったのか？　ブライトンが匿ったという村の生き残りと、盗掘者の娘は？

それは、伝説が答えてくれている。

この生き残りこそ《時空の剣士》クレス・アルベインであり、娘は後に《一角馬の法術師》と呼ばれる、『ユニコーン教団の祖』ミント・アドネードであった。

彼らは力を合わせて牢を脱出し、そして遺跡の側に住むモリスンという男の屋敷で、トーティス村のもう一人の生き残り、チェスター・バークライトと再会することになったのだった。

クレス・アルベイン、ミント・アドネード、チェスター・バークライトの三人には、このときすでにひとつの共通点がある。期せずして、同じ人物に肉親を奪われることになったということだ。

トーティス村の襲撃でクレスは両親を、チェスターは妹を殺され、ミントは母を拷問の末に殺されている。それぞれの胸に強い怒りがあったであろうことは間違いないが、チェスターの怒りは二人の比ではない様子で常に描かれる。

それは、境遇の差にある。

クレスやミントと違い、チェスターは早くに両親を無くし、妹のアミィ・バークライトと二人暮らしであったようだ。四三〇四年当時のトーティス村は、ミゲールの都からは想像出来ぬほど小さく、決して裕福とはいえない小さな村だったらしい。教会や、村人の援助があったと

はいえ、決して暮らしは楽ではなかったはずだ。

芝居などでは、チェスターは援助を甘んじて受けることをせず、子供の時分から、自立するために大人と混じって狩りに出、ただ一人でアミィを育てた苦労人として表現されることが多い。

昨年のユークリッド公営大劇場にかかった『聖六勇者伝説』のチェスターの台詞には、こんな言葉がある。

「アミィは俺のすべてだった……俺の世界は、あいつを幸福にするためだけに存在していたんだ！」

それを奪われた怒りの大きさは、どれほどだろうか？

伝説ではその後、三人はマルス・ウルドールを追って地下墓地へと向かい、その最深部で、マルスと、そして魔人ダオスの復活の瞬間に立ち会うことになったとされている。

マルスは、復活のためにダオスに操られていただけに過ぎなかったらしい。騎士団の捜索では見つからなかった訳がここにある。彼は復活を果たしたダオスに、髪の毛一本残せぬ様で殺されることになるのだ。

つまり、チェスターたちは『仇』をダオスに奪われるのである。『仇』が死んだとはいえ、それでは溜飲が下がるはずもない。

だが戦おうにも、このときのチェスターは実力でいえば弓使いの最下級職『ハンター』程度

に過ぎなかった。さらに、魔人ダオスは魔術でしか傷つかないと伝えられているが、メンバーの中には魔法を使えるものは誰もいなかった。

否――そもそも、このときの彼らには、『魔法』という概念そのものがなかった。

伝説の中のアセリア暦四三〇四年では、世界樹ユグドラシルが枯れているために魔法素(マナ)自体が存在せず、従って『魔法』も、その呼称さえもほとんど知られてはいなかった、とされているのだ。

ゆえにモリスンは、魔術師を捜し出し、枯れてしまった世界樹ユグドラシルを復活させるために、クレスとミントをアセリア暦四二〇二年に時空転移させたのだ、とあるのだが……実際には、魔法はアセリア暦四三〇四年当時もごく一般的に知られていて、アルヴァニスタ王家ではハーフエルフのルーングロムが宮廷魔術師として王家に仕えており、ユークリッドの都においても魔科学の研究がなされていたと公式な記録にある。

そもそも、世界樹ユグドラシルが枯れたことなど一度もないのだ。

こうした矛盾が、歴史家が、クレス・アルベインらと魔人ダオスとの戦いを『伝説』としてしか扱わぬ原因のひとつだった。また、アセリア暦四二〇二年に転移した後、クレスたちは歴史の流れそのものを変えたとされているが、それも、伝説は伝説でしかない、という主張に一票を投じる原因となっていた。

歴史家にとって、歴史とはただ一本の道であり、決して変えることなど出来ぬものなのだ。

事実、歴史が変わったなどということを示す証拠は何ひとつ見つかっていない。
大体『時空を越えることが出来る』ということを、誰も信じていなかった。
もし彼らがそんなことができたなら、あらゆる悲劇は回避できるではないか——それが彼らの主張である。
確かに一理ある。
メルとディオも、アーチェ・クラインに会わなければ『時空転移』など信じられなかっただろう。だが、聖勇者の一人であるアーチェ・クラインが実在し、実際に自分たちが時を越えるに至っては信じないわけにはいかず、その結果、『伝説』は『史実』として二人の中にしっかりと根付いたのだった。
その伝説が、チェスターの動機を『復讐』だとしているのだ。
畏怖を覚えて当然だった。
「なぜ黙ってる？」チェスターの声が更に低くなる。「答えないってことは、後ろ暗い憶えがあるってことだな？」
すっ、とチェスターは一歩前に踏み出した。それだけで、部屋の空気全体が重石のようにのしかかってきた気がした。気押されてクルールが気絶し、ころりと後ろに倒れる。メルもディオも思わず下がっていた。
「……まってください」

「！」
そう声がしたのは、彼のすぐ後ろでだった。
反応は速く、チェスターは素早く振り返っていた。だが、さすがに驚いたようだ。背中からでもそれがわかった。彼が目にしたのは、空中に浮かぶ半透明の女性の姿だったのだから。しかも彼女の背には巨大な翼があって、白鳥よろしく広げられているのだった。
（ノルン！）
メルはこのときほど、この精霊の存在をありがたく思ったことはなかった。それはディオも同じであったようだ。緊張がほぐれたらしいのが、ついた息の音でわかった。
だが、チェスターは誰何しようとはしなかった。黙したまま、ノルンと対峙するばかりだった。家のどこかにある時計の歯車の回るチッチッという音が大きい。窓からの風は変わらずチェスターの髪を揺らしたが、ノルンの服はそれとはまったく関係なく波打って、それは、彼女がこの世界とは別の法則で存在していることを表しているようだった。
「あなたが、チェスター・バークライトですね」先に堪えかねたのはノルンであったようだ。
「聖六勇者のひとり『妖精弓の射手』……そうですね？」
「……おまえは？」そう言った声からは、感情が消えていた。押し殺しているとも感じられない。ただ、冷たい声。「有翼人の幽霊なんざ始めて見たぜ。それとも、天使って奴か？……なんにしろ、人に名前を尋ねるときは自分から名乗るのが礼儀ってもんだ。そうだろう？」

「そうですね」ノルンの声も心無しかいつもよりも平坦だった。「……わたしはノルン。あなたがたの言葉でいえば『精霊』のようなものです」

「のようなもの、ね」

くっ、と小さな笑いが聞こえた。背中しか見えなくてもわかる。チェスターはいま、ずいぶんと皮肉めいた笑みを浮かべているのだろう。ノルンの顔がわずかに曇っている。

「わたしは名乗りましたよ」

「聞いてたさ。……あんたの言うとおり、俺がチェスター・バークライトだ。だが、俺はおまえのことは知らねえ。会ったことはないよな？　で、あのガキどもとは知り合いなんだろう？」

チェスターの右手が上がり、親指が背中のメルとディオを指した。

まるで見えない弓に射抜かれたごとく、二人は思わず体を震わせてしまった。見えていたかのように、チェスターの肩が小さく竦められた。

「なぜ、そう思うのです？」

「あんたの出てきたタイミングは、まさにあいつらをかばうタイミングだったからさ」チェスターは窓に背中を預けるようにして、ノルンとメル＆ディオの両者を視界に捉えることができる位置に立った。「しかし、いままでガキを捨てにいろんな連中がやってきたが未来からわざわざ捨てに来た奴は始めてだぜ。――どうやってきた？　トールか？」

「どうしてわたしたちが未来から来たと？」

「あんた――このガキどももだが――俺を『妖精弓の射手』と呼んだだろ？　そいつは五十年後の世界でエルフの連中が俺につけたもんだ。後は考えなくてもわかる」

見ようによっては酷薄とも思える薄い微笑みが口元に広がる。

「なるほど」ノルンの口から小さくため息が洩れたように思えた。「しかし、わたしはこの子たちを捨てるために来たのではありません」

「ここに来る連中は、皆、そういうのさ。子供のため。預かってほしいだけ。必ず迎えに来る。――だがな」チェスターの口元が厳しく引き締まった。「迎えに来た奴なんかいない。このガキどもは俺が引きとってやる。しかし、どういう理由だろうと、幽霊だろうと、精霊だろうと、子供を捨てようっていうんだ。ガキどものためだのなんだのって言い訳で、自分を慰めるのだけは許さない。おまえは、このガキどもを捨てるんだ。見捨て、放りだしていくんだ。それが事実だ」

「あ、あの！」掠れるような声だったが、メルはようやっと声を出せた。「ほ、本当に違うんです。いえ、その、未来から来たっていうのは本当なんですけど、別にチェスターさんに預けられに来たわけじゃないんです」

ディオは激しく同意して頷いた。

「そう言い含められているんだな？」

一転、余(あま)りに優(やさ)しい声だった。まさに不意打ち。二人に向けられた微笑みからは皮肉めいた色は消え、なんともいえない不思議な優しさがにじんでいて、メルもディオも、あやうくその胸に飛び込んでしまうところだった。

メルは首を振って誘惑(ゆうわく)を振り切った。「本当に違うんです！　だって、パパとママがちゃんと帰りを待ってくれているんです」

チェスターはふっと息を吐(つ)いた。「そう言って連れてこられて、あとで気づくんだ――もう、帰る場所はない、ってな」

「違うっていってんだろ！」ディオが吠(ほ)えた。「変なにーちゃんだな！　オレたちは『精霊の試練』を受けるのに、クレスさんに会いに来たんだよ！　もっと過去に行って、ちゃんとクラースのおっちゃんから紹介状ももらってきたんだ！」

「あ、ちょっと！」

ディオは止める間もなくメルのポーチから手紙を抜き出し、チェスターの方へと突き出した。

「ほら！」

チェスターはいぶかしげな表情を浮かべながら窓から離れると、ディオの手から手紙を受け取り、表と裏を何度も返して見、そうしてノルンを振り返った。

「確かに、クラースのおっさんの字だが……」

「本当です」とメルは言った。「わたしたち、自分の時代でアーチェさんにもお会いしてます」

「あいつと？」

「はい。親しくしていただいて、食事も御馳走(ごちそう)になりました」

それを聞くとチェスターは、何を思い出したのかぞっとした顔をした。「食ったのか？　あいつの料理を？」

　メルは頷いたが、内心、しまったと考えた。チェスターの顔に疑(うたが)わしげな色が浮かんだのだ。どうやらアーチェの料理の話をしたのは逆効果だったようだ。この時代では、まだ料理はうまくなっていなかったのかも知れない。

「じれったいな！　開けてみればわかるだろ！」ディオは言った。「ほら、早く！」

「これはクレス宛(あて)の手紙だろう？　勝手に俺が開けるわけにはいかないさ」指の間でくるくると手紙をもてあそぶ。「……アーチェのやつ、デザートには何を出した？」

　正念場(しょうねんば)だ、とメルは感じた。頭の中で『伝説』をひっくり返して、デザートに関する情報を拾いだそうとしたが、そんなことまではやはりのっていなかった。ならば、出されたものの名をそのまま言うしかない。

（どうか、好きなものがずっと変わっていませんように）メルは祈(いの)る思いだった。「……フルーツポンチです」

「あいかわらずお子様な舌なんだな」ふっと笑い、チェスターはノルンを向いた。「……俺の勘違いだったってわけか？」

「そうですね」

ノルンがこともなげに言うと、チェスターは頭を掻いた。その時に浮かんだ照れくさそうな微笑みは、なんともいえぬ愛らしさがあって、メルはなぜだか胸の奥を殴られたような気がした。なんなのかはわからない。しかしどうしてか、じわじわと体が熱くなるのはわかった。

「悪かった」チェスターは両手を軽く上げた。「ここのところ立て続けでな。てっきり、また、だと思っちまった」

「チェスター・バークライト。あなたは様々な理由で親を失った子供を引き取り、世話をしていますね。それは、あなたもまた幼い頃に親を亡くし、そうした子供達には導き手が必要だと言うことを知っているから……そうですね？」

「よせよ。そんな御大層な理由じゃない。俺はただ、放っておけないだけさ。……だが、噂が広がって、最近はわざわざここまで捨てに来る奴が増えちまってな。クレスにも迷惑をかけてる」チェスターはメルとディオを向いた。「あいにくクレスは視察に出かけて留守だ。明日の午前中には帰る予定だから、泊まっていきな。ガキどもがわんさといるから騒がしいとは思うが」

「いえ、わたしたちは宿に――」

「あいにく、いまのトーティスには宿なんかないぜ。観光客なんか誰も来ないからな」

メルとディオは顔を見合わせた。どうやら他に選択肢はないようだ。申し出を蹴ってまで野宿をする意味は見いだせなかった。

「それじゃあ、お世話になります」

ぺこり、と頭を下げると、チェスターはニヤリとした。

「決まりだな。宿代はいらねえが、代わりに色々と手伝ってもらうぜ。いやあ、クレスもミントもいなくて難儀してたんだ」

メルとディオは、謀られた、とすぐに気づいたが、不思議と不快感はなかった。

あてがわれた部屋は、二段ベッドがいくつも並ぶ大部屋だった。床には子供のものと思われる服や玩具が散乱して足の踏み場もなく、子供部屋特有の甘酸っぱい匂いがする。

「しょうがねえなあ、あいつらは」チェスターは溜息をつくと、足で乱暴に床に道を作って窓際のベッドへと向かい、放り込まれていた本や人形を片づけながら、その上と下を使うように言った。「クルール、だっけか？　そいつはおまえたちのどっちかのベッドで一緒でいいだろ？」

「はい」と答えてメルが隣を見ると、ディオも返事をしようとしたようで、声を飲み込んだ睨んだ顔と目が合った。小さく肩を竦めて、あとは知らん顔をして側に寄ってきたクルールのふ

わふわした頭を撫(な)でた。「おとなしくしてるのよ」
きゅー、と鳴いてクルールは手を上げる。
その時、廊下(ろうか)をぱたぱたと子供が走ってくる音が聞こえて、チェスターは顔を上げた。彼の眉(まゆ)が微(かす)かに曇ったのを、メルは見逃(みのが)さなかった。
「エリオット、どうした？」
チェスターは、少年が顔を出す前にそう声をかけ、手にしていた人形をベッドの上段に放り投げ、メルとディオを置いて部屋の唯一(ゆいいつ)の出入り口へと急いだ。灰色をした短(たん)ブーツに蹴られて、木の怪物が横倒しになってカタカタと鳴った。
開け放したままの扉(とびら)の向こうに現れたのは、泣きべそをかいた七歳くらいの少年で、服の袖(そで)が破けて、肩を擦(す)りむいて血が滲(にじ)んでいた。頬(ほお)には涙の跡がくっきりと残っている。服にはくっきりと靴裏(くつうら)の跡が残っていて、誰かに蹴られたのは明らかだった。
「お、おにいちゃん、リックスが……」
少年は、それだけ言って鼻をすすると、後はもう言葉にならず、しゃくりあげるばかりだった。チェスターは少年――エリオットの頭を少し乱暴に撫でて抱きしめてやった。鼻と涎(よだれ)が、肩にべっとりとついて、メルは思わず眉を顰(しか)めたが、彼が気にしたようすは少しもなかった。
「メル、ディオ」床に落ちていたタオルでエリオットの顔を乱暴に拭(ふ)く。「ちょっと、こいつを頼むわ」

こちらの返事は聞かず、チェスターはタオルをベッドの手摺りに投げると、振り返らずに廊下の向こう側へとさっさといってしまい、エリオットはすぐにまた半べそになり、メルとディオが止める間もなく、チェスターの後を追いかけていってしまった。
「どうする？」メルが訊くと、ディオは肩を竦めた。
「追いかけるしかないだろ？」
「うきゅ」
クルールも賛成のようだ。
二人と一匹は、頷き合うと少年の後を追って廊下を走った。すぐに遅れたクルールを、ディオが抱えあげる。ぐずりながらもエリオットはなかなか足が速い。扉が閉まり、外にいったのがわかった。二人と一匹も後に続いた。
チェスターはすぐに見つかった。
探すまでもなく、クレスの家の門を出てすぐに、すらりとした姿を見つけることができた。橋の向こう、教会前の広場である。広場では、二人の少年が取っ組み合いの喧嘩をしていて、大人たちがそれを遠巻きに見ている。チェスターは大股で真っ直ぐに喧嘩へと近づいていくと、あっという間に二人を分けてしまった。
一人は髪の短い、いかにもわんぱくそうな少年で、鼻血が埃っぽい服をさらに汚していた。もう一人は、どちらかといえば線の細い、着ている服も、破れてはいたがどことなく上等そう

で、こちらも鼻血を流していた。
二人は引き剝がされても、何とか互いをぶちのめそうと腕を振り回していたが、チェスターに襟首を摑まれていてはどうすることもできなかった。
エリオットはそんなチェスターの側に寄ると、彼の服の裾を手を伸ばしてつまんで、そうしてようやく安心したようだった。ぐずりもおさまり、あとはチェスターの背中を見上げている。
「リックス、やめろ」
厳しい声が降ると、短い髪の少年は首を竦めてようやく腕を振りまわすのをやめた。もう一人の少年も同じである。
メルとディオは、橋を渡りきる手前で立ち止まり、他の人々と同じように彼らを遠巻きにした。人々の間に互いに遠慮がちな空気があることを、二人は敏感に感じ取った。何処まで相手に踏み込んでよいものか測りかねている、といった風だ。
「離せよ」といったのは、身なりの良い少年の方だった。「襟が伸びちゃうだろ」
その口の利きようにリックスは再び腕を振り上げたが、チェスターに一睨みされて手を下ろした。
彼は、少年の襟を摑んでいた手を放してやった。
少年は襟と上着の皺を直すと、鼻を鳴らし、唾を吐いた。ふてぶてしい態度だったが、唾は

血が混じって赤かった。口の中も切っているのだろう。

「大丈夫か？」チェスターはリックスの襟を掴んだまま少年に訊いた。「すまなかったな」

少年は答えない。

「理由も聞かずに謝るのかよ！」襟を掴まれたまま、リックスは怒鳴った。「悪いのはそいつだ！　そいつがオレたちのことを――」

「リックス！」それ以上の言葉を禁じる、切りつけるような声だった。「黙ってろ」

リックスはうつむいて唇を噛んだ。涙が見る間に盛り上がり、今にも落ちそうになる。

「……ちきしょう」

少年はその合間にも、ズボンを叩いて土を落とし、上着についた埃を払った。その顔には今や不遜とも言える笑みが浮かんでいる。

（嫌な顔）と、メルは感じた。（あんな嫌な笑い方をする子が、正しいなんてことがあるのかしら？……どうしてチェスターさんは、リックス君の言い分を聞こうとしないの？　それって不公平だわ）

憤りが胸で小さくとぐろを巻いた。メルは一言問いただそうか、と足を踏み出しかけた。その時――

「ワーラン！」

人の輪の中から声が掛かり、少年がぐるんと声の方を振り返った。前の人間を押し退けるよ

うに現れたのは、それなりに太った中年の男だった。身なりも良く、一目でそこそこの資産家だと分かる。
「父さま！」
少年は顔を輝かせて男の元へと駆け寄ると、肩を並べてきびすを返し、チェスターの方へとやってきた。勝ち誇った顔をしている。
「わしの息子をこんな目にあわせたのはその小僧か」鼻を鳴らす仕草がそっくりだった。「この服がいくらするかわかっているのか？　ユークリッド一腕のいい職人に仕立てさせた最高級品だぞ？」
男が何者なのかは、すぐにわかった。二人と一匹の側で、あれは誰か、と訊ねた男がいて、材木商のシェイフ・コパンだ、と連れの男が答えるのが聞こえたのだ。初めに訊いた男は、あいつがあの、と納得した様子だったが、無論、この時代に来て間もないメルとディオには何もわからなかった。ただ、男が金持ちの商人であり、名前が知られているということがわかっただけである。しかし、男への反応を見れば、人に好かれていないことはわかった。
「息子の服一着で、その小僧の服が百着は作れるのだぞ？」男は不遜にも、チェスターの胸を汚らしい指で突いた。「無論、弁償するのだな？」
「あいつ！」勇者に対する余りの非礼に、ディオは唸った。「信じらんねえ！」
だが、無理もない。チェスターを始め、彼らが勇者として名を馳せるのは、はるか未来にな

ってからなのだ。この時代の人々は、彼らの活躍をまだ知らない。知っているのは、アルヴァニスタといまはまだあるミッドガルズの王族に近い一部の人間、そしてユミルの森の一握りのエルフだけだった。

勇者達は決して自分達の活躍を喧伝しようとはしなかったようだ。むしろ騒ぎになるのを恐れて姿を隠した節もある。クラースとミラルドは生涯を研究者として終えたようであったし、クレス、ミント、チェスター、アーチェにしても、彼らが最後に魔人を撃退したアセリア暦四三五四年においての所在はわかっていなかったらしい。だからこそ、アルヴァニスタ王は、時空を越えて、若きクレス達に助けを求めるしかなかったのだ、というのが伝説における推察だった。

「たかが子供の喧嘩じゃないか、コパンさん」チェスターはわずかに肩を竦ませて皮肉めいた笑みを浮かべた。「服ぐらい破れもするさ」

「そんなガキの服と、わしの息子の服を同じだというのか？　いいか」ぐい、とコパンはさらに指をチェスターの胸に押し込んだ。「わしの息子は、おまえが集めているガキ共とは何もかも違うんだ。育ちも、教養も、食事も、何もかも、だ。断じて同じではない。そのガキの服など、我が家では雑巾にもならんわ！　大体、貴様ら、誰のおかげでこの村を建て直すことができたと思っているんだ？　わしが安く材木を売ってやったからだろうが！　わしが――」

「おっと！　そいつは違うな」

チェスターは右手の人指し指をすっと立て、コパンの喉元へ突き付けた。
ただの指である。
だが商人はまるで抜身(ぬきみ)の短刀であるかのように、ぶるりとたるんだ肉を震わせて、声をつまらせた。
「う……」
「俺が材木の相場を知らないとでも思ってるのか？　田舎者(いなかもの)だと思って馬鹿(ばか)にしてもらっちゃ困るぜ。あんたの運んでくる材木は、手間賃(てまちん)を考えても、ユークリッドの材木商の相場よりも僅(わず)かばかり割高だ。それでも我慢(がまん)してきたのは、他の連中はこんな田舎まで運んじゃくれないからさ。そんなこともわからなかったのか？」
そうだ、と言う声が人の輪の中から上がった。だが、姿は見せない。コパンに一睨みされると、声はすぐに消えた。
「コパンさんよ」すう、とチェスターの切れ長の目はさらに細くなって光が籠(こも)った。「俺やクレスが、知らねえとでも思ってるのか？」
「な、なにをだ……？」
にやり、としてチェスターはコパンの耳に口を寄せると、何事かをささやいた。すると、見る間にコパンの顔は青くなり、白くなり、陸(おか)に上がった魚のように口をぱくぱくと動かした。
「な？」離れ、チェスターはコパンの肩を叩いた。「そういうこった」

コパンは何か固いものを飲み込んだような表情になった。悪い顔色のまま、乱暴にきびすを返すと息子の抗議はまったく聞かず、それどころか頭を殴りつけ、泣きわめくのを引きずるようにして、人垣を乱暴に払いのけ、行ってしまった。
「よしっ！」
ディオが隣で小さく拳を握りこんだ。メルは、人々の間から拍手が起こるかと思ったが、そうはならなかった。それどころか、これからの材木は大丈夫なのか、と心配する者もおり、騒ぎばかりおこして、という言葉も聞こえた。
「村の生き残りかなんか知らないけど、あんなに孤児ばかり集めてどうするつもりなんだか……。叔父さんの紹介で引っ越してきたけど、これじゃ子供たちにどんな悪い影響があるかわからないわ」
擦れ違った中年の女が、隣の女にそうこぼしたのをメルもディオも聞いた。
「まったく。昨日もほら、食べ物屋の『フォーク』で果物が盗まれたっていうじゃない？　あの子たちの仕業じゃないか、って噂よ」
人々はあっという間に散って行き、広場にはメルとディオを除いて、八人ほどの子供が残るばかりになった。
「まったくおまえは……喧嘩すんなっていつも言ってんだろ？」チェスターはため息をついて、リックスの頭を乱暴に撫でた。「いいかげん我慢することを憶えろよ」

「だってアニキ！」リックスの声は叫びのようだった。「あいつ、エリオットの帽子を踏んづけたんだ！　こんな汚い帽子、ごみと同じだっていいやがったんだ！」
「川に捨てられたの」チェスターの服をエリオットは皺になるほど強く握った。「ボクの帽子」
「だから、頭に来てぶん殴ってやったんだ！」リックスは小さな手で、頭の上のチェスターの腕をどかした。「それが悪いのかよ！」
「あたしも……」と一人の少女が口を開いた。七歳くらいで、鼻の頭にそばかすがあり、髪を耳の上でふたつにまとめている。大事そうに、布でできた人形を抱き締めるようにしていた。
「ミント先生につくってもらったお人形……壊されて……」
　チェスターに差し出すようにされた人形は、右の腕の付け根の糸が切れて外れかけていた。瞳代わりの水色のボタンも取れかかり、踏まれたのだろう、靴の跡がうっすらと残っている。
　少女の目に見る間に涙が盛り上がり、ぽろぽろとこぼれた。
「こんなことされたんだぜ！　そんなことも知らないで、なんであんなに簡単に謝っちまうんだよ！」
　リックスの言うことは正しい。だが、チェスターは毅然と言った。「だからって、ぶん殴っていいわけじゃない」
　かっとリックスの顔が赤くなった。「アニキは腰抜けだ！」

少年は脱兎のごとく走り出すと、メルとディオの脇を駆け抜け、クレスの家へ飛び込んで見えなくなった。扉の閉まる大きな音に驚いたように、川の魚がしぶきを上げて跳ねた。

（あ……）

広場を振り返ったメルは、チェスターの顔に深い悲しみが浮かんでいるのを見てしまった。だが、彼はメルに見られていることに気がつくと、たちまち表情を消して、どうしていいかわからないでいる子供達の方を振り返った。

「見せてみな、エリー」

チェスターは人形を壊されたという少女に手を差し出した。大きな綺麗な手に、人形が乗せられたのはすぐだった。彼は人形から土を丁寧に落とし、腕を軽く引いたり、ぶらさがった水色のボタンを弾いたりして様子を見ていたが、やがて薄く微笑んだ。

「……治る？」

チェスターは頷いた「ミント先生が帰ってきたら、すぐに治してもらえるさ。なんたって先生は『法術師』なんだからな」

エリーと呼ばれた少女の顔が、たちまち明るく輝いた。返された人形を胸に抱き締めると、エリーは隣の少女と顔を見合わせて微笑んだ。

「お、おにいちゃん……ボ、ボクの帽子……」

服を引かれ、チェスターはエリオットを向いて、ポケットから出したハンカチで涙と鼻水を

拭いてやった。それを無造作にまたポケットに突っ込む。

「大丈夫だ。絶対、見つけてやるから」

「ほんとうに……？」

「おう。俺が嘘いったことあるか？」

　エリオットは首を振った。

「よし」立ち上がり、ぱん、と手を叩く。「エド、カート、エリー、ジェニファー、アリス、メグ、おまえたち、今日の遊びはもうおしまいだ。先に家に帰ってな」

「さあ、皆、帰りましょう。忘れものをしないでね」

　一番年上（それでも十歳そこそこだと思えるが）なのだろう少女が皆をまとめると、チェスターに頷きかけ、クレスの家の方へ、つまりはメルたちの方へと、やってきた。子供たちが二人を気にした様子はなかったが、彼らの一番後ろにいて、エリオットに袖をつかまれるままにしていた引率の少女がメルをちらりと見た視線には、なぜか刺のようなものがあった。

「まったくまいったな……」細い指で髪をすくようにしながらチェスターが橋のところへやってきたのは、皆が家の中へ入ってすぐだった。彼は橋の欄干から体を乗り出して川を覗いた。

「多分、その辺に引っかかってるはずなんだよな」

　帽子を探しているのだろう。クルールに背中にしがみつかれたまま、ディオは反対側の欄干から同じように川を覗き、メルはチェスターと並ぶようにして下を見た。

「お、手伝ってくれるのか？」

だが、メルの言葉は答えになってはいなかった「……どうして謝ったんですか？」

「納得がいかないか？」視線は川に落としたまま、チェスターは訊いた。

「悪いのは、あの商人の子供です。それを理由も聞かずに謝ってしまうなんて、リックス君たちは、チェスターさんに裏切られたと思ったんじゃないでしょうか？」

ふっと、チェスターの顔に微笑みが浮かんだ。

「チェスターさん」メルの声が厳しいものになる。

「悪い。クレスの奴がいいそうだな、って思ってな。つい笑っちまった」チェスターは肩を竦めた。「悪気はないんだ」

「気にしてません」メルは川に視線を戻した。「別に」

「……俺が謝ったのは、リックスが暴力を振るったからさ」

「でも、先にやったのは――」

「だからって、相手の服を破いたり、歯をぶち折ったりしていいってわけじゃない」チェスターの声は、一切の反論を許さない響きを秘めていた。「違うか？」

「それは……そうかも知れないけど……」

メルは釈然としなかった。チェスターの言っていることは正論だが、そうしたことはそれこそクレス・アルベインのいいそうなことで、チェスターの口から出るのは違和感があった。伝

説の勝手なイメージを押し付けているに過ぎないとはわかっているのだが、そう思えるのだった。

チェスターの手が伸びて、メルの頭を少し乱暴に撫でた。

「言いたいことはわかるぜ。だが、なんでもかんでも、かばえばいいってもんじゃない。あそこで俺がリックスをかばえば、あいつは正しければ鉄拳を振るってもいいんだ、と考えるようになったかもしれない。俺は、そっちの方が怖かったのさ」

「でも……」

「感情的なしこりはあるよな。俺だって胸がむかつくぜ」チェスターは吐く真似をしてみせた。「けどまあ、あの馬鹿高そうな服を台無しにしてやったんだから、それで我慢するさ。コパンの奴にも一泡吹かせてやれたしな」

「あの人に何を言ったんですか？」

「なに、たいしたことじゃない」どんな子供よりもいたずらっぽい笑みをチェスターは浮かべた。「奥さんに浮気をバラすぞ、って言ってやったんだ。コパンは婿養子で、ユークリッドじゃ尻に敷かれっぱなしで、商売を理由にしょっちゅう息子と愛人を連れて村に来てるのさ。知ってるのは、俺とクレスぐらいだけどな。ばれたら丸裸で叩き出されるのは確実だから、これ以上厄介なことにならないように、明日になったらさっさと帰るだろうさ」

「まあ」

「これで少しは村も静かになるさ――お、あった！」

チェスターはひらりと欄干を飛び越えると、膝までの水を気にすることもなく川に入り、沈んで杭のところに引っかかっていた帽子を拾い上げ、メルに向かって振って見せた。

「見つかった？」ディオが側に来て訊いた。「ふーん……あれか。そんなに大事そうなものには見えないけどなあ――痛えっ！」

メルは思いきり踏んづけた足をどけて、ふん、と横を向いた。「何が大事なものかなんてそれぞれでしょ。人の心の痛みがわからない奴なんて嫌われるわよ」

「そりゃしかたないよな、クルール」いひひ、と笑って、ディオは背中のクルールの垂れた耳を引いた。「俺の心はまだまだ封印されたままだもんな」

ずきり、とメルは胸が痛むのを感じた。

だからなのだろうか。チェスターの考えがわからなかったのは。あれが、口惜しさを隠しての謝罪であったことに気がつかなかったのは。

（わかりたい）

帽子を絞って水を出すチェスターを見ながら、メルは何故だか強くそう思った。

（心を取り戻せば、わたしもチェスターさんのように、優しくなれるのかしら）

いまはまだ、わからなかった――偽物の心でいくら考えても。

「ほんとうに治せる……？」手から離れた人形をじっと見つめながら、エリーは不安そうに訊いた。「痛いことしない？」

「大丈夫よ」絨毯の敷かれた床にぺたりと座って、膝の上に乗せられた人形の頭を撫でながら、メルは微笑んだ。「ちくっとするかも知れないけど、大丈夫」

「ミント先生が帰ってくるまで待った方がいいんじゃないの？」少し意地悪く言ったのは、リックスだ。チェスターとはとっとと仲直りしたらしい。「もっとひどく――いたたたっ！」

リックスは耳をつままれてわめいた。ディオの仕業だった。「メルはぬいぐるみ造りの名人だぞ。黙って見てろよ」

ディオが指を離すと、リックスは耳を擦って少し年上の少年を睨みつけたが、ディオがにやりとすると、同じように笑い返して、からかっただけだよ、という顔をした。

メルは腰のポーチから裁縫道具を出すと、沢山の糸の中から腕を縫いつけていた糸と同じ色のものを選び、針の頭に通した。

「痛そう」

首を竦め、長い耳の垂れた兎のぬいぐるみをきつく抱き締めたのは五歳のアリスだ。隣で六歳のジェニファーは、女の子たちの中では十歳と一番年上の、橋の上で擦れ違ったとき、メルに刺のある視線を投げかけてきたメグという少女に抱きついた。

「平気平気」メルは切れた糸を抜いてから針を布に刺した。「ほら、笑ってる」

人形の口は糸で笑顔の形に縫い取られていて、当然なのだが、針を通されても変わることはなかった。だが、エリーのほうはそれで安心したようだ。
少女たちに見つめられながら、メルは器用に人形の腕を繋(つな)げてみせると、今度は瞳の方に取り掛かった。「エリーちゃん、ちょっと目を閉じててくれるかな？　この子――ええと……」
「ミリカ」
「そうそう、ミリカちゃん、見られてると恥(は)ずかしいんだって」
「うん、わかった！」
エリーは小さな両掌(りょうてのひら)をぺたりと目に張り付けた。アリス、そしてジェニファーも同じようにする。さすがにメグとリックス、八歳の双子のエドとカートはやらなかったが、エリオットだけは片目だけを隠して見せて、メルをくすりとさせた。
取れかかっていた水色のボタンを一度完全に取ってしまうと、同じ色の糸で手早く縫いつける。
「ほら、できた」
目を開けたエリーは、わあ、と声を上げ、すっかり治ったミリカを受け取って胸に強く抱きしめ、頰(ほお)を赤く染め、目をぎゅっと閉じ、白い歯を見せてにこっと笑った。
「お姉ちゃんも法術師なんだね！」
メルは立ち上がると、エリーの頭を撫(な)でた。「お人形専門のね」

エリーは人形を抱いて自分のベッドへ駆けていき、ジェニファーとアリスも後にくっついていって、ミリカを見せてくれるようにせがんだ。それから自分の人形たちを持ち寄ると、早速、遊び始めたようだった。だが、メグは義妹たちが満足そうなのを見ると、メルのほうは見ようともせずに部屋を出ていってしまった。

(なんか嫌われてるみたいだけど……)メルは首を捻った。(なんかしたっけ?)

思い当たる節はなかった。それはそうだ。橋の上と、ここと、まだ二回しか会っていないのだ。生理的に合わない人間というものはいるから、そうしたことなのかも知れない。

「きゅー♪」

クルールの楽しげな声が聞こえて振り向くと、何やら不思議な踊りを披露している最中だった。いつどこで憶えたのか、体と不釣合いの短い手足を楽しげに動かしている。リックスとデイオはついに堪らず笑い出し、腹をかかえて転げたが、エドとカートは真剣に見入り、エリオットはクルールの動きに合わせて体を揺らした。

その時、廊下をやってくる足音がして、メルは扉の方を向いた。自分が犬に《なりきって》いたら、ぴんと耳がたったに違いない。間違いなくそれはチェスターの足音だった。

「おーい、メグ。ちょっと手伝ってくれ」

扉を開けながらチェスターは言ったが、部屋の中に彼女の姿が見えないとわかると、あれ、と頭をかいた。その手には包丁が握られていて、胸には首から下げるタイプのエプロンをつけ

ている。

「メグねえちゃんなら、どっかいっちゃった」

象のぬいぐるみを、アリスの兎のぬいぐるみにぶつけるようにして遊びながら、ジェニファーがいった。

「見て、チェスターお兄ちゃん！」エリーが人形を持ってベッドを降り、彼に駆け寄ってミリカを見せた。「治ったの！」

「よかったな、エリー」チェスターはエリーの頭を撫で、エリーは嬉しそうに笑顔になると、また義姉妹の元へと駆け戻っていった。「さて……メグがいないとなると……。メル、ディオ、ちょっと手伝ってくれるか？」

メルは端からチェスターを見ていて、目が合ったときも驚かなかったが、ディオの方はリックスとじゃれていて、自分が呼ばれたことに驚いている様子だった。彼がリックスから離れる頃にはメルは立ち上がってチェスターの側に寄っていた。

「何をすればいいんですか？」

「食事の用意をな、手伝ってほしいんだよ。普段はミントやメグに手伝ってもらうんだけどな、ミントはクレスといっしょに出かけてるし、メグは……どこにいったんだ、あいつ？」

「ミント先生はクレスにーちゃんとデートだよな」と言ったのはエドである。「いひひ。泊まりなんてやるよな！」

「くだらんこと言ってんじゃないぞ、エド！……まったく、どこで憶えてくるんだか」チェスターはため息をついた。「クレスにそんな度胸がありゃあ、ミントもあんなに悩まないですむってんだ」

それは独り言のようだったから、メルは特に重ねては聞かなかった。「それでチェスターさん、わたしとディオで料理を手伝えばいいんですね？」

「ん？……ああ、そうなんだ」

「だったら」メルはディオを向いて片目をつぶってみせた。「今夜はわたしたちに任せてください。腕によりをかけますから」

ウインクの意味がわかったのだろう、ディオも頷くと、面白いことを見つけた顔になった。

「こりゃすげえ……」

テーブルに並んだ豪華な料理の数々を見て、チェスターは息をのみ、彼の養い子たちは歓声を上げた。

「すげえじゃねえか。おまえたちの親は料理人か？」

「へへへっ！　ちがうよ、チェスターの兄貴！」

（兄貴⁉）メルはぎょっとしてディオを見た。（なんて口の利き方を――）

だが、チェスターは気にする所か、どこか嬉しげな様子だった。「一体どこで憶えたんだ

——あっ、こら、おまえらっ！」

止める間もなく、皆はフォークやスプーンを手にすると、温かい湯気のたつ料理に挑みかかっていた。

「おまえら、ミントにいつも言われてんだろ！　食事の前には御祈りをだなあ——ああ、もう！　俺も喰うぞっ！」チェスターは自分もフォークを持つと、一番大きなロースト・ビーフに突き立て、リックスやエドにぶーぶー言われながら素早く絡め取り、ただのひとくちで食べてしまった。「——っ、うめえっ！」

メルもディオもその様子に笑い、自分たちもエプロンを外して席についた。メグだけは最後までお祈りをしていたが、料理には満足しているようだ。顔を見ればわかった。彼女はメルをちらと一度見て、やるじゃない、といわんばかりに微笑みながら肩を竦めてみせた。

料理人に《なりきって》つくった料理だ。おいしくて当然だ。もっともそれはたまに食べるからいいのであって、毎日じゃ飽きることをメルもディオも知っている。今日のこれは記念のようなものだ。

すべての皿は、三十分もしないうちに空になってしまった。一足先にメルはテーブルを立つと、子供たちにはミルクを、チェスターにはコーヒーを淹れた。

「手伝うわ」といって台所に現れたのは、メグだった。「チェスター兄さんから聞いたわ。あなたたち、新しい姉弟じゃないんですってね」

「だから、橋の上でわたしたちを睨んだの？」ミルクの入った鍋を火から外しながらメルは訊いた。
「気づいてたんだ。勘がいいのね」メグは少し赤くなった。「大きい子は大変なのよ。あの子たちをいじめるし」
「いままでにもあったの？」
「二回ほど――ああ、エリーとアリスとエリオットとカートのミルクには砂糖を入れるの。二、二、一、二杯づつ」メグは挽いたコーヒーの粉をフィルターに入れた。「……前のときは十五歳、その前は十四歳だったわ。どっちもあの流星雨で家族を亡くしたんだけど……兄さんの前ではいい子でいて、子供たちだけになると暴君になったわ」
「それで、どうしたの？」
「兄さんに見つかって怒られて」メグは肩を竦めた。「その夜にいなくなったわ」
「それっきり？」
「それっきり。もちろん兄さんもクレスさんも探したけど、見つからなかったの」
「村の人達とはうまくいってるの？　ええと、ちょっと批判的なことを聞いたものだから」
メグはケトルのお湯をフィルターに注いだ。たちまちコーヒーのいい香りが立ち昇って台所にひろがっていく。その香りを胸に吸い込んで、メグは、ほっと息をついた。「好意的に思ってくれる人もいるし、そうでない人もいるわ。チェスター兄さんは弓が達者でしょう？　だか

ら習いに来る子もいるけど、何かあるとすぐわたしたちのせいにする人もいる――そんな感じね」

後はコーヒーが入るまで、二人はたわいのないお喋りをした。メルの方はもちろん、未来から来たなどとはいえなかったが、自分がフレイランドの南にある孤島の出身であること、はるばる旅をしてきたのだということは話した。メグの方は、彼女もまた、ダオスの起こした（これは知られていない）流星雨で両親を亡くしたこと、ここにいる子供達のほとんどが、一年半ほど前に引きとられたのだということを話してくれた。

「一度他の家に引きとられて、また戻ってきた子もいるわ」トレーにカップをのせながら、メグが言った。「わたしなんだけどね。引き取ってくれたのはベネツィアの親戚だったんだけど、お金のかからないメイドが欲しかっただけだったの。だから逃げてきて――すぐに見つかっちゃったけど、チェスター兄さんが守ってくれたの。……その時から、わたしはほんとうに兄さんの家族になったんだって思ってるの」

空の皿が積み上げられたテーブルに、ミルクとコーヒーを運んで、食後のクッキーをかじりながら、メルはチェスターと彼の養い子達をよくよく見た。皆は彼を『兄』と呼ぶ。クレスは『さん』づけで呼び、ミントは『先生』だ。そこには『家族』としての絆があるのだな、と感じることができた。

食後のお茶も終わると、子供達は就寝の準備のために、居間を去っていった。メグも小さな

義妹達を手伝うために一緒に出ていってしまい、片付けはメルとディオとチェスターですることになった。クルールはすっかり満腹で、役に立たずに床の上に仰向けになって眠っている。
「料理は片付けまでですから」俺がやるからいい、というチェスターに、メルは指を振った。
「つくりっぱなしじゃ立派な『料理人』とはいえません」
　とはいえ『料理人』の服はとっくに脱いでいたのだが……。
　それでもチェスターは手伝い、しかもずいぶんと手慣れたもので、さすがは勝手知ったる自分の家、というところだった。
「ところで、その料理の腕だが……」
　ずいぶんと聞きたそうであったので、メルは自分達が着る衣装によってその職業、その人物の特性を複製して《なりきる》ことができることを話して聞かせた。
「それで、あの腕か」
「そうさ！」特大の皿を拭きながら、ディオは誇らしげに言った。「他にも色々なれるぜ。『手品師』だろ『漁師』だろ『役者』に『鍛冶屋』！　オレとメルは世界で唯二人の《なりきり師》さ！」
「便利なもんだな」チェスターはしみじみと言った。「俺も欲しいぜ。『立派な父親』の服とかな」
「チェスターさんは立派ですよ」さらりとメルは言った。「じゅうぶん」

「ありがとな」
チェスターは、はにかんだ笑みを浮かべ、ほんの少し耳を赤くした。
その様子が何故だか胸にきて、メルは洗い物をする動きがぎこちなくなった。錆びた蝶番が動いたときのように、ぎいぎい、と関節が鳴る気がした。つるりと皿が指から逃げて足元で粉々になったのはその直後だった。かけらを慌てて拾ったために、指を切ってしまった。ちくっとした痛みに指を見ると、みるみる赤い点が盛り上がっていく。それは不思議と綺麗だった。
ぱくり、とそれがチェスターの口に飲み込まれ、メルはぎょっとした。
「な、な——」ちゅるり、と彼の薄い唇から指が離れる。「な、なに、に——」
「消毒だ」こともなげにチェスターは言い、また皿洗いに戻った。「アミィの怪我も、こうやって治してやったもんさ」
メルの心臓は、これまでに感じたことがないほど激しく打って、いまにも破れてしまうのではないかと思えた。だが、それは決して不快ではなく、むしろ心地のいい痛みだった。
彼女は彼の唇の触れた指を、そっと胸に抱くようにした。
なぜだか、とても嬉しいと思え、どうかこの気持ちは『本当のわたし』が感じていることでありますように、とメルは祈りのように想った。
夜の帳が降りた暗い窓の向こうに見える明かりの方から、陽気な唄が聞こえてきて、メルとディオは耳を澄ませた。

「大工（だいく）連中の『建築歌（けんちくか）』だな」とチェスターがいった。「陽気な歌だ」
　その通りで、まるでお陽（ひ）さまそのもののような曲だ、とメルとディオも思った。

　その夜――二人は太陽の夢を見た。
　ギースの屋敷の裏山で、エリックとファーメルとクルールと自分達の四人と一匹で、大きな栗（くり）の木の下でピクニックをしている夢だった。
　太陽は、どこまでも明るく暖かく、皆を、家族を包み込んでくれていた。
　だが、夢はどこまでいっても夢なのだ、と光の裏で、影の中で、誰かがささやき、二人はそれをわかりながらも、暖かな夢の中にいつまでもいたいと思った。

2　英雄と聖女

目が覚めたとき、部屋の中には自分とディオしかいなかった。
（寝坊した!?）
朝は揃って朝食のテーブルにつくと聞いていたメルは慌ててベッドの二階から飛び降り、ディオの体をゆさぶった。
「ディオ、起きて！　寝坊したわ！」
「なんだよ……」まだ眠たそうに目を擦って、ディオは不満そうに呟いた。「もう朝？」
「朝よ。皆、もういないわ。朝御飯に遅刻よ」
「なんだ、そんなことかよ」ディオは欠伸をした。「オレたちはお客さんだから、気にしないでゆっくりしてくれって昨日チェスター兄貴にいわれたじゃんか」
ディオの肩をゆすった手が止まった。（そういえば、そうだった）
「そっか……そうだっけ……」なんだか、気が抜けて、そして少し寂しく思った。「お客さん、か」

「……変な奴(やつ)」ディオは鼻を鳴らして起き出すと、もぞもぞと着替えはじめた。「そういえばメルさあ、夢、見なかったか？」

「え？……うん、見たわ。そういえば。ええと――」

メルとディオは少し考え、そして、

「太陽の夢」

「太陽の夢」

と、同時に言った。

二人で同じ夢を見ることはよくあることだった。世の中の双子(ふたご)全(すべ)てに、自分たちと同じようなことが起きているのかどうかは知らなかったが、双子には特別なつながりがあることを証明する事例は、多く報告されている。二人にとっては同じ夢を見ることなどしょっちゅうだった。

「ピクニックしてた」とメルはベッドの上段に戻り、着替えながらいった。「パパとママとディオとわたしとクルールで」

「栗(くり)の木の下だよな」

「うん」

「……帰りたくなった？」

「少しね」

ジャケットに袖(そで)を通し、ポーチを腰(こし)につけてベッドを降りると、ディオもちょうど着替え終わったところだった。散らかった絨毯(じゅうたん)の上に立って、もう一匹の旅の仲間を探したが、脱(ぬ)ぎ捨てられた服の間にも、玩具箱(おもちゃばこ)の中にも姿(すがた)は見えない。

「クルールは？」

メルは訊(き)いたが、ディオは部屋を一通り見回して首をかしげただけだった。

「リックスたちと遊びにいったんじゃないか？」

多分そうなのだろう。もしくは、エリーたちに連れられて、彼女たちの人形の相手をさせられているかのどちらかだ。見た目も手触(てざわ)りもぬいぐるみそのもののクルールが、女の子の心をくすぐらないはずはない、とメルは考える。彼女の世界では、ぬいぐるみが嫌(きら)いな女の子などいなかった。

その時、扉(とびら)が叩(たた)かれて、チェスターの声がした。「メル、ディオ、起きてるか？」

「はい、いま起きました」だが扉を開けるのは躊躇(ためら)われた。（顔、洗いたいな）とメルは思った。（汚れてたりしたら、恥ずかしくて死んじゃうもの）

しかし洗面は部屋の中にはない。メルはポーチから小さな手鏡(てかがみ)を出して素早く顔と髪(かみ)をチェックした。ディオはその辺は無頓着(むとんちゃく)で、今日は一段と髪が跳(は)ねているのだが、気にしている様子はなかった。その上、メルの気持ちなど知らず、とっとと扉を開けてしまい、メルを慌てさせた。危(あや)うく手鏡を取り落としそうになる。

「お、もう着替えてたか。ちょうどいい。クレスたちが帰ってきたぜ」
「クレスさんたちが⁉」
ぱっと顔が輝いたのはディオだ。歓びが緊張を簡単に超えたことがメルにはわかった。なにしろ、クレス・アルベインは英雄の中の英雄。アセリア暦四四〇八年の世界で、クレスに憧れない男の子はいない。それはディオも例外ではなく、自分たちが《なりきり師》として覚醒した『聖樹祭』での劇でクレス役に選ばれたときの歓びようは尋常ではなかった。もっとも、両親の前では強がって、仕方ない、という顔をしていたが。
メルは手鏡をポーチにしまうと、くるりと巻いた毛先をさっと整えて、チェスターの前に出た。「おはようございます、チェスターさん」
「おはよう、メル」チェスターは笑顔を見せた。「準備はいいみたいだな。あいつらは居間で待ってるよ」
きびすを返したチェスターに、メルとディオも続く。
「チェスター兄貴、皆は？」
「教会に行かせた。どうせ、あの『ノルン』とかいう奴が出てくるんだろ？　あいつらを驚かせたくはないからな」
賛成だった。ディオも「幽霊だ！」と驚いて騒いだのだ。アリスやエリオットが見たら、気絶するかもしれない。

廊下の角を曲がれば、すぐに居間だ。自然と足が速くなった。

「連れてきたぜ」

チェスターの声に引かれるように足を踏み出す。ぴん、とすぐにディオの背筋が伸びて、頬が紅潮した。テーブルの側に、二人の人物が立って、メルとディオを静かに見つめていた。

茶に近い濃い金髪の青年が、クレス・アルベインに違いなかった。

明るいブラウンの瞳が微笑んでいる。勇者と呼ばれる人物にしては、顔立ちは幼さを残しており、裏も表もなく優し気だった。

額には赤いバンダナを締め、不思議な黒い光沢のあるタイツの上に、皮の胴着と鋼のプレートメイル、丸みを帯びたショルダーアーマーとガントレット、それに関節の可動部分を大きく取ったアイアンブーツをつけ、さらに深紅のマントを羽織っている。腰には、アルベイン流の剣士が使う独特の形の柄の剣が下がっていた。

では、その傍ら、柔らかな印象の女性が、ミント・アドネードなのだ。

彼女もまた、微笑んでいた。長く美しい金髪を額の真ん中で分けて左右に流し、鳶色の瞳は何処までも澄んでいて深く、まるで赤ん坊の目のように綺麗だった。顔立ちの方も、無垢の匂いを残しながらも、大人の女性の美しさも兼ね備えている。

未来では法術師の最高位だけに許される、縁を金で飾った口の広い短い袖の、胸に大きな紫の十字が縫い取られた霊服を着て、同じ紋章の入った帽子をかぶっていた。白い手袋をした手に

は、法術師の杖が握られている。喉を守るように高い襟につけられたプレートだけが、唯一のアーマーだった。

「クレス、ミント。こいつらがさっき話した、メルとディオだ」とチェスターは二人を、彼らに披露した。「俺たちも知らない未来からの訪問者だぜ」

チェスターはクレスたちの方を向いていて顔は見えなかったのだが、きっと、いたずらっ子のような笑みが浮かんでいるに違いない、とメルは思った。

「よろしく、メルちゃん、ディオくん」今朝の夢の太陽のような笑顔をクレスは浮かべた。「こんな格好でごめんよ。本当にさっき帰ってきたばかりなんだ。ああ、でも手紙の方は読ませてもらったよ」

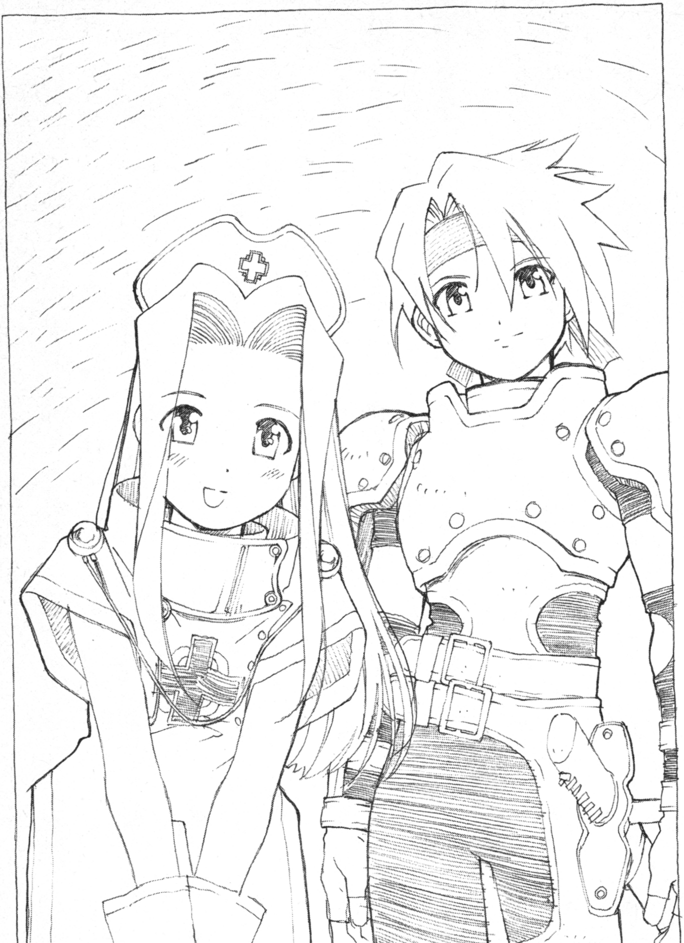
クレスは手にしていた、封の切られたクラースの紹介状を掲げてみせた。

「クラースさんもお元気そうで何よりですね」とミントがいうと、

「今はもう墓の中だけどな」とチェスターが少し意地悪く笑った。

今更だが、時空を越える不思議さを、メルは感じた。チェスターのいう通り、クラースはこの時代にはもう生きてはいない。僅か数日前には話をしていた相手だというのに、だ。そして彼と同じように、二人の本来の時代では、チェスターもクレスもミントも、メグやリックスもとうに死んでいるのだった。

では、いま自分たちが話している相手は誰なのだろう？　幽霊、ともいえなくはない。二人



の認識においては、彼らは死者なのだから。だがそれは、チェスターたちからメルたちを見た場合にも同じことが言える。この時代では二人はもちろん、両親であるエリック・フォートも、ファーメル・フォートも生まれてはいないのだ。自分たちは、幽霊ですらない。まだ、存在すらしていないのだから。

（でも、わたしたちは、ここにこうして立っている）クラースの手紙を見て、何やら思い出を話しているクレスたちを眺めながら、メルはその不思議さを考えずにはいられなかった。（ノルンは歴史に干渉してはいけない、といったけれど、そもそも干渉なんか出来るのかしら？　もし、できるなら、アミィさんを救うことも出来るんじゃ――）

そこまで考えて、メルは首をかしげた。過去、クレスたちは歴史を変えたとされている。では、変えられてしまった方の歴史は、何処へ行ってしまったのだろうか？

（もしそれが可能なら、もしそうしたなら、動機がなくなるんだから、チェスターさんは旅に出ないはずだわ。その場合、今ここで、こうしている時間もありえない、ということになるけど……でも、確かにいま、わたしたちはこうしているわけだし――）

なにがなんだかわからなくなって、メルは頭を振った。『もし』ばかりでおかしくなりそうだった。

「ごめんごめん」

というクレスの声が聞こえて、メルはハッとして物思いを断ち切った。ディオは、と横目で

見ると、相変わらず緊張したままだ。ガチガチで何の役にも立ちそうにない。
「つい、懐かしくなって話し込んじゃったよ」クレスは手紙をテーブルの上に置いた。「ところで……いるんでしょう？」
　メルとディオに言ったのではない。空に放たれた声は消えず、言葉がひとつの姿を紡ぎ出したように見えた——現れたのは、無論、ノルンである。さすがにクレスもミントも驚いた様子は見せなかった。この程度の怪異にはなれているという事か、もしくはチェスターから事前に聞いていたのかもしれない。
「クレス・アルベインとミント・アドネードですね」相変わらずのゆらゆらとした不安定な姿で、ノルンは言った。「わたしはノルン。あなたがたの言葉でいえば、精霊に近い存在です」
「はじめまして、ノルン」クレスは言い、手を差し出してから、どうやら相手に実体がないことに気がついて、照れ笑いを浮かべ、それを引っ込めた。「確かに僕がクレス・アルベインです。こちらがミント・アドネード」
　ミントは柔らかく微笑みながら会釈した。
　ノルンも微笑みを返し、それから表情を引き締めた。
「クレス・アルベインと時空の勇者たちにお願いがあります。この二人、メル・フォートとディオ・フォートは、彼らの知らぬ自らの過去の罪によって、本当の心を封印されています。その心を取り戻すためには、二人は『精霊の試練』に挑まねばなりません。過去、クラース・

F・レスターの時代において、この子達は四つの心のかけらを取り戻しました。続き、この時代の四人の精霊に会うために、あなたたちの力を貸して頂きたいのです」
「僕たちの持っている『鍵』を渡せ、ということですね」
ノルンは頷いた。「ことが済めば、『鍵』はお返しいたします」
『鍵』とは魔法素収束点と呼ばれる場所に入るためのアイテムのことだろう、とメルは推測した。クラースの時代においても『風の谷』に入るためには『風の紋章』というアイテムが必要だった。
一種の封印である。
魔法素収束点では常に、精霊が魔法素を消費し続けることで、その放出量を調整している。無限エネルギーである魔法素を悪用させないために、クラースが考えたことだ。
かつてミッドガルズ王国は、魔人ダオスに対抗するために、魔法素を使った兵器を造り、その暴走で三万からの自国の民を殺してしまうという事件を起こした。そればかりか、世界を支える大いなる樹——世界樹ユグドラシルを枯死寸前にまで追い込むという事態を引き起こしたのだ。
二度とそんなことが起きぬように、とクラースが考えた監視機構は、この時代でもやはりきちんと機能しているらしいとわかって、メルは嬉しかった。もっとも、百年後の自分達の時代でも、アーチェ・クラインがそれを引き継いでいたのだから、機能していて当然だったが、そ

れでも嬉しかった。
「……わかりました」とクレスは言った。「力を貸しましょう。クラースさんが信頼したのなら、間違いはないでしょうから」
「ありがとう、クレス・アルベイン」ノルンは微笑んだ。「……そして、あなたにはもうひとつ、お願いがあります」
「なんでしょう」
「この子達に、ダオス戦役の真実を語り聞かせて欲しいのです」
クレスの顔ばかりか、ミントも、そしてチェスターの顔までもが曇った。「それは……でも……」
「あの戦いが、あなたたちの辛い記憶に触れることはわかっています。それでも――」ノルンの顔が微かに陰った。「あの子が――ダオスが、何故、戦いを起こしたのか。あなたがあの旅で何を得たのか。それを知ることは、この子達にとって大きな意味があるのです。この子達の成長のために、ぜひ真実を教えてあげてください」
「でも」と言い澱み、クレスがちらりと見たのは、ミントの顔だった。彼女の顔は凛としてあくまで涼しげだったが、くちびるが僅かに震えていた。
「いいじゃんか、クレス」チェスターが、眉を寄せた親友の肩を叩いた。「一方的に『勇者様』なんて拝まれるのは、おまえだって趣味じゃないだろ？　クラースさんも手紙の中で嘆い

てたじゃんか――真実を伝えるのは難しい、ってよ。俺も進んで語る趣味はないが、こいつらの成長に役に立つってんなら話してやれよ」
「そんなに言うなら、チェスターが話せよ」
「やだね」チェスターはべろを出した。「それこそ俺の趣味じゃない」
「ずるいぞ！」
「クレスさん？」
ミントに柔らかい声で呼ばれ、クレスはチェスターに掴みかかろうとした手を止めてわざとらしく咳払いをした。それをみてチェスターはニヤニヤと笑い、ミントはすこし困ったような微笑みを浮かべた。
メルの横で、ディオは唖然とした顔で三人のやりとりを見つめていたが、気持ちはメルも同じだった。
（これが本当にあの『勇者』たちなんだろうか）
アーチェ・クラインは、伝説として残る話がもとより『勇者らしからぬ』ものが多いこともあったし、なにより実際に戦い、その力を見せつけられたこともあって違和感はなかった。
クラース・F・レスターにしても、その思慮深さ、学識の豊富さ、落ち着きのある大人の態度から、確かに六勇者の一人である、と思えた。
しかし、いま目の前でこうしてじゃれあっているとも思える三人は、余りに普通だった。ど

ここでもいる、仲のいい若者にしか見えない。初めて会ったときのチェスターの雰囲気は、確かに『妖精弓の射手』と呼ばれるにふさわしいものだったが、いまの姿を見ていると、あれは勘違いだったのではないかとも思えてくる。

（なあ、メル）袖を引き、ディオがこそっと囁いた。（普通だな）

やはり想いは同じだったようだ。（……がっかりした？）

（まさか）ディオは不敵な笑顔を見せた。（偉そうにしてるより、ずっと格好いいぜ）

メルも同感だった。

「わかりました、ノルン」クレスはもう一度咳払いをした。「彼らに真実を語りましょう」

「ありがとう、クレス・アルベイン」ノルンの体が揺らいだ。「頼みましたよ」

朝日に霧が拭き払われるように、ノルンの姿が部屋の中から掻き消えたのは直後だった。そうしていなくなってしまえば、全てはまるで夢のようで、現実が戻ってくるのには、少しばかり時間が必要だった。

「えーと」クレスは少し困惑したような顔を、メルとディオに向けた。「まいったな……少し整理しないと、うまく話せそうもないよ」

「いろいろあったからな」とチェスター。「かいつまんで話さなかったら、半月はかかるぞ」

「いやなこと言うなよ、チェスター」

「本当のことだろ？　ま、引き受けたのはおまえだ。せいぜい分かり易く、簡潔に話してやれ

よ？」

「クレスさん」ミントがそっとクレスの側に寄る。「いっしょに要点をまとめましょう。ね？」

「手伝ってくれるかい？」

「はい」

仲睦まじい様子に、チェスターは指笛を鳴らすと、居間の隅に置いてある簞笥にいって引出しを開け、中から何やら奇妙な物を取り出して戻った。

「それ、なんですか？」

陶器の置物だということはわかる。壺のようにも見える。だがそれは、上部の、壺でいえば口の部分に当たるところが下の膨らんだ部分に捻れ曲がって繋がっていて、どこにも水を入れることができる場所が見あたらない代物だった。だが、チェスターがそれをテーブルに置いたとき、確かに中から水の音がした。

「ちょっとかかりそうだから、先に精霊に会ってこいよ」チェスターはそう言った。「こいつは『不思議な壺』っていってな、モーリア大陸にある『不思議な塔』って呼ばれている魔法素収束点に入るための『鍵』さ。マクスウェルの爺さんがいるはずだから、挑戦してくるといい」

「おじいさんの精霊なんですか？」とメル。

「本当に爺なのかどうなのかは、わかんねえけど、爺さんの姿をしているのは確かだ。戻ってくるころには、クレスの考えもまとまってるだろ――なあ、クレス？」
「そりゃまあ……」
「と、いうわけだ」チェスターは『鍵』をメルに放り投げた。危うく落とすところを、なんとか受け止める。「ところで、モーリア大陸まではどうやっていくつもりなんだ？　一番早いのは北東にある港から船を出すのがいいんだが――」
「あれ、言ってなかったっけ？」当初の緊張はどこへやら、すっかり気分のほぐれた様子でデイオが言った。「レアバードがあるから大丈夫さ！」
「レアバードって、あのレアバードですか？」と訊いたのはミントである。「懐かしいですね、クレスさん？」
「そうだね。すごく便利だったし」
「なあ、ちょっと見せてくれよ」
「いいですけど……この時代の人達には見られないようにしないと」
「わかってるって」チェスターはメルの肩を気安げに叩いた。「おまえたちはどこに降りたんだ？　近くの林？　じゃあ出発のときもそこから飛び立つのがいいな。その時に見せてくれよ。な？」
メルはこっくりと頷いた。

「もうお昼近いから、出発は明日にした方がいいんじゃないかな？」クレスが言った。「いまからだと『不思議な塔』につくのは真夜中過ぎになってしまうからね。準備もきちんとして行った方がいい。この時代の連中は、クラースさんの時代の魔物に比べて、時代を経ている分、強くなっているからね。——ところでディオ君。君は剣士系かい？」
「特に決まってないよ。なんにだってなれるから」
「なれる？」
「クレス。こいつらは着る衣装によって、なんにでも《なりきれる》んだと。その効果は、俺が昨夜お試し済みだ。すげえぜ。なんでも『魔法』すら使えるらしいぜ」
「じゃあ、この子達はエルフなのか？」
「違うみたいだぜ」
「じゃあ、使えるわけが——」
「クラースのおっさんの例もあるだろ？ 俺たちは説明を受けたからあれが魔法とは違うものだって知ってるが、外から見ればたいして変わらない——それと同じなんじゃないか？ 『魔法のようなもの』ってことかもな」
「ふうん……」クレスはまだ納得しかねているようだった。「そうだとしても、基本は大切だってことはチェスターも認めるだろ？」
「ああ」

「というわけで、ディオ君。この時代にいる間だけでいいから、僕のところで修行してみないかい？」
「えっ⁉」ディオは素っ頓狂な声を上げて、本当に飛び上がった。「お、俺が、クレスさんの弟子になれるのっ⁉」
「たいしたことは教えられないと思うけどね」クレスは明るい笑顔を浮かべた。「どうだい？」
「や、やる！」ディオは鼻から蒸気を噴きそうに意気込んで言った。「弟子入りするよ！」
「わたしも！」
とメルは言ったが、返ってきたのは、意外そうな、困ったようなクレスの視線だった。
「こいつ、以外と頭が固くて古くさいんだぜ」からかうようにチェスターが言った。「女の子はおしとやかに、なんてのは百年古い――っと、ミントのことを言ったんじゃないぜ」
ミントは微笑んだ。「わかってますよ」
「というわけで、嬢ちゃんには俺が弓を教えてやるよ。ミントに法術の心得とかを教わるのもいいかもな。きっと役にたつぜ」
「あ、ありがとうございます！」
メルは深々と頭を下げたが、その拍子に壷がつるりと手から滑った。
「あっ！」

誰もが、割れる、と思った。
だが、壺は床（ゆか）に落ちる寸前、何気なく出されたチェスターの靴（くつ）の甲に、ふわり、と乗って傷ひとつつかずにすんだ。
心臓は早鐘（はやがね）のようだった。メルはしゃがんで今度こそ落とさないように壺を大事に持つと、チェスターを見上げた。
メルを見下ろす彼の瞳は、どこまでも暖かく、そして優しかった。

翌早朝、子供たちがまだ起き出さないうちに、メルとディオ、そしてクルールは『不思議な塔』へ向けて出発した。
村の近くの林で、クレス、チェスター、ミントはこれを見送っている。
「改造してあるけど、これは僕のレアバードだ！」とクレスは解凍（かいとう）された飛行機械を目にして喜びを隠さなかった。「なつかしいなあ……二人乗りみたいだけど、大人じゃ無理かな」
「なんだ、クレス？　ミントと遠乗りに行くつもりか？」
「そ、そんなんじゃないよ！」
「ムキになるなよ」チェスターはクレスの肩を叩いた。「わかってるって」
ミントが笑い、チェスターも、メルとディオも笑った。クルールもどことなく楽しげだった。

旅立ちの朝としては、申し分のない雰囲気だったといえるだろう。現に、メルとディオは緊張した様子もなく、ピクニックにでも行くかのように出発している。

故に彼らは、レアバードの姿が見えなくなった後に三人の顔が曇ったことには、気づきようもなかった。

「……全部、話すのか？」空を見上げながら、チェスターは呟いた。「あのことも？」

「ああ」と答えたクレスの声は重く、腹に鉄でも飲み込んでいるかのようだった。「話すさ」

「きっと、わかってくれますよ」

ミントの声にクレスは頷いたが、確信を持てずにいるのは明らかだった。

村で、朝を告げる鐘が鳴った。

「戻ろうぜ。ガキどもが起き出す時間だ。家にいないとな」

子供たちは――とくにアリスとジェニファーは、目覚めてチェスターの姿が見えないと、ひどく取り乱すのだった。それはあの二人が村の入り口に、無造作に置き去りにされた日のことを思い出すからなのかも知れなかった。

三人は連れだって村へと戻った。途中、誰も口を利かなかったのは、とても珍しいことだ。それが、昨夜、メルとディオから未来での人々の暮らしぶりについて聞いてしまったせいだということは、分かっていた。

二人は――特にメルの方は、口が固く、なかなか話を聞き出せなかったが、それでもようや

く肝心なことを聞くことができた。
《大消失》である。
魔法素が消えた後の世界のことを、メルがトイレに立った隙に、ディオが不満混じりに話してくれたのだった。ディオはメルを見て、しまった、という顔をしたが、もう遅かった。それきり二人が未来の話をすることはなく、もっぱらクラースや、過去のアーチェの話に終始して、ディオの話はただの世間話だったかのようにその中に埋没したと装われたが、三人は忘れるものではなかった。
だが全員が、表面上は少なくともその態度を貫いた。
その中で、話を逸らすためにか、メルが訊いたことがある。
「そういえば、アーチェさんは、いまどこにいるんですか？」
そのことだ。
質問に、チェスターは鼻を鳴らした。「さあな。俺たちに魔法素収束点の管理人を押しつけたあと、『遊び倒すっ！』って、どっかにいっちまったよ」
その通りだった。再会もそこそこに、アーチェは行ってしまったのだ。村を出ていってから、かれこれ一年になる。
ミントは「照れてるんですよ。わたしたちには別れて一年と少ししかたってなくても、アーチェさんにとっては、チェスターさんに逢うのは百年ぶりだったんですから」と言ったが、そ

れにしては放浪が長すぎる、とクレスも思うのだった。

「もう帰ってきますよ」

昨夜も、ミントが慰めるようにいったが、チェスターは肩を竦めて、テーブルに背中を向けた。

その背中を見つめて、メルがとまどったような表情を浮かべていたのを、ミントは思い出した。

(あの瞳は、なんだったのかしら?)

よもやメルが、恋心に似た憧れを持て余しているなどとは、メルに劣らずその方面の経験値の低いミントには、わかるはずもなかった。

「それじゃあ、朝課がありますから」

と言い、ミントは教会の前で二人と別れると、聖堂の中へと消えた。入れ替わりに出てきた少女は、鐘を鳴らす仕事を引き受けている近所の子供だ。少女はクレスとチェスターに細い声で「おはようございます」と言って、食べ物屋の『フォーク』へと駆けていった。手に握りしめているだろう銅貨で、朝のミルクを買うのだろう。

「俺たちも飯の支度に取り掛かろうぜ」気分を切り換えたようにチェスターは言った。「わんぱくどもが腹を空かせて起きてくる前に、テーブルに御馳走を並べないとな。――なあ、クレス。どう受け止めるかはあいつら次第だ。あれこれ考えたって、どうにかなる訳じゃないさ」

クレスは頷いた。「わかってるさ。……でも、こうやってことあるごとに僕は考えさせられる。僕のしてきた決断は本当に正しかったのか、って」
「……誰だってそうさ」
チェスターは青く晴れた空を見上げ、ふう、と小さく息をついたが、それは誰の耳にも届かなかった。

二人と一匹が『不思議な塔』に到着したのは、その日の午後三時すぎだった。
塔は、チェスターから預かった『鍵』と同じ形をしていた。上に真っ直ぐ伸びてはいない。中の構造がどうなっているのかはわからなかったが、高さが、クラースの時代にあった『大地の洞窟』と同じ、十四階層だとは聞いていた。
誰にも見られないように気をつけながら、レアバードを着地させ、ウイングパックに圧縮してポーチにしまった。
それにしても、これがクレスの愛機であったとは、ディオにとってはそれがわかっただけでも、この時代に来た価値があったというものだった。できれば翼のところにサインが欲しかったが、今朝は頼みそこなってしまった。
(帰ったら絶対にもらうぞ)とディオは決めていた。(パパに見せたらどんな顔するかな)
それを思うと、帰るのがとても楽しみだった。

二人と一匹は塔の入り口をくぐって中に入った。例によって、一階には巨大な扉があって、行く手を遮(さえぎ)っている。床には『地』『水』『火』『風』を現したレリーフが埋(う)め込(こ)まれていた。

「よし、やるか」

ディオはポーチから『不思議な壺』を出すと、扉の前で掲(かか)げた。すると壺がゆっくりと輝きだして、ついには辺(あた)りを白い闇(やみ)で覆(おお)い、それが晴れたときには扉は跡形(あとかた)もなく消(き)え失(う)せていた。

今から登れば、明日の朝には最上階にたどりつける、とディオは目算(もくさん)した。無論それは、魔物たちに必要以上にてこずらなかった場合、だが。

「マクスウェルって、どんな精霊なんだと思う?」上へと続く階段の脇(わき)で、通常の剣士系の最上級職『剣豪(けんごう)』の装備に着替えながら、ディオは訊いた。「爺さん、ってチェスター兄貴、いってたよな。たいしたことないかも」

「冗談でしょ」メルは、祈(いの)りの力でどんな怪我(けが)も治す法術師の最上級職『プリーステス』に着替えながら、そう答えた。「マクスウェル、っていうのはラプラスと並ぶとても強い精霊よ。二人とも物理の特定の現象を引き起こすことで知られていて、学者たちの間じゃ、魔物として恐れられてるんだから」

「はー……よく知ってんな」

「パパの本の受け売りだけどね」ぺろり、とメルは舌(した)を出した。「……さあ、いきましょ」

「おう」

ディオは剣を抜くと、常のごとく先頭に立って、魔物たちの待つ二階への階段に足をかけた。クルールが真ん中、メルがその後に続く。

薄闇の中に二人と一匹は、一人、また一人と飲み込まれていく。

そうして、メルの姿も闇の中に消えてしまうと、まるで幻であったかのように、入り口も、階段も消え失せ、もはや、どこを探しても見つからないのだった。

ディオの目算通り、十三階に辿り着いたのは夜明けの少し前、といった時間だった。

とはいえ、クレスの忠告通り、敵はなかなか手強かった。マクスウェルとの戦いに備えて、精神への負担をできるだけ軽減しようと、法術になるべく頼らない戦いをしたために、体力回復剤の『グミ』の消費が激しかった。途中で拾ったものを合わせても、もうほとんど残っていない。

だが、悪いことばかりでもなかった。

本来、砂漠にしかいないはずの怪物、バジリスクがここにいたのだ。

バジリスクは、加工すれば万能薬になる非常に硬い鱗と、鋼鉄を紙のように噛み裂く鋭い牙の並んだ巨大な口を持つ。一見したところ目がないが、実は口の奥で舌に擬態しているのが目であり、その目に睨まれたら最後、被害者は石にされてしまう。

こんな怪物と出会って何が幸運なのかといえば、『バジリスクの抜け殻』を手に入れるチャンスだからである。バジリスクは蛇と同じく脱皮をする。このとき、皮には鱗がごっそり残るのでそのまま薬屋に売ってもたいした報酬になるのだが、メルとディオの考えは違った。抜け殻を加工し、衣装にしてしまおうというのが、二人の考えだった。

怪物といわれる種に《なりきる》ことについては以前から考え、試し、そこそこの成果を得ている。熊の毛皮を買ってきて服に仕立ててもらいディオが着たところ、素晴らしい動きで川を泳ぐ魚を捕まえることができたり、蜂を恐れずに蜂蜜を採ることもできた。

そうしたこともあって、伝説ともいわれているバジリスクの抜け殻は《なりきり師》の二人にとってたいした宝だった。果たして相手を睨んだだけで石化させられるかどうかはわからなかったが、防御の面だけ考えたとしても使いでは良さそうだった。

他にも、バンパイアのマントを手に入れたりしたが、すぐに蝙蝠の死体に変わってしまい、衣装の材料にはならなかった。この例のように、怪物ならなんでも衣装にできるわけではなく、むしろ利用できる方が少ない。硬い鱗や毛皮を持つ怪物が理想的だが、加工そのものが難しいものがほとんどなので、さらに限定されてしまうのだった。

バジリスクはその点、鱗は硬いが、皮の部分は柔らかいので加工には適していそうだった。抜け殻は全部で三つ手に入り、今はディオのポーチの中にしまわれている。メルが「蛇のお化けの皮を入れるなんてイヤ！」と譲らなかったからだが、弁当がそっちに入っていることを考

えると、臭いが移りそうだったからそれでよかったのかもしれない、とディオは目の前に並べられたサンドイッチを見て考えた。
（バジリスク臭いサンドイッチなんて喰いたくないもんな）
ディオはひとつをとって、一口で半分ほどを食べた。耳のついたパンに、バターとマスタードがたっぷりと塗られていて、間に新鮮な野菜と焙った鴨肉を薄切りしたものがたっぷりと入っている。
ありがたくて涙が出てもおかしくなかった。なにしろこのサンドイッチは、ミント・アドネードが、暗いうちに起きて作ってくれたものなのだ。
「ミントさんて、本当にお料理上手なのね」メルは感心したようにいった。「サンドイッチなんて誰が作ったってそんなに変わりないって思ってたけど、すごくおいしい」
「ここにいる間に習おうぜ、メル」二つ目のサンドイッチにかぶりつきながら、ディオはいった。「そんで、パパとママを驚かしてやるんだ。そういうおみやげも面白いだろ？　そうだ！『聖女のサンドイッチ』って名前を付けて売りに出すってのは？」
「もう、ディオったら」メルは首を振った。「商人に《なりきってる》時みたいなことといわないでよ」
「いい考えだと思うけどなあ……だろ、クルール？」
「うきゅ？」卵のサンドイッチを食べていたクルールは、ハムスターのように口を動かしたま

ま、僅かに首を傾げた。「きゅー」
「わかってるのかな」
「馬鹿なこといってる、って思ってるわよ——あ！　思い出した！」
「なに？」
「ディオッ！」メルはディオの鼻先に指を突きつけ、バジリスクも顔負けという迫力で睨んだ。「未来のことを話したわね！」
　彼女がいっているのは《大消失》のことだろうとすぐわかった。「あれは悪かったよ。……でもさあ、三人がかりで絡め手で来られたら、喋っちゃうって」
「わかるけどね」メルはため息をついた。「これからはもっと気をつけましょ——お互いに」
「うん」
「きゅー」まるで、ボクもわかった、とでもいうように、ぺこり、とクルールも頭を下げた。
「やだ、クルールはいいのよ」
「うきゅ？」
「んもう、かわいいんだから！」メルはクルールを抱き締めて顔の半ばまでをふかふかの毛皮に埋めた。「あー、このまま眠りたいなあ」
「ばか言ってんなよ。そろそろいこうぜ」
「……うん」

メルは名残惜しそうにしながらも体を離し、ディオとふたりでてきぱきとゴミやら敷布やらを片付けた。

それがすむと、ディオは装備の確認をした。幾多の戦闘で鎧にも剣にも傷はついていたが、使いものにならなくなるような致命的なものはなかった。

「――よし。メル、そっちは？」

「大丈夫。ＯＫよ」

「きゅー！」

「クルールも準備ＯＫみたいだな。じゃあ、行くか」

メルとクルールは頷き、ディオは一人と一匹を従えるようにして、最上階への階段を登った。

『不思議な塔』の第十四階層は、床が緑と薄緑のチェック模様をしていて、その中央に、一階で見かけた『地』『水』『火』『風』の紋章をあしらったレリーフが埋め込まれていた。四方の壁は大理石のようだ。だが、何より異様だったのは、部屋の奥の左右に、天井まで届く巨大な砂時計が置かれていることだった。真ん中でくびれた硝子の筒の中を、さらさらと音を立てて砂が落ちて行く。その向こうには本棚が並び、壁には見たこともない不思議な絵がかかっていた。

（なんか、ずいぶん人間くさい部屋だな）ディオはひそひそと言った。（パパやクラースさん

の部屋みたいだ）
メルは頷いた。（ほんとう。どんな精霊なのかしら？）
その時――
「ふぉっ、ふぉっ、ふぉっ」
部屋の中に人の良さそうな笑い声が響き渡り、二人と一匹は互いに背を向け、三角形を作るようにして身構えた。
「これこれ、そんなに固くなるでない」
「あそこ！」
メルが言って指さしたのは、二つの砂時計の間だった。ディオが振り返ったとき、その場所では向こう側の景色が歪み、そこからにじみでるように、おそらくはこれがこの塔の主なのであろう精霊が姿を現すところだった。
（こいつがマクスウェルか）
チェスターの言葉通り、姿は人間の老爺だった。白い立派な口髭と、同じくらい立派な白い眉に目が埋もれており、アルヴァニスタの王立学院の制服のような服を着て、頭には学院生が卒業式などでかぶる四角い帽子を乗せている。だが明らかに人ではなく精霊であるとわかるのは、その老爺は泡のような物質の中に入って、ふわふわと宙に浮いているからだった。
「よくここまで登ってきたのう。おぬしたちがいずれ来ることは、ずいぶん前からわかってお

った。クラース・F・レスターがそう言い残したからの」
「クラースさんが？」といったのはメルだ。
「そうじゃよ。はじめまして、じゃな。わしがマクスウェルじゃ。『四元素の統括者』と呼ぶものもいるがの。——ところでおぬしたちは、この世界の成り立ちについて考えたことはあるかの？」
「え？」
唐突な問いに、ディオは戸惑ったが、マクスウェルが意に介した様子はなかった。
「世界を構成するのは四つの元素、すなわち『地』『水』『火』『風』じゃ。そもそも世界の始まりは今から一五六七億三千万年前にこの宇宙を内包する別の宇宙が——」
「ち、ちょっと待った爺さん！」
「ん、なんじゃ？」
「あのさ、オレたち勉強しに来たわけじゃなくて——」
「おお、そうじゃったな」マクスウェルは手を叩いた。「ついこの間、クレス・アルベインにも言われたばかりじゃというのに……忘れっぽくなって困るわい」
「クレスさんがここに来たんですか？」
「そうじゃよ。あの青年は実にマメでな。前の管理人など、三年に一度、顔を見せればいい方じゃったが、クレス・アルベインはこの間も可愛らしい彼女を連れてきての。この二人がま

た、なんとも初々しゅうて、もどかしげなラブラブぶりがなんとものう」

「きゅ……」クルールが、うんざり、といった様子で耳を下げた。

（まさかこっちの士気を下げる作戦じゃないよな）そう勘ぐりたくなるほど、マクスウェルの話しぶりには緊張感のかけらもなかった。「……あー爺さん、そういう話はとりあえず後で、ってことでいいかな？」

「ん？――おー、すまんすまん。年を取るとどうも話が長くなっていかんのお」マクスウェルは大きくひとつ咳をした。「では、そろそろ始めるかの？」

「！」

　部屋の雰囲気が一変した。緊張で空気が震えているのがわかる。年寄りなどとんでもない。恐ろしいまでの力を感じる。

（『四元素の統括者』ってあだ名は伊達じゃない、ってことか）ディオは乾いたくちびるを軽く嘗めた。（でも、勝てない相手じゃないぜ。アーチェさんと比べたら、全然、怖くない）

「うきゅっ！」と一声鳴いて、クルールが変化する。白毛皮の、一見すると兎のようにも見える姿だ。だが見た目とは裏腹に、結構、強力な技を使う。先制したのは、クルールのその技だった。毛が逆立ち、青火花が散ったかと思った瞬間、マクスウェルの頭上に、稲妻が落ちた！

（よしっ！）

　ディオは引き抜いた剣の柄を握る手に力を込めた。魔法使いの『ライトニング』に似たこの

技は、相手の体を灼くことはもちろん、他にも電気衝撃で相手の体を短い間、痺れさせて動きを鈍くさせることができるという付加効果がある。その隙をついて、強烈な一撃を見舞おうと考えていたのだが、足を踏み出す前に異変に気がつき、はっと踏みとどまった。
稲妻がマクスウェルを包む球体の曲面に沿って流れ、そのまま床を焦がしたのである。マクスウェル自身には、ほとんど何の効果もなかった。
「わしは四大精霊の上に立つものじゃ。そんな攻撃は痛くも痒くもないわい。よいか？　雷というものは、こう使うんじゃ」
マクスウェルの杖が帯電を始めた。並の量ではない。
（まさか、インデグニション⁉）ディオはごくりと唾を飲み込んだ。「メル！　ナースだ！」
「わかった！」メルが胸の前で手を組む。ディオとクルールは素早く彼女の側に寄った。祈りが始まる。「聖なる一角馬よ、乙女の守り手よ――」
「来るぞっ！　腹に力を入れろ！」
ディオは歯を喰いしばった。メルの祈りは続いている。
「――春の息吹の風を送り、我らを癒したまえ……ナース！」
激しい落雷が、二人と一匹を襲ったのは、祈りが終わったその直後だった。視界全てが白く染まり、ぎゃっ、と悲鳴を上げて、メルの体が跳ねた。肌が焼け、髪が焦げる。鼻の奥で血の臭いがひろがる。『インデグニション』ではなかった。もしそうなら、とっくに黒焦げになっ

ている。

（サンダーブレード級かよっ……）ディオはがくりと膝をついた。咳き込み、喉に込み上げたものを吐き出すと、真っ赤な血だった。（……容赦なしか）

その時、彼の目の前に、一人の少女が突如現れ、にっこりと微笑んだ。法術師の紋章である紫の十字章を刻んだ帽子を被り、背中には真っ白な小さな翼がついている。手にした小箱がカタンと開くと、中から暖かな風が流れ出してきて、ディオを包んだ。

痛みが引いていく。焼けた肌がたちまち癒される。一角馬の御遣い、癒しの天使の奇跡の力による治療術『ナース』の効果だった。

「こりゃいかん」マクスウェルが再び杖を構える。「どれ、もう一発――」

「そうはいくかっ！」

ディオは剣を大上段に構えると振り回した。剣圧で空気との間に摩擦が起こり、刀身がたちまち炎に包まれる。ディオは間髪いれずにそれをマクスウェル目掛けて放った。

奥義『紅蓮剣』である。

狙い違わず、炎に包まれた剣はマクスウェルの杖を弾き飛ばすと、ブーメランのように弧を描いてディオの手に収まる。回復したクルールの放った稲妻が、マクスウェルが拾う前に彼の杖を灼いてまっぷたつにした。

「やるのう。ではこれならどうじゃ？」

マクスウェルの手の間に、黒球(こくきゅう)が生まれた。闇を固めて造られたようなそれは、中にさらに小さな球がひとつあって、それが、外側の球に向かって激しく放電しているのだった。

黒球はある程度の大きさになったところで、手を離れ、かなりの勢いでディオを目掛けて突っ込んできた。剣で払うと、びりっとした衝撃があって、球は両断されることなく跳ね、壁に当たって再び襲いかかってきた。クルールに当たるところを寸前で再び斬り落とす。

「それ、もうひとつじゃ」

二つ目の黒球が生まれ、ディオたちに襲いかかる。

(冗談じゃ……ないっ!) 驚異的(きょういてき)な反射神経で、時に交互(こうご)に、時に同時に攻撃してくる黒球を凌(しの)ぐ。(くそっ、なんか手はないのかよっ!)

その時、すぐ側で、メルの声が聞こえた。

「聖なる一角馬(ユニコーン)よ、乙女の守り手よ、短き命の紡(つむ)ぎ手(て)に、僅(わず)かな慈悲(じひ)をもたらしたまえ……タイムストップ!」

途端(とたん)、それまであれだけ激しく動き回っていた二つの黒球は、空中でぴたりと静止して動かなくなった。

(そうか!) ディオはメルの機転(きてん)に舌を巻いた。(これがあったか!)

「——いまよ、ディオ!」

「わかってるって!」

ディオはマントを翻(ひるがえ)してマクスウェルの懐(ふところ)に飛び込むと、剣を下段に構え、低く腰を落とした。ぐぐ、と体中に力を込める。

「こ、こりゃいかん！」

再び黒球を生みだそうというのか、掌(てのひら)を合わせようとする。だが——

「遅いぜ爺さん！　食らえっ、『虎牙破斬(こがはざん)』っ！」上下からのコンビネーションが見事に決まり、マクスウェルの硬い防御膜(ぼうぎょまく)を斬り裂(さ)いた。「いまだ、クルール！　ぶちかませっ！」

「うきゅーっ！」

クルールの額(ひたい)の星が輝き、ライトニング級の稲妻が、連続してマクスウェルを直撃した。

「ひょーっ！」

おかしな声を上げ、マクスウェルは裂かれた球ごと床に落ちた。

「どうだっ！」

「まいった！　降参、降参じゃ」

その言葉を証明するように、二つの黒球は掻(か)き消え、クルールもいつもの姿に戻った。つまりは、マクスウェルから敵意が無くなったということだ。

ディオは剣を収めると、よしっ、とばかりに拳(こぶし)を握り、にっこりとした。

「アタタ……ふう、若いのを相手にすると、さすがに堪(こた)えるわい」マクスウェルは再び空中に浮き上がった。裂かれた防御膜は、ゆっくりと再生していく。「強いのう、おぬしたち。……

さて、約束じゃからの。おぬしたちの願いを聞き届けよう。というても、シルフたちから聞いて、もう知っておるがの。心を解放すればいいんじゃな？」

メルとディオは頷いた。

「じゃあ、目を閉じるのじゃ——そう——ほれっ！」

すでに馴染(なじ)みとなった光の奔流(ほんりゅう)と、それに続く闇の復活と、光のかけらの誕生が起こった。慣れたせいなのか、新しい心の存在にも、ほとんど戸惑(とまど)いはなかった。ディオはメルを見たが、彼女も同じように感じているようだった。

「わしが解放した心……それは『探求心(たんきゅうしん)』じゃ。知りたいと思う心、それが人を成長させるのじゃ」

「ありがとう、マクスウェル」メルは微笑んだ。「ごめんなさい、杖を壊してしまって」

「あんなものはいくらでも造り直せるわい。ほれ」マクスウェルの手の中に、杖が再び生まれた。「この通りじゃ」

「よかった。……それじゃあ、わたしたちはこれで」

ディオも頭を下げ、きびすを返しかけた。だが——

「いやいや、ちょっと待つのじゃ」

「はい？」

足を止め、二人と一匹はマクスウェルを振り返った。

「お嬢(じょう)ちゃんは、わしに何か聞きたいことがあるのではないかの？」

「聞きたいこと、ですか？」メルは首を捻(ひね)った。「さあ……」

「あるじゃろう？　誰かに聞いてみたいと思っていたことがあるじゃろう？　それに答えるのに、わしほどぴったりな精霊はおらんぞ」

「といわれても……」

「なんだよ、メル。何か悩みでもあんのか？」

メルは肩を竦(すく)めた。「さあ」

「ああ、もう、じれったいのう！」球の中で、マクスウェルはじれた様子を見せた。「歴史を変えたらどうなるのか、そもそも歴史は変えることができるのか、悩んでおったじゃろうが！」

「ああ！」メルはぽんと手を打った。「そうでした。確かに一昨日(おととい)――って、お爺さん、どうして知ってるんです？」

「わしは『知』の探求者じゃぞ。『知りたい』と思う心はどこにいてもわかる」自慢するように、立派な口髭が跳ねた。「さあ、訊(き)くがよいぞ」

「……ただ喋(しゃべ)りたいだけじゃねえの」いじわるくディオは言った。「だいぶお喋りみたいじゃん」

「失礼な小僧じゃな。――ま、それも少しはあるがの」

その正直さに、メルはくすりと笑った。「じゃあ、教えてくれますか？　その『歴史を変える』ということを」

「うむ」もう一度、口髭がぴくりと動いた。「それでは、講義を始めるとするかの」

「なあ、わかったか？」レアバードを操縦しながら、ディオはメルにそう訊いた。すぐ脇を、大きな白い鳥が、こちらを仲間だとでも思っているのか、ゆっくりと飛んでいる。「オレ、さっぱりだったぜ」

「完全に、ってわけじゃないけど……なんとなくは」とメルは答えた。

二人が話しているのは、マクスウェルの語った『時空の在り方』についてのことである。

「まずはおぬしたちの間違いを正しておこうかの」とマクスウェルは言った。「基本中の基本じゃ」

「間違い、ですか？」

「そうじゃ。おぬしたちは、時間を遡れば歴史を変えることができる——そう考えておるじゃろうな？」

「はい」

「半分、間違いじゃな。歴史はある意味では変えることはできん存在じゃ。じゃが、またある意味では変えることができる、とも言える。例えば、じゃ。クレス・アルベインがトールの時

とは可能か否か」
「できるんじゃないかな」ディオが答えた。「それで、その時点で歴史が変わってクレスさんは消えるんだろ？」
マクスウェルは口を尖らせて、Ｂｏｏ、と言った。「半分正解、半分不正解じゃ。結論から言えば、殺すことはできる。じゃが、歴史は変わらん。なにしろミゲール・アルベインが死ねば、クレス・アルベインは生まれないわけじゃから、将来ミゲール・アルベインを殺そうと思う人間もいないじゃろ。ということは、ミゲール・アルベインは殺されないんじゃから、クレス・アルベインは生まれるわけで、そうすると今度はミゲール・アルベインは殺されるわけじゃから、クレス・アルベインは生まれずに——」
「ぜんっぜん、わかんねえ……」
「ふむ。もっと簡単に言うとじゃな……例えばディオ。おぬしが今日、怪我をするとする。すごく痛い怪我じゃ。そこでおぬしは、はたと思い付く。『そうだ！　過去に戻って怪我をしないようにオレ自身に注意すればいいんだ！　オレってあったまいいー』とな」
「オレ、そんな言い方しねえよ……」
むくれるディオをメルが、まあまあ、となだめる。
「で、おぬしは時間を越えて、怪我をする前の自分に注意をするわけじゃ『気を付けろ！　痛

いぞ！』とな」マクスウェルはひとつ咳払いをした。「さて、ここで矛盾が生まれる。ディオ、おぬしが過去にいこうと思ったのは、なぜじゃ？」

「怪我をしたくないから」

「そうじゃ。しかし、おぬしが過去のおぬしに怪我をしないように注意した時点で、おぬしは怪我をしないはずではないか？　怪我をしなければ過去に行こうとも思わんのじゃから、おぬしが過去に行ったこと自体がおかしいことになる。しかし、おぬしが過去に行かなければおぬしは怪我をするのじゃから、おぬしは過去に行ってそれを防ごうとするじゃろう。すると過去のおぬしは怪我をしないわけじゃから――」

「待った待った！」ディオはうんざりして遮った。「……やっぱり全然わかんねえ」

「つまり、じゃ。おぬしが過去の自分に注意をした時点で、過去のおぬしと現在のおぬしは、別の存在になったのじゃ」

「はあ？」

「なんじゃ、まだわからんのか」

「さっぱり」

「……頭悪いのお」

マクスウェルはボソリと言ったが、ディオにはしっかりと聞こえていた。メルが止めなければ、『虎牙破斬』をお見舞いしていただろう。

「よいか。おぬしたちの間違いは、歴史という時間軸はたった一本しかない、と考えているところにあるのじゃ。実際の時間軸というものは、それこそ無数にある。樹を思い描いてみるがよい。たった一本の幹から無数の枝が伸びているじゃろう。あのひとつひとつが、『可能性の歴史』なのじゃ。ディオが過去に戻って自分に怪我をしないように注意し、自分の時代に戻ったとする。しかしおぬしの怪我がそれでなくなるわけではない。おぬしは怪我をしたままじゃ。ならば何が起きたのかといえば、『怪我をしなかったディオの可能性の歴史』の枝が伸びたのじゃよ。つまり、過去を変えるという行為は、新たな歴史の枝を造るということなのじゃ。変えた本人には影響はない」

メルとディオは顔を見合わせた。わかるような、わからないような、話だ。

「さっきのクレス・アルベインの話に戻るが、クレス・アルベインはミゲール・アルベインを殺すことはできる。じゃが殺したのは、『ミゲールが殺された可能性の歴史』軸上のクレスではない。そもそもその軸にはクレスはおらんからの。ゆえにクレスが自分の時代に戻っても、父親は生きておるわけじゃ。クレスは生まれておるのじゃから当然じゃな」

「じゃあなぜ、ノルンは歴史に干渉するな、といったのかしら……」つぶやいてしまってから、メルはしまったと思ったが遅かった。

「ノルン？　それは誰じゃ？」

メルはため息をついた。「……精霊のようなもの、といってます」

「聞かぬ名じゃの」マクスウェルは髭を撫でた。「じゃが、精霊は日々生まれておるからの。おぬしたちの時代の新しい精霊かもしれんの。──しかし、そのノルンという者の忠告は当然じゃ。先刻もいったように、歴史は樹のようなものじゃ。根や幹は変わらず、枝だけが際限なく増えていったらどうなるかの？」

「栄養が行き渡らなくて、樹そのものが枯れてしまう、とか？」

「その通りじゃ。それは世界の崩壊を意味する。……もっとも世界にはそれを自然に正そうとする力が働くようになっておるがの。トール文明が滅びたのは、歴史の軸を増やしすぎたために、世界の自浄作用が働いて滅びた、ともいわれておる。おぬしたちもあまり時間を飛び回らぬことじゃ。なにが新しい枝を伸ばすかはわからんからの。余り《歪み》を助長するようなことはせぬことじゃよ」

「でも、クレスさんは歴史を変えた、と言われていますけど？」

マクスウェルは再び髭を撫でた。「そのことなら、わしもクレス・アルベインから直接聞いたことがある。ダオスを倒したのは、エドワード・D・モリスンという男を始めとする、まったく別の人々であったという話じゃな」

メルは頷いた。

「それは『軸移動』が起こったのじゃ」

「軸、移動……？」

「エドワード・D・モリスンが死亡した時点で、新たな可能性の軸が生まれた。『クレス・アルベインがダオスを追い払った』という歴史軸じゃな。この後、再び時間移動を行い自分の時代に戻れば、本当ならば、エドワード・D・モリスンがダオスを倒した歴史軸に戻るはずなのじゃが、そうはならなかったわけじゃ。戻ってみれば、自分たちがダオスを追い払ったことになっている。ゆえに歴史を変えてしまった、とクレス・アルベインは考えた。じゃが、実際には、よく似た歴史の別の軸に戻ってしまったのじゃ」

「どうして、そんなことが起こったんですか？」

「希有な偶然が重なった結果、としか言えん。時空の謎は何百年と生きたわしでも全てがわかっているわけではないのじゃ」マクスウェルはため息をついた。「ノルンとかいう者が歴史に干渉するな、と警告したのは、そっちの意味もあるのかもしれんの。クレス・アルベインほど大きく歴史を変えなければまず大丈夫であろうが、戻ってみたら微妙に違う歴史の世界、というのは気味が悪かろう？」

「クレスさんたちは、このことを知っているんですか？」

「いいや。特に訊かれたこともないからの」

マクスウェルの話は、それで全てだった。

ディオのいう通り、余りに難しい話だった。メルにも、わかったことは少ない。だが、貴重な警告ではあった。漠然と『歴史は変えてはいけないものなのだ』と思っていたことに、ある

程度の明確な理由が示されたのだ。

（歴史は樹のようなもの、か）メルは世界樹ユグドラシルのことを考えた。（あんな感じなのかも知れないわ）

「でもさあ、メル」前を向いたまま、ディオが訊いた。「なんであんな小難しいこと考えてたんだよ」

「あ、うん……」メルは顔にまとわりつく髪をのけた。「チェスターさんの妹さんの話のこと、憶えてる？」

「うん。『アミィ・バークライトの死』だよな」ディオがいったのは、芝居の一幕の題だ。「アミィちゃんはクレスさんが好きで、クレスさんそっくりの人形を抱き締めたまま死んでるのが見つかるんだよな」

その通りだった。序幕で最も涙をさそう場面である。

「だからね。もし時間を越えて、アミィさんを救ったら、どうなるんだろうな、って考えてたの」

「ふうん」

「でも、マクスウェルさんの話通りなら、新しい歴史が生まれるだけで、今のチェスターさんの心の傷は癒されないのよね……」

ディオは首を傾げた。やはりまだよくわからないらしい。

「つまり、なに？　そうすると……アミィちゃんが生きてる歴史が生まれる——そういうこと？」
「うん、そう」
「……ややこしいなあ。それって意味があるのかな」
だが、メルはそれには答えず、ディオが言ったことについて、深く考え込んでいた。意味があるのか——それは当事者でなければわからないだろう。
それきりメルは口を利かず、それはトーティス村につくまで続いて、ディオを辟易させたのだった。

3　伝説の真実

「あっ、帰ってきた！」
村の入り口に疲れた様子で現れた二人と一匹を最初に見つけたのは、エリーだった。教会広場から村の入り口までは、遮るものは何もなく、人形遊びをしていた彼女は、顔を上げたとき、すぐにメルたちを見つけることができたのだった。
彼女といっしょに遊んでいた、ジェニファーとアリスも顔を上げ、エリーが駆け出すとその後について自分たちも駆け足になった。
気がついたのは少女たちばかりではない。やはり側で騎士ごっこに興じていた少年たち――リックス、エド、カートもディオに気づくと、出迎えるためにごっこ遊びを途中で止めて、少女たちに負けぬ勢いで、二人と一匹の元へと馳せ参じたのだった。
「ディオ兄ちゃん、おかえり！」と言って、いきなりパンチを繰り出したのはリックスだ。
だが、ディオはこれをなんなくかわすと、素早く背後に回って首に腕を巻き付けた。「手荒い歓迎じゃんか。でも、まだまだだな」

「メルお姉ちゃん、おかえりなさい」と言ったのはエリーだ。「ミリカもおかえりなさい、って」

「ただいま、エリー、ミリカ」メルは少女と人形の頬に等しくキスをして微笑んだ。「アリスもジェニファーもただいま」

「お、おかえりなさい」

かぼそい声で答えたのはジェニファーだ。アリスは黙ってメルの服の裾を小さな手で摑んだ。

メルはエリーにしたように、二人にもキスしてやる。すると、二人とも真っ赤になって照れるのが可愛いかった。

だが、彼らの中に、メグとエリオットの姿はなかった。それを訊くと、

「メグはミント先生のお手伝いで教会にいるよ。エリオットの奴は、今朝から風邪ぎみで、外で遊ぶの禁止されてるんだ」とリックスが答えてくれた。「でも、メルねえちゃん気をつけた方がいいぜ。メグのやつ、ねえちゃんたちが黙って冒険に出かけたこと、すっげえ怒ってたから。チェスター兄貴もたじたじさ！」

意外な言葉だった。なぜ、メグが怒るのだろう？

「あ、噂をすれば、だ」

エドが見ている方角を振り向くと、丁度、道具屋『ブルース』の入り口からメグが両手にい

っぱい大きな茶色の紙袋を持って出てきたところだった。

「メグ！」

メルが呼ぶと彼女は、ぎょっ、とした顔になって紙袋を傾けてしまい、中身を幾つか落としてしまった。メルは急いで駆け寄ると、落ちた物を――包装された本と絵の具、それに筆の束――を拾ってメグが抱えたままの袋に戻した。

「なんだ、帰ってきたんだ」素っ気なくメグは言った。「出ていこうがどうしようが、あんたたちのかってだけどさ。一言くらい言っていってよね。わたしたち……友達……になったんだからさ」

（友達！）メルはパッと顔を輝かせた。「本当!?　お友達だって思ってくれるの？」

「わ、わたしは、そのつもりだったけど？」ちらり、と探るようにメグはメルを見た。「もちろん、メルが嫌じゃなければ、だけどさ」

「嫌なわけないじゃない！　うれしいっ！」

メルは袋ごとメグを抱きしめ、彼女の目を白黒させた。十分抱擁した後、メルはやっとメグを解放し、にやにや笑いを浮かべているディオと子供たちのところへ、いっしょに戻った。

「じゃあ、家に戻って報告だ！」とリックスが音頭を取る。「にいちゃんたちが無事に戻ったって！」

おー、という可愛らしい鬨の声が上がり、周囲の人々の視線が集まった。好奇、好意、嫌悪

……様々な視線。だが、誰一人それを気にした様子の子供はいなかった。
「怒ってたんだって？」
ディオたちに少し遅れて戻る道すがら、メルは訊いた。左手の人指し指と中指は、しっかりとアリスに握られている。
「誰に聞いたの？」
「リックス君。あ、怒らないであげてね。メグには悪いけど、嬉しかったんだから。——心配してくれたんでしょう？」
「……そりゃあね。チェスター兄さんから、どこへ行ったのかは聞いたから。メルがそんな荒事に向いてるって見えなかったし。——ああそうか。ふたりは《なりきれる》んだっけ？忘れてたなあ……なんか、一人芝居だったみたいね」
メルは首を振った。「そんなことないよ」
「わたしさ、友達っていなかったんだ」ふう、とメグはため息をついた。「この村って、同じ年頃の女の子がいないのよね。エリーやジェニファーやアリスのことは大好きだけど、やっぱりお姉ちゃん、って感じだし。だから、メルたちを見たとき、本当は嬉しかったんだ」
「でも、大きい子は嫌だって——」
「男の子はね。女の子は初めてだったから期待はあったんだけど……だけど初めから物欲しげにするのって、格好悪いでしょ？」

メルはくすくすと笑った。「それであの態度だったんだ」「……ごめん」

「別に気にしてないわ」言いながら見ると、ディオたちはもう橋を渡るところだった。「元気ね、男の子は」

「なに年寄りくさいこと言ってるんだか」あはは、とメグは笑った。「――それじゃあ、わたしは教会でミント先生のお手伝いがあるから」

気がつけば、そこはもう教会前広場だった。

「じゃあ、また後で」

「うん。あ、悪いけど、アリスたちのことお願いね」

「わかった」

「こういうとき『友達』って助かるわ」メグはにやりとした。

「あ、わかった！　それが頼みたくて、友達になったんでしょ！」

無論、冗談である。メグにも当然わかったようで、ふたりはひとしきり笑うと、手を振って別れた。

ずっとメルの手を握ったままのアリスは、一体なにがおかしいのかわからなかった様子で、終始（しゅうし）、きょとんとしたままだった。

「よう、帰ったな」家では、チェスターが出迎えてくれた。「クレス！　ディオたちが帰ったぞ！――それにしても大人気だな、おい」
　彼が言ったのは、子供たちのことだ。メルとディオの周りには、六人の子供たちがひしめき合っていた。
「さあさあ、おまえたち！」チェスターは手を叩いた。「俺とクレスは二人と一匹に用があるんだ。部屋に行くなり、もう一度外に遊びに行くなりしな」
　すると子供たちはぶつぶついいながらも、男の子たちは再び外へ、女の子たちは部屋で遊ぶことにしたようで、廊下の向こうへと行ってしまった。
　入れ替わりに、中庭の練習場（クレスの家は、アルベイン流剣術道場を兼ねている）からクレスが戻ってきた。今日の彼は動きやすそうな布ズボンに、上はタンクトップ一枚という姿だった。筋肉がつまってパンと張った滑し革のような肌に、うっすらと汗が浮き、頬には僅かに赤みがさしている。
「お帰り、二人とも――ああ、クルールもお帰り」
「うきゅーっ！」短い手をあげて、クルールも挨拶を返す。
「どうやら無事に『試練』を乗り越えられたみたいだね」
「らくしょーだったぜ！」
「嘘いわないの」ぺし、と調子に乗った双子の弟の後ろ頭をメルが叩いた。「危なかったでし

よ？　『タイムストップ』がうまくいったから良かったけど、あれって成功率は五割なんだからね。次もうまくいくと思わないでよ」
「げっ！　あれってそんな賭けみたいな術だったのかよ！」
「それでも一番いい手だったでしょ？」
「そりゃ認めるけどさ……」
二人のやりとりに、クレスもチェスターも楽しげに笑った。
「なんにしても、怪我もないようで良かったよ。本当は僕がついていければいいんだけど、それじゃあ『試練』にならないからね」クレスはチェスターを振り向いた。「チェスター、今夜話そうと思うんだけど、どうかな？」
「あ？　なんで俺に聞くんだよ」
「同席して欲しいんだよ。ミントにも頼むつもりだ。僕だけの見方だと、偏るかも知れないだろ？」
「余計な心配だと思うけどな……別に構わないぜ。ただし、子供たちが眠ってからにしてくれよ。あいつらにゃあまり聞かせたくない話だからな」
「わかってる」頷き、クレスは二人と一匹を見た。「ノルンに頼まれたことを果たすよ。今夜、僕たちとダオスの戦いについて話そう」
解放されたばかりの『探求心』が疼くのが、メルもディオもはっきりとわかった。

長い間、謎とされていた『伝説』の真相が、明かされるときが来たのだと思うと、興奮で肌が粟立つ思いだった。それも、当の勇者の口から聞けるなど、歴史学者が知ったら嫉妬と羨望で悶絶死するに違いなかった。

「夜、零時にここで」

メルとディオはくちびるを引き締め、こっくりと頷いた。

その日の夕食は、ミントとチェスターとが担当し、メグとメルはそれを手伝った。

メルは《なりきる》ことをしなかった。チェスターに、

「そうそういつも《なりきる》ってわけにもいかんだろ？　自分自身でも料理ができるようにしておいたほうがいいぞ。料理ができない奴は最悪だ」

と言われたからだった。

「それ、誰のことです？」とミントにいわれ、チェスターが照れたような顔になったので、メルはようやくそれがアーチェのことをいったのだとわかった。

(兄さんて、あれで結構女々しいのよね）じゃがいもを剝きながら、こそっとメグがメルに耳打ちした。（もう諦めればいいのに、いつまでもアーチェアーチェって、さ)

メルは微笑んだが、特に感想は言わなかった。

エルフ族の時間の感覚は、人族のそれとは大きく違うのだ、とメルは聞いたことがあった。

ほぼ不老不死の種族と、六、七十年の寿命の種族とでは、違って当たり前である。アーチェにとっては、一年など、夜寝て朝起きたくらいの時間にしか感じられていないのかも知れない。それではなくて、どうして百年も一人の人間を待てようか？　チェスターもそれをわかっているのだろう、とメルは勝手に思っている。

メルが答えなかったことを、メグが気にした様子はなかった。

そのことにほっとしながら、メルは人参の皮を剥き、細かく切った。チェスターはメルが《なりきる》ことでしか料理ができないと思っていたようだが、それは大きな間違いである。町では『理想の女の子』で通ってきたメルなのだ。《なりきる》ことをしなくても、家事全般をこなすことなどわけはない。

そんなメルでも、今日の料理が何なのかはわからなかった。尋ねると、

「マーボーカレーだ」という答えが返ってきた。「バークライト家秘伝の料理だぜ」

「アーチェさんも作れるんですか？」

とメルは訊いてみた。『魔女っ娘の塔』で御馳走になったのを思い出したのだ。

「いいや。言ったろ？　こいつはバークライト家の秘伝だからな。おいそれとは教えられん」

「でも、わたしたち今、いっしょに作ってますよ？」

「スパイスの調合配分表だけは、どうしても見せてくれないんですよ」と微笑みながらミントは言った。「秘密なんですって」

「調合配分表はマーボーカレーの命だからな」

「教えてもらうには、バークライトの家の人間にならなきゃだめ、ってことよね」剝いたじゃがいもを切りながら、メグがさらっと言った。「あーあ、マーボーカレーも兄さんの代でおしまいか」

「んだよ、メグ！　そりゃあ、暗（あん）に俺が結婚できねえっていってるのか？」

「暗に、じゃなくてそう言ってるんだけど？」

「かーっ！　口のへらねえ娘だ！」

「ひとつしかないんだから、減（へ）ったら困るわよ」

二人のやりとりに、メルとミントは手を休めずに大いに笑った。

だが、メルは知っている。百年後の世界で、アーチェがマーボーカレーを作れることを。

（それじゃあ、やっぱり……）

その『未来』についてメルは思った。それは素晴らしいことのように思えたが、同時に、なぜか少し寂（さび）しい気がした。

（メグも二人の未来を知ったら、私と同じような気持ちになるのかしら？）

聞いてみたかったが、やめておいた。それが新たな『可能性の枝』を広げることになるかもしれない。

二時間後、できあがったマーボーカレーは『塔』で食べたものとはだいぶ味が違ったが、こ

れが大本だということはわかる味だった。
メルもディオも二杯も食べたが、それでも他の子供に比べると量は少なかった。メグでさえ、三杯も食べたのだ。
食後の片付けは、クレスやディオたちに任せて、メルやミントは他の女の子たちと共に先に風呂に入った。
「ミント先生の肌って、ほんと綺麗」と床に埋め込まれた形の、十人は一遍に入れる大きなバスタブの縁に肘をついてメグは言った。「メルもそう思うでしょ？」
すぐ横で同じようにしながら、メルは頷いた。ミントは髪をアップにしてタオルでまとめているので、白い背中がよく見える。
「そんなことないですよ」という声に照れがにじんでいる。「メグちゃん、メルちゃんのほうが肌がピンとしてるし、うらやましいわ。近頃、疲れがひどくて……」
「ミント先生は、真面目に話を聞きすぎるのよ」背中にのしかかってきたジェニファーをあしらいながら、メグは言った。「村の連中は単にいらいらを解消したくて教会に来るんだから、先生も適当に聞き流せばいいのよ」
「それはできないわ」立ち上がり、バスタブに波を立てないようにして、ミントが側に来た。
「どんな小さなことでも、本人にとっては大きな問題ですもの」
「あの……ミントさんは教会で何をなさってるんですか？」

「村の人達の悩みを聞いてる——っていうか、愚痴の聞き役」言って、メグは肩を竦めた。「嫁がどうの、舅がどうの、遺産がどうの、子供がどうの。教会の懺悔室は、人生相談室じゃないわ。皆、ミント先生に頼りすぎなのよ」

「いいんですよ、メグ」ミントの微笑みはどこまでも清浄だった。「クレスさんにも同じことを言われたけど、わたしは嬉しいの」

「なにが?」

「だって、頼られているってことは、わたしがここにいていいってことですもの」

メグは、あきれた、というように首をふり、そうしてエリーやアリスの面倒を見るために、ジェニファーを背中にくっつけたまま離れていった。

「不安、なんですね」と、ややあってメルは言った。「ミントさんだけが、この村の出身じゃないから」

「なぜ——ああ、そうでしたね。メルちゃんは、知っているんでしたね」

メルは頷いた。

「……そう、ですね。不安、なんでしょうね。クレスさんとチェスターさんには、ここにいるちゃんとした立派な動機があります。ここは、あの人たちの村だから。でも、わたしは違う」

ふっ、とミントは息をついた。「時々、わたしはここで何をしているのだろう、とつい思ってしまうんです。わたしがここにいるのは、誰に望まれてでもない、わたしのただの我儘だか

ら」

「誰に望まれてもいないなんて……そんなことないと思います。ミントさんにはクレスさんがいるじゃないですか」

だが、ミントは首を振った。「あなたたちの時代で、どう言われているのかはわかりませんけど、クレスさんとわたしはそんな関係じゃありません」

「でも……」メルは口ごもった。

芝居にも戯曲にも、ダオスとの決戦前夜のアーリィという街で、クレスとミントの心が結ばれるという名場面がある。それは後世の創作ではなく、伝説上の事実だとされていた。それは嘘だったのだろうか？

「あの人は、はっきりとは何も言ってくれないから……」

このときのミントの寂しげな微笑みを、メルは生涯忘れないだろう、と思った。

それ以上、詳しいことは聞けなかったし、問うこともできなかった。所詮、部外者なのだ、という思いがメルの胸にはあった。折りよく、子供たちが乱入して、話はうやむやになり、ミントも何事もなかったように、元の明るい笑顔に戻った。

交替で今度は男の子たちが風呂を使い、メルたちはそれぞれ髪を乾かしたりして寝るまでの時間を過ごした。

子供たちの夜は早い。皆、十時にはベッドに入る。

メルとディオも、表向きは就寝するふりをした。そのまま眠ってしまうかも知れないと心配だったが、明かりを点けるわけにもいかないので、月明かりに照らされた窓の外を眺めていた。時間はゆっくりとすぎていく。時々、懐中時計を取り出して眺めても、五分、十分としか経たない。

目を閉じると、ミントの寂しげな横顔が浮かんでくる。

(世界を救った勇者でも、ままならないことが沢山あるのね)

とうてい信じられないようなことだった。

(でも、クレスさんて意外と頭が固いみたいだから、もしかして、言葉にしなくてもわかる、とか考えているのかも) メルはため息をついた。(……言葉にしないで、わかりあえることなんてないのに)

言葉を尽くしてもわかりあえないことの方が多いのだ。それすらせずに、わかってくれ、というのは虫がいいというものだろう。

(あ・うん、の呼吸ってのもあるけど、不安なときには言葉が欲しいよね)

闇に浮かんだミントが、そうですね、と語りかけてきた。

しばらく闇に漂い、はっと気がついて時計を見ると、零時十分前だった。どうやら少し眠ってしまったらしい。

メルは蓋を閉じると時計を懐に戻し、ベッドの梯子を静かに降りた。起きているはずはな

い、と思ったが、やはりディオは気持ち良さそうに眠っていた。腹がたったので、頬を思いきりつねってやった。
いたっ、と叫びそうになるところを、口を押さえて声を飲み込ませる。
(しーっ、皆が起きるでしょ)
ディオは、そうか、という顔をして頷いた。どうやらつねられたことには気づいていないらしい。
(クルールは?)
(どっかに潜り込んでるんだろ?)
ディオのいう通り、クルールはアリスのベッドでみつかった。アリスばかりか、ジェニファーまでもがいっしょになって、クルールにしがみついて眠っていた。
起こさないように部屋を出て、廊下を居間へと向かった。廊下は暗く、あちこちに闇が溜っていたが、先の方は明るい。人の話す声がする。角を曲がると、テーブルにはすでに五人分のカップが並べられて、紅茶のいい香りがしていた。クレス、チェスター、ミントの三人はすでにテーブルについて、二人を待っていた。
さあどうぞ、とクレスに椅子を勧められ、メルとディオは多少恐縮しながら、席についた。正面に、クレス、その左にチェスターがいる。ミントはディオの左、メルはディオの右の席だった。

「眠くない？」とクレス。「眠気覚ましの紅茶だよ。それともコーヒーのほうがよかったかな？」
「紅茶でいいです」メルは答えた。別になんでもよかった。もう十分目は覚めていた。「いただきます」
クレスは頷き、それからチェスターとミントに目配せをした。
「それじゃあ、はじめようか」
クレスの口から、『ダオス戦役』の真実が語られ始めた……。

歴史上はともかく、クレス・アルベインにとってのダオス戦役は、黒騎士団がトーティス村を襲ったときに始まった。クレスとチェスターはその時、運よく南の森で狩りをしていて、難を逃れることができたが、クレスの両親、チェスターの妹を始め、村の人間のほとんどがこのときに殺された。
その少し前、クレスは森の奥で、ほとんど枯れた大樹の前で幽霊のような存在に出会っているが、後に彼女と大きく関わることになるとはこのときは思いもしなかったという。
村に戻ったクレスは、黒騎士団が何を狙ったのかを母親の最期の言葉で知った。誕生日に両親から贈られた、ペンダントこそが、彼らの狙いであったのだ。
クレスは、チェスターに危険が及ぶことを恐れ、単身、叔父のいるユークリッドを目指した

が、叔父の裏切りにあい、黒騎士団に捕らわれ、ペンダントも奪われてしまう。地下牢に閉じ込められた彼だったが、からくも脱出し、同じ地下でミント・アドネードと出会い、手傷を負いながらも脱出を果たすが、直後に気を失ってしまった。

二人を救ったのは、トリニクス・D・モリスンという男だった。

彼らの家で、クレスはチェスターと再会する。モリスンもまた、黒騎士団を追っているのだという。

彼らがユークリッド大陸南部の地下墓地の遺跡に入り込んでいることを知ったモリスンは、クレスたちに来てはならないといい含め、単身で遺跡へと向かうが、それぞれ肉親を殺されていたクレスたちが、それを黙って聞くはずはなかった。

クレス、ミント、チェスターの三人は、モリスンを追って地下墓地の最深部へと降りていった。

そこで目にしたのは、黒騎士団の団長、マルス・ウルドールによる、魔人ダオスの復活儀式だった。クレスのペンダントと、ミントのペンダントが輝き、ダオスは復活する。魔人はモリスンを見て、あの時の男か、と言った。

二十数年前、時空転移で過去から逃れて来たダオスを待ちかまえ、これを封印した者達がいた。それが、クレスの両親とミントの母、そして、トリニクス・D・モリスンであった。二つのペンダントは、ダオスの力を分けて封印したものだったのだ。

封印後、クレスの父、ミゲール・アルベインは有事に備えてトーティスで次代の剣士の育成に努め、ミントの母は封印を守るためにひっそりと山奥に隠遁した。そしてモリスンは、封印が解かれることのないよう、遺跡そばに邸宅を構え、これを見張ってきたのだった。

だが、封印は完全ではなかった。

ダオスの意思は外に洩れ、マルス・ウルドールを操って、まずはアドネード親子を捕らえて、次にトーティス村を襲撃させたのだった。

だが、マルス自身は死の瞬間まで、自分が操られていたことに気がつかなかったようだった。そうして、気がついたときには、ダオスの魔光で灼かれていた。

完全復活したダオスを倒す術は、その時のクレスたちにはなかった。

なぜなら、魔人は魔法でしか傷つかない、と言い伝えられていたからである。だが、この時クレスたちがいた世界には、魔法はなかった。そこでモリスンは、モリスン家に伝わる古の秘術『時空転移の法』を使って、クレスたちを魔法がまだ存在した時代——百年の昔に送り込もうとした。

だが、なれない呪文を練るのは時間がかかる。ダオスの魔光が彼らを灼こうとしたとき、チェスターが体当たりをしてダオスを阻み、その隙を縫って、モリスンはクレスとミントを過去に送ることに成功するのだった。

クレスは、薄れゆく景色の中で、間違いなく魔光に灼かれるモリスンとチェスターの姿を見

た、と言う。
気がつくと、クレスとミントは見知らぬ場所にいた。近くの村に降りてみると、そこは百年前のトーティス村であった。
クレスたちの目的ははっきりとしていた。すなわち、魔法を手に入れて現代に帰る、ということである。だが、魔法はエルフ族の血を引いていなければ、使うことはできないと知る。しかし、人間で魔術を使う術を研究している人物がいるというので紹介してもらったのが、クラース・F・レスターだった。
クラースは、未来から来たなどという話を容易には信じなかったが、ダオスのことを聞いて説得され、召喚術の完成のため、『精霊の試練』を突破することを手伝うなら、という条件で、クレスたちに同行することになった。
ダオスはすでにこの世界に現れており、世界を相手に脅迫をしているのだという。
どのみち、今の状態では太刀打ちできる相手ではない。とにかくも力を蓄えようと、最初の精霊であるシルフに会いに、彼らはローンヴァレイへと向かい、無事に契約を終えることができた。
一行はそこでシルフから、世界から魔法素が消えかかっていることを聞かされる。魔法素は、精霊の命の源であり、魔法に必須なエネルギーである。原因を探るため、彼らは魔法素を造り続ける樹、世界樹ユグドラシルのあるという森へと向かった。そこは、クレスたちがいつ

も狩りをしていた森であり、世界樹とは、あの枯れた大樹のことであった。
樹の前に立った一行の前に現れたのは、トーティス村襲撃のあの日、クレスの前に現れたのと同じ幽霊――否、幽霊ではなく、世界樹の精霊、マーテルであった。
彼女は、何者かが魔法素を大量に消費しているために、樹が枯れかけていると訴えた。それでクレスたちのいた時代に魔法がない説明がついた。樹は枯れたのだ。ということは、魔法を手に入れて戻ったとしても、使えないということになる。クレスたちに、ユグドラシルを枯らさない、という使命が加わることになった。
その後、壊滅したハーメルという町で、一行はリアという少女を救うことになる。彼女の両親はミッドガルズで魔科学を研究していたが、弟子のデミテルというハーフエルフに殺され、そのとき町も滅ぼされたのだという。
同じ思いをしたクレスには、他人事ではなかった。ミントも同様である。渋るクラースを説き伏せ、ベネツィア大陸の西にある孤島のデミテルの隠れ屋敷を突き止め、これを急襲して仇をとった。
すると、驚いたことに、リアはリアではなかった。彼女はすでに死んでいて、親友の肉体を借りていただけであったのだ。リアが天に召され、目を覚ました少女こそ、アーチェ・クラインであった。彼女は親友の無念を晴らしてくれた礼に、力を貸してくれるという。アーチェは、望みに望んだ魔法の使い手、ハーフエルフであった。クレスに否はなかった。

クラースとの約束を果たすため、世界各地の精霊伝承を追って旅をする中で、クレスたちは一人の男に出会った。名をエドワード・Ｄ・モリスン——ダオスを退けたといわれている人物であり、トリニクス・Ｄ・モリスンの祖父でもあった。彼は世界を回り、ダオス打倒に加わってくれる戦士を集めているのだった。

クレスたちが彼と会ったのは、精霊との契約に必要な指輪の修復を頼むためであったが、打倒ダオスの志を聞いたクレスは、いざというときには必ずや駆けつけると約束するのだった。

だがこれが、歴史を変えることに、新たな『可能性の枝』を伸ばすことになる。

このときすでに、クレスたちの名声は、ダオスの耳に届くほど、大きくなっていた。幻であった召喚術を復活させたパーティである。知られずにいる方が難しい。

一通りの精霊と契約をすませ、十分に力を蓄えたクレスたちが、Ｅ・Ｄ・モリスンとの約束を果たそうと、ヴァルハラ平原に近い、ミッドガルズ王都を訪ねたときに事件は起きた。

ダオス配下の魔物、ジェストーナが、子供を盾に取り、クレスとＥ・Ｄ・モリスンに自殺を迫ったのである。

史実ではこのとき、軍は子供を犠牲にしてジェストーナを討ち取り、子供はダオスの犠牲者として兵士達の士気を高めるのに利用された、とクレスは語ったが、メルたちの歴史には変わってしまった方の歴史しか残ってはいないので、その真偽はわかりようもなかった。

とにかくも、このときは、子供が犠牲になることはなかった。変わりに、E・D・モリスンが、子供を救う代わりに命を落とすことになったのだった。

このとき、歴史は新たな枝の流れに乗った。

だが、すでにE・D・モリスンの子は生まれていたので、新しい枝の先で、トリニクスが生まれないというような大きな変化はなかったようだ。

クレスたちは、E・D・モリスンの強い推挙(すいきょ)もあって、連合軍の作戦会議に出席することができた。だがこのとき、アーチェはダオスの目的に疑問を抱いた。

「思えば、あの時のアーチェは、真実を明確に言い当てていたんだ」とクレスは言った。「それに気がついていれば、後の多くの悲劇は回避(かいひ)できたのかも知れない」

それが何を意味するのかは、この時点ではクレスは語らなかった。

彼は、話を続けた。

アーチェの抱いた疑問に対してわかったことは、ダオスはなんらかの目的があって、魔科学を排除(はいじょ)しようとしているらしい、ということだけだった。それも、確信ではない。

答えが得られぬまま、作戦開始の日時はやってきた。

会議から半月後、アルヴァニスタ王国軍とミッドガルズ王国軍、それにE・D・モリスンが世界を回って集めた傭兵(ようへい)軍を加えた一大連合軍が、ヴァルハラ平原において、魔人ダオス率(ひき)いる、魔物の軍団との戦いに突入した。

後の世にいう『ヴァルハラ戦役』の始まりである。

クレス一行は、遊撃部隊として単独行動を行い、平原を迂回して敵の本陣を急襲し、魔物たちを統括していたドラゴン族のイシュラントを撃破。敵を潰走させ、ヴァルハラ平原における緒戦に勝利をもたらした。

しかし、数日後に悲劇は起こった。

戦勝に沸くミッドガルズを、ダオスの有翼部隊が襲ったのである。

飛行する術を持たぬ連合軍に、勝ち目はないと思われた。だが、ミッドガルズ王国軍には、アルヴァニスタ王国も知らぬ秘策があった。それが『魔科学兵器』である。

大量の魔法素を一気に魔光に変換して使用するその兵器は、ただの一撃で、ダオスの有翼部隊を灼き払った。だが、それはただの一射で、世界の魔法素のほとんどを吸い尽くすほど効率の悪い変換しか出来ない未完成品だった。

続く第二射が同じように発射されていたら、救う間もなくユグドラシルは枯れていたはずです、とミントはクレスの話に付け加えた。

しかしそうはならなかった。それが幸運であったのかどうかは意見の分かれるところだろう。なにしろ第二射に失敗した『魔科学兵器』は暴走し、残っていた魔法素を魔光に変えて無差別に街を灼き、ついには崩壊したのだから。

王都の半分を灼き、三万の人々の命を奪った悪魔の所行はダオスの仕業とされたが、事実が

そうでないことは、メルもディオもクラースからすでに聞いていたので、改めて聞かされても驚くことはなかった。
この後、残ったダオスの有翼部隊は、クレスとアーチェによって撃退されたという。空を飛ぶ相手に、アーチェは箒によって飛行可能であるからわかるが、クレスが一体どうやってそれを行ったのかは、彼は詳しくは語らなかった。
この後、戦局は一進一退を繰り返すことになる。
その中にあって、クレスたちは変わってしまった歴史を自分たちで修正するため、四人だけでダオス城へと向かった。
それだけを聞けば無謀な作戦に思えるが、総力戦が続いている中にあっては、本陣こそが最も手薄だ、というのがクラースの主張だった。そこまで近付くことが何よりも難しいのだが、クレスたちは平原を遥かに迂回して、ダオス城へと辿りつくことができた。
城は、実際手薄だった。
ついにダオスと対峙した一行だったが、ダオスはこのとき、戦いを忌避するようなことを言ったという。だが、クレスたちに、その声に耳を貸す心の余裕はなかった。
クレス一行は、歴史通りにダオスを撃退することができた。時空転移をしたから、やがて転移先で、待ちかまえているトリニクスやミゲールに封印されることだろう。
後は世界樹の枯死を防ぎ、現代へ帰還する方法を見つけ出せばよかった。

それには時空転移が必要だった。藁をも摑む思いで、E・D・モリスンの屋敷を訪ねた一行は、彼が残した手紙から、古代王国トールの存在を知ることになる。そこには時空転移装置があるはずだ、と記されていた。

事の真偽は行ってみるしかないが、その前にユグドラシルをなんとかする必要があった。それについてはミントが方法を提案し、それを採用した。ユニコーンの力を借りて、世界樹に法術をかける、というものだった。ヴァルハラ平原西部の白樺の森で、ユニコーンの助力を得たミントは、その力でユグドラシルの枯死を防ぐことに成功した。

これで現代に戻っても、魔法が使えるはずだった（歴史が枝のようなものであることは、このときの彼らは知らない）。

一行は、E・D・モリスンの残した手紙にしたがって、トールがあるという海域に行き、深海でそれを発見する。人はいなかったが、機械は生きていた。彼らは機械的に時空転移を行い、現代に——アセリア暦四三〇四年、五月二十一日に帰ることにした（軸移動が起こったのは、この『機械的』というのが原因かも知れない、とメルは考えた）。

転移は成功し、クレス、ミント、クラース、アーチェの四人は、いままさに魔光を放とうとしていたダオスと、チェスター、そしてトリニクスとの間に立った。

「俺は、モリスンさんが失敗したんだと思ったよ」とチェスターは言った。「なにせ、消えたと思ったら、次の瞬間にはまた現れたんだからな。だけどそうじゃなかった。消えたときは二

人だったが、現れた時は四人だった。――魔法？　なくなってなんかないさ。クレスたちが過去に行ったのは、幻といわれていた強力な魔法『インデグニション』を手に入れるためだった。どうも、そこのところが、少しクレスと話が食い違うんだが、それが歴史を変えた影響なのかもな」

だが、メルはもっと別な理由なのではないか、とそれについては考えた。軸移動が起こったのなら、クレスが救ったチェスターは、クレスの知っている彼とは違うチェスターなのではないか、ということだ。

マクスウェルの説によれば、クレスがいくら過去でユグドラシルを救ったとしても、時間を越えて帰ってくる先では、ユグドラシルはやはり枯れたままであるはず。

そうでなかったということは、軸移動が起こったということであり、つまりは、クレスとミントが戻った世界は、元の世界とは微妙に異なる『新しい可能性の歴史』の現代なのだ。

元々の歴史で、チェスターたちがどうなったのか、『新しい可能性の歴史』の世界のクレスとミントはどうしたのか、それはわからない。

ともかく、起きた事はそういう事だった。

帰還したクレスたちは、過去に続いて現代での一戦でもダオスに勝利する。魔人は倒れ、直後、地下墓地は大噴火を起こして溶岩の下に沈んだ。

クレスたちは復讐を果たし、これで全てが終わったと思ったが、それは間違いだった。ダオ

スは死んではいなかったのだ。彼は崩れた天井に押し潰される寸前、再び時空転移をして、数十年後の未来に逃れていたのである。

未来からの魔法攻撃という信じられないようなことを、クレスたちは受けた。幸いにも彼らは無事だったが、ユークリッド大陸が受けた傷、被害はメルとディオが見た通りである。

未来からの救援要請を受け、クレス、チェスター、アーチェ、クラース、ミントの五人はアセリア暦四三五四年へと転移し、再びダオスを追う事になった。

だがすでにダオスは、最先端の魔科学技術を誇っていたミッドガルズ王国を壊滅させ、他の国々にも侵略の手を伸ばしていた。明らかに四二〇二年の時とは違う、問答無用のダオスの激しい攻撃に各国は曝されていた。

ユークリッドの国営科学アカデミーでレアバードを貸与された一行は、アルヴァニスタ王国へと向かい、そこで宮廷魔術師ルーングロムから、ダオスを倒すためには魔人の『時空転移』を封じる必要があることを諭され、それが行える伝説の剣の伝承がエルフ族にはあり、すでに手に入れるために連合軍が探索に当たっていると聞かされるのだった。

クレスたちはその探索に加わった。剣は三つの武具に分けられているという。そのうちのひとつ、『ダイヤモンドの指輪』はすでに彼らの手にあった。残る二つ、『氷の剣』と『炎の剣』も無事に手に入れた一行は、三つを再びひとつにするために、エルフ族の里の奥にある、トレントの森へと向かう。

その森には、エルフ族の他に、もうひとつの隠れ里があった。『忍者』と呼ばれる戦闘集団の人々の里である。彼らは各国に雇われ、諜報活動や暗殺に従事して生きていた。だが、ダオスの侵略が始まると、多くの仲間が洗脳され、魔物同然となって同じ人族に牙を剝いていた。その悲劇のひとつを、クレスは目の当たりにしている。

三種の武具を探す途上で立ち寄ったユークリッド王国の闘技場で、二人の忍びに襲われたのだ。彼らの戦闘能力はクレスを遥かに凌ぎ、これまでか、と思われたときに、一人の少女が現れて二人の忍者を斬り、命を救われたのだった。

少女もまた、忍者であった。名は、藤林すず。二人の忍者は、洗脳された彼女の両親だった。

任務のためであれば、肉親であってもためらうことなく斬る——それが忍者の苛烈な掟であった。

以来、すずのことが気になっていたクレスたちは、この機会に里を訪れた。そこで族長の藤林乱蔵から、彼らは意外な申し出を受ける。すずを戦力として加えて欲しい、というのだ。彼女もまた、ダオスによって肉親を失ったに等しい。特にチェスターが強く賛成し、すずは六人目の仲間となった。

メルとディオの時代に残されている伝説のうち、古いものによっては、すずは仲間にはならなかった、とするものもあるが、おそらくそれは忍者の秘匿性故に表に出るまでに時間がかか

ったのだろう、との研究者たちの見解がなされている。

　すずを加えた一行は、トレントの森の奥で三種の武具の融合を果たし、ついに、使用者が時空転移を自在に行える時の剣、『エターナルソード』を手に入れることに成功する。

　その報はすぐさま各国にもたらされ、魔人ダオスの本拠地の探索が急がれた。そんな中、怪奇な現象が目撃されたという報せがクレスたちへ届いた。

　ユミルの南に、常に闇に閉ざされ、昼が来ないという、暗黒大陸の名で知られている場所がある。その大陸西部の鉱山跡で、空に浮かぶ城を見たという報告だった。

　クレスたちはすぐさま現地へと飛んだ。だがなにもなかった。しかし、『エターナルソード』が擬態を剝ぎ取り、ダオス城がついに姿を現した。彼の魔人の城は、時空間の狭間に隠れていたのだった。

　『エターナルソード』の転移能力を使い、クレスたちは城へと乗り込んでいった。全ての決着をつける為に――

「そうして僕たちはダオスと戦い、これに勝った。時空転移を封じられ、ダオスもこんどこそ最後だった」とクレスは言った。だがその声にはどこか痛みがあった。「そのとき、ミントがダオスに近付き、問いただした――あなたは何故こんな戦いを仕掛けたのか、と。返ってきた答えは、信じられないものだったよ」

「信じられない？」

重いため息がクレスの口から洩れた。「ダオスは、自分の民を守るために戦っていたといったんだ」

「あの魔人が？」ディオは、それこそ信じられない、という顔をした。「まさか」

「本当です」とクレスの代わりにミントが答えた。「ダオスはこの星の人間ではありませんでした。どこか遠い、別の星から来たのです。彼には、この星を侵略しようなどという意思はありませんでした。彼が欲しかったのは『果実』……世界樹ユグドラシルがつけるという『大いなる実り』だったのです」

「ダオスの星にも、ユグドラシルと同じような樹があって、それは星の命そのものだったらしい」とクレスが言葉を引き取った。「それが枯れた」

なぜだか、ひどくぞっとする響きだった。肌が粟立ち、メルが横を見ると、ディオも同じであったようだ。

クレスは続けた。「『大いなる実り』は、その樹を蘇らせるために必要なものだったらしいんだ。でも、ユグドラシルが実をつけるには、世界にマナが満ち溢れて供給過剰にならなければだめだった。けれど、マナを人為的にエネルギーに変換する方法が発見されて、マナは不足することはあっても、供給過剰になることはなくなっていた。だから、ダオスは人類に要求した――魔科学の使用を中止せよ、と」

「あいつの最初の間違いは、俺たちを猿以下だと考えて、居丈高に『要求』したことだ。突然現れて、そんな事をいわれたって、誰も聞くもんじゃない」とチェスター。

クレスは頷いた。「ダオスの態度は、逆に魔科学を悪い方向へ発展させてしまったんだ。魔科学兵器がそう。あとはもう泥沼のように戦いを続けるしかなかった。結果、この世界でもユグドラシルは枯れてしまった」

チェスターは僅かに眉をしかめたが、自分の中の記憶との差異については言わないことにしたようだった。

「僕たちは過去に戻ってユグドラシルを蘇らせたけど、ひょっとするとミッドガルズが滅ぼされることになるのは、そのせいかも知れないと思ってる。魔科学を滅ぼせば、ふたたび『大いなる実り』が手に入る可能性が生まれたから」

「だが、あいにくと俺たちが再び時間を越えて、その企みをぶっ潰したってわけだ」

クレスはその言葉に嫌な顔をしたが、チェスターは知らん顔だった。

「確かに僕らはダオスの野望を阻止した。でもそれは、彼の星が滅びるということだった。

……ダオスは言ったよ。『これで我が十億の民の命運は尽きた』って」

「そんな!」メルは思わず叫んでいた。「そんな勝手な――」

しーっ、とチェスターが口に指を当て、メルは口を手で覆った。

「メルの言うとおり、勝手な言い分だよね。僕たちを始め、多くの人達がダオスのために大切

な人を、大切なものを失った。それは許されることじゃない。でも、ダオスの星の人々から見れば、僕らは希望を打ち砕く存在――究極の悪なんだろう、と思うよ。もちろん、僕は自分のやったことが間違っているとは思っていない。でも、それは立場が変われば『悪い事』にもなる可能性があると考えると、怖いよね」
「だからあれは、罪滅ぼしだったのかも知れない」
クレスは微笑んだが、それはひどくぎこちなかった。
「罪滅ぼし……？」
クレスとミントは顔を見合わせ、そして頷いた。
「アセリア暦四三五四年のマナの《大消失》……あれは、僕たちのやったことなんだ」
「えっ！」メルとディオは仰天した。
「戦いが終わったあと、僕たちはユグドラシルにマナの流出を防ぐ障壁を張ったんだ。そうすればやがて供給過剰になって、『大いなる実り』が出来るだろう、と考えて」
では、あの事件は、世界が大混乱に陥ったマナの消失は、『罪滅ぼし』という、ただそれだけのために引き起こされたというのか？――メルは首を振った。「……信じられない。そんな勝手なこと……」
「そうだね」クレスは言った。「僕たちは傲慢だったのかも知れない。でも、あの時はそうするべきだと思ったし、それを後悔してはいない。現に君達は《大消失》を乗り切って――」

「パパは魔科学が時代遅れになったせいで、アルヴァニスタの王立学院を追い出されたわ！」メルはテーブルを叩(たた)いた。「いっぱい、いい発明だってあったのに、全部駄目(だめ)になって沢山(たくさん)の人が苦しんだ！　それがただの『罪滅ぼし』？　しかも世界を滅ぼそうとした魔人のために？」

　クレスは何かを飲み込むようにして、天井を仰(あお)いだ。

「……クラースさんも、わかっていたのね」メルの声は低くくぐもった。「だからこそ、代替(だいたい)エネルギーの研究をして、沢山の著作(ちょさく)を残した——そうなんですね？」

「きっとそうなんだと思う」クレスの声は震えていた。「僕らのしたことは、メルちゃんの目から見たら『悪』なんだろうね。先刻(さっき)も言ったけど、僕は後悔はしていない。……言い訳(いいわけ)に聞こえるかも知れないけど、でも、だからといって罪を感じていないわけじゃない」

「クレスさん……」

　ミントが気遣(きづか)わしげに声をかけ、クレスは彼女を見て泣きそうな顔で微笑んだ。

「……僕はあれから、何かを決めるのがすごく怖(こわ)くなってしまった」

「魔法素収束点(マナスポット)の視察(しさつ)にばかり出かけてたのは、そのせいか？」とチェスターは訊(き)いた。

「村のことで、あれこれ決めろ、と言われることがないからね」

「情(なさ)けねえやつだな」チェスターはクレスの胸倉を掴(つか)んだ。「おまえ、そんなこと考えてたのかよ。……いいか？　俺たちは神様でもなんでもねえんだ。未来のことなんてわからないだろ

うが。世の中には絶対なんてない。だったら自分を信じ、おまえを信じてくれる奴を信じればそれでいいだろうが。万人が納得する決定なんてねえんだよ。《大消失》？　それがなんだってんだ。あのままマナを封印しなかったら、また魔科学兵器とかいうのができて、世界は大戦争になったかも知れないだろ？　けどなあ、そんなことはわからない。そんなものに怯えるなんて、おまえらしくもねえぜ！」

チェスターはクレスを突き飛ばすようにした。がたん、と椅子が大きな音をたてる。ミントは席を立つと、クレスの隣にしゃがんで、うなだれた彼の背にそっと手を乗せた。

「メル、おまえもだ」

名前を呼ばれ、メルはびくんとなった。

「おまえの親父は幾つだ？　五十は超えていないはずだよな。だったらマナが封印されたせいで学校を追い出されたってのは、的外れだろう？　おまえの親父がどんなに天才だったとしても、勉強を始める頃には魔科学は無用の長物だったはずだ。おまえの親父はあえてそれを選んだんだから、クレスを責めるのはお門違いだぜ」

いわれてみればその通りかもしれなかった。メルはディオと顔を見合わせ、ふたりして消沈してうなだれた。

「とにかく、だ」チェスターは辛気くさい一同を見渡して、自分もため息をついた。「こいつが『ダオス戦役』の真実だ。何の役に立ったのかわからねえが、ノルンとやらの頼みはこれで

果たした。おまえら全員、今日はもうさっさと寝ろ。顔をつきあわせてても、気分が落ち込むだけだ」

チェスターはそう言って席を立った。

床に当たった椅子の音が、やけに大きく辺りに響いた。

教会へ送ってもらうために、ミントはクレスと夜の村を並んで歩いていた。

今夜は月が明るい。川を流れる水の音が耳に心地よい。

歩みはゆっくりとして、たゆたう雲のようだった。

「……クレスさんが、あんなことを考えていたなんて、知りませんでした」

月を見上げながら、ミントは呟いた。

「ごめん……情けないだろ？」

ミントは首を振った。「わたしたちこそ、クレスさんに何もかも押し付けていたのですね」

「それは違うよ。そういう立場を選んだのは自分なんだ。決めたのもね。その結果としての『罪』は『罪』として認めなくちゃ駄目なんだ」

クレスの横顔は、痛々しいほどに真摯だった。こんな生き方は、きっと辛いだろう、と思う。

ミントはそっとクレスの手を握った。

「ミントの手はあったかいな」クレスははにかんだ笑みを浮かべた。

「そんなこと……」といいかけ、ミントは言葉を飲んだ。代わりにクレスの指に自分の指を絡め、握る手に少し力を込める。それが彼女の言葉だった。

すると、クレスも指に力を入れ、ミントの手をしっかりとつかまえたのだった。

クレスの温もりが、重なりあった掌を通して、はっきりと伝わってくる。ミントはその熱だけを感じていた。彼の熱が、胸の不安をゆっくりと溶かしてくれる。

（ああ……わたしが欲しかったのは、言葉なんかじゃなかったんだ）ミントは吐息を漏らした。（この掌の温かさのあるところが、わたしの居場所だと思える）

クレスを見ると、彼は月を見上げていた。青く照らされたその顔は、透き通るように綺麗だった。

（……クレスさんがこの手を離さない限り、わたしはこの村にいよう）

ミントはもうすこしだけクレスの熱を感じたくて、彼に腕を寄せた。

教会はまだ遠い。

「預かりものだ」

翌朝、そう言ってチェスターは、『映らない鏡』と、扉を開くための呪文を書き付けた紙をメルとディオに渡した。

「これは？」とディオは訊いた。
「次の試練の場、『悪魔の塔』と『古代遺跡』に入るための『鍵』だ。昨日の今日だからな。顔を合わせづらいだろうと思って、俺が預かっておいてやったぜ」
「ありがとうございます……」
「なんだ、まだ元気ないな。俺たちの正体がわかってがっかりしたか？」チェスターは、ひひひ、と笑った。「ま、えてして伝説なんてのは美化されてるもんさ。クレスも俺もまだ十代だぜ。変に悟ってるのもおかしいだろ？　だから俺はガキどもにはぜったい『お父さん』とは呼ばせねえ！」
　威張って胸を反らせるチェスターに、メルもディオも思わず、くすり、とした。
「そうそう」チェスターは二人の額を軽くついた。「そうして笑っていた方が、人生は面白いぜ」
「ありがとう、チェスターさん」メルは薄く目に涙を浮かべて言った。「それでこの二つの迷宮はどこにあるんですか？」
「ん？　『悪魔の塔』はフレイランド、『古代遺跡』ってのは、ベネツィアの北のトールのことさ。それとあとひとつ、『十二星座の塔』にも精霊がいるが、こいつはあとにした方がいいだろうな。なにしろ手強い。クレスたちも昔、ずいぶん苦労したみたいだぜ」
「わかりました。じゃあ、さっそく『悪魔の塔』に行ってきます」

「おいおい、昨日帰ってきたばかりじゃないか」
「少し、考える時間が欲しいんだ」とディオが言った。「なんか、頭がぐちゃぐちゃしちゃってるからさ」
「そうか……」チェスターはふっと息を吐(つ)いた。「それがいいかもな」
「ごめん、兄貴」
「謝(あやま)ることじゃないさ。昨日は俺もいいすぎた。おまえたちの親父の苦労も知らずに勝手なことをいったよな」
メルは首を振った。「そんなこと……」
チェスターは二人のために、特製の朝食を作ってやった。『ベーコンエッグトースト・アミィ風』だ。こつは黄身を半熟(はんじゅく)に仕上げることと、秘伝のソースにある。
二人と一匹は彼の料理に舌鼓(したつづみ)を打ち、そうしてその朝のうちに、『悪魔の塔』を目指して旅立って行った。
一日も経(た)たずに出発することに、子供たちは不満そうだったが、二人が異国のおみやげを約束したのでそれで許した。もちろん本当に物が欲しいのではなく、それが必ず帰るという約束になるからだ。
『悪魔の塔』は位置的に見て、後の『炎の塔』だと思われるが、真偽(しんぎ)のほどはわからなかった。チェスターは行ったことがないからだ。

（フレイランドまで行って戻ると一週間か……）林から飛び立った鳥のような姿を、チェスターは橋の欄干にもたれて見送った。（ガキどもが寂しがるな）
だがいずれ、彼らは自分の時代に帰るのだ。
（慣れておいた方がいい）チェスターは橋を離れた。（おっさん……時間は残酷だよな）
彼は、もはや会うことの叶わない、クラースのことを考えながら、教会へと歩いて行った。

だが、再びメルとディオ、そしてクルールがトーティス村に戻ったのは、出発してから三週間もあとだった。
二人は『悪魔の塔』『古代遺跡』のみならず、『十二星座の塔』をも攻略し、この時代でのすべての試練を終えていた。
悪魔の姿に似た精霊・グレムリンレアーには『悪い心』を、光輝く鳥の姿の精霊・アスカには『挑戦する心』を、そして月に腰掛けた少女の姿をした精霊・ルナには『悩む気持ち』を、それぞれ解放してもらい、それでようやく、頭の整理がついたのだった。
やはり最後までわだかまっていたのは《大消失》のことだった。
だが、グレムリンレアーと、ルナに解放してもらった心で、クレスたちの立場で考えたとき、石のように固かったわだかまりは柔らかくなった。
「悪を知らなけりゃ、善もわからないだろ？　『善』と『悪』はコインの表と裏さ！」それが

グレムリンレアーの言葉だった。「見方が違えば評価も変わる――善悪なんてその程度のものなのさ！　納得いかないか？　ケケケッ！　でもそれが真実さ。もっとも、世の中には裏も表も真っ黒な『悪』って奴もあるけどな！」

その心で考えれば、クレスの行動は『悪』でもあり『善』でもあった。

またルナは、

「何かを決定するのには大きな勇気が必要です。あなたがたはマクスウェルから『時空の在り方』について学びましたね？　『可能性の枝』は、人々の日々の決断により生まれます。ひとつの結論の前には、無数の選択があり、そのひとつひとつがあたらしい『枝』なのです。あなたがたのように『時空』を越えない限り、やり直しはできません。だから人は悩みます。時にそれは、心を喰い尽くします――月の輝きのように。けれどだからこそ、それぞれの『枝』は貴いのです」

と二人に教えたのだった。

クレスがどれほど悩んだかは、想像でしかわからない。だが十分だった。もし自分にその決定が課せられたら、と思うと、メルもディオもぞっとした。

クレスは『罪滅ぼし』という言葉を使ったが、その結果起こることを、本当に考えていなかったとは思えなかった。あれもまた、彼の自戒故の言葉だったのだろう。

チェスターの言うとおり、もし《大消失》が起こらなかったらどうなっていたかはわからな

い。

それを試す気はなかった。

新しい『枝』を造るのはまだいい。だが、その結果として、軸移動が起こって、自分たちの本来の時空へ戻れなくなるかも知れないというのは、考えるに恐ろしいことだった。

皆が待つ家に戻ったメルとディオは、

「ただいま」

と、クレスに自分たちから笑いかけた。

それは未来の人々からの許しであり、クレスはそれによって救われたのだが、二人は意図したわけではなかった。メルとディオはそれほど傲慢ではない。

「しっかし、いきなり全部すませちまうとはな。驚いたぜ」

テーブルの上に山のようにつまれた各地のおみやげと、それに群がる子供たちを見ながら、チェスターは呆れたようにいった。

「三週間も帰ってこないなんてひどいじゃない」と責めたのはメグだ。「ちゃんと手紙をよこしたのは感心だけどさ」

二人は行く先々の町や村で手紙を書いては、送っていたのだった。クルールも手形をぺたぺたとつけて、元気であることを知らせてあった。最後の方に出した手紙は、二人と一匹の方が早く着いてしまって、届いていなかった。

そのメグも、アルヴァニスタの最新のエルフ織りのスカーフを手に嬉しそうだった。

子供たちが、おみやげ分けは部屋でやるようにと居間を追い払われると、メルとディオは別に取っておいたおみやげを出した。

チェスターには、絶対に燃えないというヴァルハラの町の衣装店『アルバトロス』製のエプロン、ミントには、とてもよく似合いそうな薔薇色の口紅と薔薇のイヤリング、そしてクレスには、魔除と幸運の紋章の入ったエルフ織りの鞘を贈った。

すると、

「僕らからも――というより、クラースさんからの贈り物があるんだ」

そうクレスが言って二人に渡したのは、用途もわからない機械だった。

「これは……？」

「マナを圧縮して溜める装置だよ。精霊の交替が次に起こるのは、アセリア暦四三五四年――《大消失》のあとだからね。魔法素収束点にはまだマナが残っているけど、大気中にはほとんどないはずなんだ。でも、これを取り付ければ、マナがない世界でもレアバードを使うことが出来る」

「クラースさんがこれを……」

「はい、これが付いていた手紙――というよりメモだけど」

メルとディオは渡された紙を読んだ。

『メル、ディオ、そしてクルール。

君達がこの手紙を読む頃には、クレスから《大消失》についての真実を聞いていることだろう。

黙っていたことをどうか許して欲しい。

そしてクレスを責めないでやってくれ。

消失後の楽観論は、私が保証したものなのだ。

せめてもの罪滅ぼしに、君達にはこれを贈る。少しでも役にたてば幸いだ。

追伸：取り付けは、君達の父親に頼むといい。魔科学を学んだ者なら、造作もあるまい。

では、元気で。

クラース・F・レスター』

「三日前に、国営科学アカデミーで機械のひとつがいきなり作動して、蓋が開いたらしいんだ。僕宛てになっていたから、取りにいったら、実は君達への贈り物だったんだよ」

メルは機械をそっと抱きしめた。

ありがたくて涙が出そうだった。本当に短い間だったのに、時を越えてまで気遣ってくれるとは。

「充マナはもう済んでる。あとは取り付ければいいだけだよ」

メルは頷いた。

「……行くのか？」
メルはチェスターを見た。
「この時代の精霊の試練は終わっちまったからな、いかなきゃならないんだろうが……ガキどもが寂しがるぜ」
それをいわれると二人は辛かった。すでに、ノルンからは次の時代への扉を開いたとの告知を受けていた。そのまま島に戻って自分の時代に帰ることも可能だったが、それをしなかったのは、もう一度皆に会いたかったからだ。だが、顔を見てしまうと、今度は去り難かった。
おそらくはもう二度と、会うことはない。
五十年後であれば、探せば可能かも知れない。だが、メルやディオにとっては昨日、一昨日のことでも、メグやリックスには五十年もの歳月を経た後なのだ。それに、彼らには、自分たちが未来から来たことは、最後まで言うつもりはなかった。この時代でそれを知るのは、最後まで、クレス、チェスター、ミントの三人だけだ。
「行くさ！」顔をあげて言ったディオの瞳は明るかった。「やり通すって決めたんだもんな！」
メルも大きく頷いた。
「そうか」チェスターの大きな手が、メルとディオの肩に置かれた。「がんばれよ」
「……でも、兄貴」ディオは鼻を擦った。「あと十日だけ居ていいかな？　まだ、約束を果た

してもらってないからさ」

「約束？」

ディオはクレスを見た。「稽古をつけてくれるって……あの約束、まだ有効、かな？」

「！」クレスは驚き、それから笑顔になった。「もちろん！」

「わたしにも」とメルはミントとチェスターを見た。「いろいろと教えてくれますか？」

「ええ」ミントは柔らかく微笑んだ。「わたしに出来ることならなんでも」

肩に置かれたチェスターの手に、ぐっと力がこもった。「よし。あと十日、びしびししごいてやるからな」

「げっ。そんなに張り切らなくていいよ、兄貴」

ディオはのけぞり、

「お手柔らかにお願いします」

メルは頭を下げた。

二人のまったく正反対の動きに、チェスターは体のバランスを崩して危うく二人を巻き込んで倒れそうになった。

クレスとミントはそれを見て笑った。つられてチェスターも、ディオも、クルールも、メルも笑った。

そうして笑いながら、堪えきれずに、メルの瞳から、大きな涙がこぼれて落ちた。

二人が十日後に島に帰ることを告げると、子供たちは大騒ぎになった。
それを説得し、納得させたのは、もちろん、クレス、チェスター、ミントの三人だった。
「こいつらが帰るのを待ってる人がいるんだ。おまえたちがどこに行っても、俺やクレス、ミントが待っているようにな。帰らなかったら、その人たちが悲しむ——わかるな」
もちろん、それはしぶしぶでしかなかったが、我儘(わがまま)を言って困らせたりしない、と皆は約束した。
翌日からメルとディオは、クレス、ミント、チェスターの三人から、厳しくも暖かい指導を受けた。それは、何物にも替え難(かえがた)い、貴重で濃密な時間だった。空(あ)いた時間は、子供たちと遊ぶことにすべて費(つい)やした。最後の十日間、チェスターは子供たちの仕事をすべて免除(めんじょ)してくれたので、皆は、それこそ夢中になって遊ぶことが出来た。
十日など、あっという間だった。
最後の夜、皆は二人と一匹のために、盛大なお別れパーティを開いてくれた。
メルとディオは本当は料理人に《なりきって》その腕を振るおうと思ったのだが、それは止められた。代わりに子供たちがチェスターたちを手伝って、御馳走(ごちそう)をしてくれることになった。
村で手に入る最高の材料を使い、とても食べきれないと思われるほどの量の料理がテーブル

の上に並べられた。誰もがひとつは何かを作り、それをひとつずつ解説しながら、二人と一匹の前に出してくれた。それらは、どんなに《なりきって》作った料理よりもおいしかった。『どんなに黄金を積んで集めた食材を使っても、そこに食べる人への想いが込められていなければ、ただの目玉焼きにも劣る』という言葉を二人は思い出した。《なりきる》修行の途中で、コックの服を貸してくれた古参の料理人が教えてくれた言葉だった。

おかえしに、ディオにも手伝わせ、メルは得意のマロンパイを作った。栗のシロップ漬けがあったのがよかった。もちろん《なりきって》はいない。

パイは大好評で、メグにせがまれ、メルは作り方を教えた。

その間、ディオは男の子と小さな女の子たちを集めて、冒険談を披露していたようで、台所まで歓声や悲鳴が聞こえてきていた。あんまり話し方が巧みだったから、ひょっとすると弁士の服をこっそりと着込んでいたのかも知れない。

「元気でね」メモをしながら、メグは言った。「またいつか会いましょうね」

「うん」としか、メルには言えなかった。

「……ところで、メル。あなた、チェスター兄さんのこと、好きでしょ？」

あまりに唐突な問いに、メルは目を白黒させた。

「わかるわ。兄さん、格好いいもんね」

「ち、ちょっとまって、メグ。違うわよ」

「嘘。目を見ればわかる」メグは指をメルの鼻に突き付けた。「わたしはもうあきらめたけど、あの頃のわたしとおんなじ目をしてたもの」

「あきらめたって……メグ、まだ十歳でしょ？」

「歳なんか関係ないわ」メグは大人びた雰囲気で肩を竦めた。「兄さんの胸には、ずっとアーチェさんが住んでるから、だめなのよね……。わたしも早く新しい恋を見つけるから、メルもそうした方がいいわよ」

「あ、ありがとう」

メルはあえて否定はせずに、ただ、そう答えた。確かにチェスターのことは好きだったが、それが恋なのかはわからなかった。こうして帰ることが決まって、寂しさは感じるが、よく言われるように身が斬られるようだ、とかそういう気持ちの揺れはなかった。

憧れ、というものなのかも知れない、と想い至り、メルは自分の頭でっかちが嫌になった。知識だけでいろいろ知っているというのも良し悪しだ。

やがて、ひとり、またひとりと子供たちは眠り込み、そうして最後には、子供の中ではメルとディオだけが起きていた。

おやすみなさい、今日はありがとう、と二人はチェスターたちに言って、静かに部屋へと引き上げた。

部屋では皆、寝息をたてて気持ちよさそうに眠っていた。

彼らの寝息に誘われて、メルもディオもクルールも、すぐに眠りに落ちていった。
月の輝きは子供たちを包み、どこまでも青く優しかった。

翌朝早く、二人と一匹は自分たちの時代へと帰って行った。
子供たち、ひとりひとりと強く握手を交わし、明るく笑顔で次の時代へと旅立って行った。
「紹介状は渡したのか？」遠ざかるレアバードを見ながら、クレスは訊いた。「見なかったけど」
「こっそり荷物に忍ばせた」とチェスター。
クレスは呆れた顔になった。「気がつかなかったらどうするんだよ」
「大丈夫だ。例の機械に張り付けておいたから絶対に気づく」
「……すずちゃん、喜ぶだろうな」
「そうか？」
「そりゃあ、よろこぶさ」
「わたしも、そう思います」微笑みながらミントも言った。「すずちゃん、元気でいるでしょうか」
「元気だろ」チェスターの言い方はぶっきらぼうだったが、そこには暖かさがにじんでいた。
「元気に決まってるさ」

「そうですね」ふふ、とミントは笑う。
「さあて」チェスターは大きく伸びをひとつした。「ガキどもの服の洗濯でもするか！」
空はよく晴れ、洗濯にはこれ以上はない天気だった。

4　すず

　ディオから渡された機械を手に、エリック・フォートはただただ感心するしかなかった。
「さすがにレスター博士は違う」
「レスター博士？」ディオは首を捻った「誰？」
「ばかね、クラースさんのことじゃない。クラース・F・レスター」とメル。「たしかに『博士』なんて呼ぶと、ぜんぜん違う人みたいに聞こえるけど」
「いやいや、彼こそまさに『博士』と呼ばれるにふさわしい人物だよ」魔法素を圧縮して溜めるというその機械――『マナパック』を、ためつすがめつしながら、エリックはただ唸るしかなかった。
　ディオが持ち帰ったそれは、理論上は可能と考えられていたが実際には造られたことのない機械だった。大きさは食パン半斤ほどで、非常に軽い金属で出来ていて、アセリア暦四二〇三年の技術でどうやって加工したのか皆目見当もつかない。エリックが同じ物を作ろうと思えば、おそらく大きさも重さもレアバードが飛び上がれなくなるくらいのものになるに違いなか

った。それも、作れれば、の話である。『理論』と『実践』の間には、狭いが深い谷があるのだ。

「なあ、ディオ。ちょっとだけ……ちょっとだけ分解させてくれないかな？　なに、ちゃんと元通りにして、マナも溜め直すから大丈夫。な？　いいだろう？」

「だ、だめだよ、パパ！」ディオはぎょっとした顔になって、エリックの手からパックを奪い取り、宝物のように抱きしめた。「これがなかったら、レアバードが飛べないんだから！」

「だから、すぐに元に戻すからさ。——な？　これからの魔科学の発展には、ぜひとも必要なんだ」

「じゃあ、『試練』が全部終わってからでいいだろ？　出かけても、ここへはまた一瞬で戻ってくるんだからさ」

　たしかにその通りではあった。前回、クラースのいる時代に出かけたときと同じく、メルとディオとクルールが、アセリア暦四三〇六年に出発して四四〇八年に戻るまでの時間は、僅か数分だった。二人と一匹は、前回は一カ月、今回は一カ月半、それぞれ過去に留まっていたのだが同じ時間が未来においても流れるわけではない。それはエリックとファーメルにとっては救いだった。二人と一匹が過ごす時間と同じだけ待たねばならないのだとしたら、恐ろしい苦痛に違いなかった。なにしろ安否を知る手段がないのだから。

　それはともかく、ディオの言うことはもっともだが、研究対象が目の前にあってそれに手が

出せないというのは、科学者にとっては拷問以外の何物でもなかった。おあずけを命令された犬の気分だった。

よほど情けない顔をしていたのだろう、メルは笑いを堪えようとして堪えきれずに腹をよじった。「パパったら……」

「あなた、いいかげんになさいな」微笑みながら工房に戻ってきたファーメルは笑顔だった。

「子供じゃないんだから、わがままを言ってディオを困らせるなんて、恥ずかしいわよ」

そう言われると、返す言葉もなかった。あきらめるしかない——今は。だが、戻ってきたその時は、からなず分解して構造を解明してくれる、とエリックは心に誓った。

「ところでおまえたち、体の調子はどうだい？　あとでバッジを調べさせておくれ」

「わかった。……そういえば、近頃、時々だけど変な夢を見るよ」

「夢？」

「うん。オレがもう一人いて、それで何も言わずに恐ろしい目でこっちをじっと見てるんだ」

「それ……わたしも見た」メルは言った。「ディオとおんなじ。わたしが、怖い目で、ただじっとわたしを睨んでるの」

「メルも見てたのか！」

メルは頷いた。「ディオもだったのね」

「……時空転移の影響かな」エリックは、考え込んだ。「ドッペルゲンガー現象に似てると言

えないこともないな」
「ドッペルゲンガー？」ディオは訊いた。「なにそれ？」
「『もう一人の自分』のことだ。そっくりさんじゃないぞ。なんらかの理由で同一世界にもう一人の自分が現れて、それと出会うとどちらかが消滅するという怪談さ」
「怖い！」メルはエリックの腕にすがった。「いやなこと言わないで！」
「オ、オレは平気だぞ！」だがディオの頬は引きつっていた。「へ、平気さ！」
「あなた、馬鹿なことを言ってこの子たちを怖がらせないで」
「ごめんごめん。ただの作り話さ」エリックは二人の腕に触れた。「大丈夫」
「さあ、あなたたち、着替えてきなさい」ファーメルはメルとディオのおしりをぽんぽんと叩いた。「すぐに出発というわけじゃないんでしょう？」
「ちょっとゆっくりするつもり」とメルは気を取り直して答えた。「町の友達にも会いたいから」
「オレも」
　エリックとファーメルは顔を見合わせた。
　メルとディオは人気があって、学校にいた時分はいつもいつも友達が二人を取り巻いていたが、彼らに誘われることはあっても、自分たちから誘うことはなかった。卒業し、《なりきり師》を始めてからは、さらに付き合いは減った。相変わらず誘いは多かったのだが、家を留守

にしていることが多くなったからだ。ほとんどの友達とは、卒業からこっち、会っていないはずで、この間までは、それを気にした様子もなかった。

二人は工房を出ると、右と左に分かれて、それぞれの部屋へと駆けていった。クルールは短い足で二人を追ったが、分かれ場所でどちらに行くかさんざん迷った挙げ句、結局、どちらにもついていかずに工房へと戻ってきてしまい、垂れた耳をますます下げて、「きゅー……」と鳴いた。エリックはクルールを抱き上げ、赤ん坊にするように丸い背中を軽く叩いてやると、短い尻尾がぱたぱたと動いた。

「聞いたかい、ファム？」エリックはクルールの耳の後ろを掻いた。「あの子たちが、自分から友達に会いに行くといったよ」

ファーメルは頷いた。「少し、大人になったように見えるわ。たった数分のことなのに、あの子たちは成長しているのね」

「僕らには数分でも、あの子たちには何カ月もの間だからね。でも、良い経験をしているみたいだ」

「それは認めるけど」ファーメルは首を振った。「それでも早く済んで欲しいわ」

「それは僕も同じだよ」

エリックは空いている右腕で妻の体を抱き寄せた。ファーメルの頭の重さが、心に巣食いそうになる影を祓ってくれる。僕の腕もそうだといいけれど、と思いながら、エリックは妻を抱

く手に僅かに力を込めた。

「明日出発するよ」ディオが二人にそう告げたのは、レアバードの改造が済んだ翌夜の、夕食後のお茶の時間のことだった。

台所と部屋続きの、四人で掛けてしまえばそれでいっぱいいっぱいの小さな白木のテーブルに、家族は円座になっていた。エリックとファーメルの前には、ブランデーを入れたコーヒー、メルとディオはよく温めたミルクティーがあって湯気を立てていたが、裏腹に部屋の温度は下がったと思えた。クルールだけがそれに気付くことなく、隅のクッションに頭を乗せて、丸くなって寝息を立てている。

短い沈黙の後、「もう？」とファーメルが訊いたのも当然だった。

マナパックの取り付けには、丸四日を要したので、帰ってきてからまだ五日しか経っていない。

エリックにしても、てっきり十日はいるのだと思っていた。まるで、改造するためだけに帰ってきたようなタイミングの物言いは、ファーメルを落胆させたに違いなく、無論、エリックも同様であった。彼は丸四日、それこそレアバードにかかりきりで、双子たちと話をする機会は夕食のときぐらいしかなく、まだ十分だとは言えなかった。

エリックは自分の不甲斐なさをまず呪った。取り付けにこれほど時間がかからなければ、も

っと子供たちと過ごす時間を取れたのだ。

取り付け作業は、クラースの手紙には、簡単に出来るようなことが書いてあったが、実際には苦労させられた。『実践魔科学』を修めた人間には何でもないことも、『理論魔科学』だけしか修めることの出来なかった人間には、難解なパズルも同様だったのだ。まさに、狭いが深い谷、がそこにはあった。アルヴァニスタの王立図書館から借りっぱなしになっている『魔法物理学』と『魔法機械工学』の分厚い本をひっくり返して、パックのそれぞれの端子の役割を推測し、『反力機関』に直結されている『魔法素変換機』に接続したのだが、そうしてみるとまさしくクラース謹製のマナパックはレアバード専用に作られたものだとわかった。

試運転はうまくいった。僅かに消費した魔法素の再充填も、問題なく行われているようだった。中身が分からなくても使うことが出来るのは機械の常だ。

エリックがレアバードを相手に孤軍奮闘している間、メルとディオは、クルールを連れて町に出かけていてほとんど家にいなかったので、ファーメルも寂しい思いをしていたが、それも、まだまだ時間があると思えば我慢できているような節があった。

友人たちの間で、クルールはその可愛さもあってたちまち人気者になったようだ。エリックとファーメルが騒がしいのが嫌いなことを知っているので、さすがに友人を家に連れて来ることはしなかったが、代わりに日替わりで招待を受けていたらしい。今年の栗の実は、クルールがほとんど食べてしまっていて、メルは得意のマロンパイを作ることは出来なかったが、代わ

りにシナモンの利いた焼き林檎を作って持っていったりしていた。
夜はもっぱら、ディオの天下だった。アセリア暦四三〇六年の数々の武勇伝を、身振り手振りを交えて語り、あまり大袈裟になるとメルがそれを修正した。クラースの時代のときよりもますます語りに磨きがかかったのは、心の多くを取り戻しているからかもしれない。その生き生きとした様子を見ると、二人を冒険に出して良かったのかも、とその時はエリックとファーメルはほんの僅かだが心を慰められたが、やはり改めてまた、危険な冒険の旅に出発することを聞かされれば、心穏やかではいられるはずもなかった。
「今度もぱっと行って、ぱっと戻ってくるからさ、心配しないでよね」
それは無理というものだ。ファーメルは笑顔を作ろうとして失敗していた。しかし口に出してはもう何も言わなかった。言っても無駄であり、言えばメルとディオが苦しむことが分かっているからであろう。黙り込む以外に何が出来ようか。だが、二人して黙り込むことは、暗に双子たちを責める事になる。仕方なくエリックは微笑んだ。
「気をつけるんだぞ」陳腐だが、他に何が言えよう。「無理だけはするなよ。メル、ディオが調子に乗らないように良く見張るんだぞ」
「わかってるわ、パパ」メルは小悪魔っぽく微笑んで、ディオを横目で見た。「ちゃんと手綱を引くから」
「オレは馬かよっ！」ディオが大袈裟に怒ると、

「馬の方がずっと素直だわ」とメルは鼻で笑った。
エリックは二人のそのやりとりがさも可笑しかったかのように大袈裟に笑った。二人が場を和ませようと考えているのがわかったからだった。ファーメルは乗ってこないだろう、と思ったがその通りだった。
感情を押し殺した仮面のような顔で席を立つと、双子たちを振り返ることもなく、部屋を出ていってしまった。扉が閉まる音に、クルールが目を覚まして「うきゅ？」と鳴き、メルの足元にやってきて、甘えるように短い両手を彼女の膝に乗せた。メルは少し寂しげに微笑んで、クルールの頭を撫でてやった。
誰も何も言わず、テーブルの上で飲み物だけが冷めていった。
「……ちょっとわざとらしかったかな」ディオが上目遣いにエリックに訊いたのは、ファーメルが出ていってから、たっぷり十五分は経ってからだった。「ママ、怒った……？」
エリックは溜息をついた。「怒ったわけじゃないさ。ママはとっても心配してるだけだよ」
「でも」とメルも小さな吐息を洩らした。「《なりきり師》のお仕事に出かけるときは、ぜんぜん平気だったのに」
「それはそうさ。ギルドの紹介なら安心だし、パパたちも危険な仕事の依頼は決して受けなかったからね。それに、万が一なにかあれば、各町や村のギルドの方で素早く対処してくれるようになっている。けれど二人が今しているのは、それとはまったく違うことだろう？」

双子は頷いた。
「怪物と戦うなんてのは、仕事と違うどころか、間違いなく危険なことだ。だからママはとても心配なんだ——むろんパパもだけどね」
「だからこそ、早く済ませちゃいたいんだ、パパ。誰かを心配するって事が、本当は、どんなに辛いことか、心を取り戻して分かったから」
「実は、戻らないで直接、四三五四年に行こうか、ってディオと話してたの」メルは溜息をついた。「それでもう一、二カ月、過去で過ごしても、戻ってきたときにはやっぱり数分しかたっていないわけだから、パパもママも心配する回数が減るし。でも、パックの取り付けはどうしようもなかったから、戻るしかなかったの。……パパの服を持っていけば良かった。そうすれば《なりきって》取り付けも出来たのに」
「ママが聞いたら喜ぶよ」エリックは立ち上がると並んで座っている双子たちの肩に手を置いた。「さあ、今日はもう寝なさい。明日は早いのだろう」
二人は頷き、エリックの首に腕を回して左右から頬にキスをした。
「おやすみ、パパ」
「おやすみなさい、パパ。二階に行って、ママにもお休みのキスをしていい？」
「もちろんだとも」
エリックが許可すると、双子はクルールを連れて二階へと階段を駆け上がっていった。

（しばらくは邪魔をしない方がいいな）

時間をつぶすことを考えた時、台所にコーヒーに入れたブランデーがまだ十分残っていることを思い出して、コーヒーのカップを手に椅子を立った。

そうして、コーヒーを飲んでいるのか、ブランデーを飲んでいるのかわからないくらいに注ぎ、天井を見上げて溜息をついた。

「あれが『水鏡ユミルの森』だな」レアバードを旋回させながら、ディオは眼下に広がる濃い緑の絨毯を見下ろして言った。「でかい森だなあ……ギースの町が丸ごと入っちゃうんじゃないか？」

「少し開けてる所が、きっとエルフの村ね」ディオにしっかりと掴まってはいるが、かなり大胆にメルは体を乗り出した。「……『忍びの里』は何処かしら」

「隠れ里なんだろ？　空から探してもわからなくなってるんじゃないかな、忍術、とかいう奴でさ。もう少し降りてみよう」

メルが止める間もなく、ディオは操縦桿を倒してレアバードを降下させた。この飛行機械自体は、元々この時代のものだから見つかっても問題はないが、今は《大消失》の後である。魔法素がほぼ消えた空を魔法素をエネルギーにする機械が飛んでいるのはおかしな事だ。だからこそ、見つからないように高度を取っていたのだ。

「ディオ、高く飛んで！　誰かに見られるでしょ！」
メルが耳元で怒鳴ると、ディオはちぇっと舌を鳴らして操縦桿を引き起こし、再び高度をとった。
この時代——アセリア暦四三五四年に二人と一匹が時空転移をしてやってきたのは、今朝早くのことである。
昨夜、ファーメルにおやすみのキスをしたときは、彼女はまだ不安そうで、双子をクルールごと痛いほどに抱きしめたが、今朝はいつも通りの母のように見えた。もちろん、微笑みの下には不安が潜んでいたのだろうが、少なくとも表に出てはいなかった。
「たぶん、わたしたちが時間を越えたあとも、ずっと絵の前にいるんでしょうね」
人の生活のにおいのしない、影の屋敷の工房の『月の絵』の前で、メルはそう言った。その絵は『光』を題材にしたファーメル・フォートの一連の作品の、最後の一枚である。ノルンは、前二つの時代への扉同様、そこに『時の扉』を開き、二人と一匹を誘ったのだった。
「長い時間じゃないさ」とディオ。「それにこれで最後だろ？」
ディオのいう通りだった。ノルンによれば、この時代では四人の精霊が目覚めているはずだった。四二〇三年、四三〇六年で出会った数と合わせると、これで精霊は全部で十二人となる。『精霊の試練』の数は十二——つまり、この時代ですべては終わるのだ。
「目覚めているのは、ヴォルト、シャドウ、オリジン、プルートです」そうノルンは言ってい

た。ヴォルトはレアバードを起動させた電気の精霊、シャドウは闇を司る影の精霊、オリジンは聖剣『エターナルソード』を合成した精霊の王たる存在、そしてプルートは精霊でありながら冥界を統べる魔王でもある。その履歴を聞いただけでも、いずれ劣らぬ強敵だとわかる。特に、精霊王オリジンと魔王プルートは別格だ、とノルンは二人と一匹に忠告した。

だが、メルとディオとても、昔のままではない。二つの時代を経て、確実に強くなった、という自負はある。四三〇六年では、クレス、ミント、チェスターの、伝説の三勇者に直々に稽古をつけてもらう、というどんな宝石や黄金にも代えられない経験もした。ディオは、アルベイン流の基礎である『格闘剣士』としての修練を積めたし、メルにしてもチェスターに付いて弓の訓練を行い、『スナイパー』と呼ばれるまでに成長できた。ミントからは二人ともが、法術師としての心構え、一角馬を通して繋がるこの世界と神の関係、本格式の日課の行い方を習っている。相手が誰であれ、簡単には負けない、と思える程度の自信はついていた。

ディオはレアバードで森の上をさらに三回旋回したが、やはりエルフの村以外は何も見つけられなかった。小さな池があって多少開けている場所もあるが、そうした場所にも人影は見えず、見かけたりしてもせいぜい栗鼠のような小動物がよいところだった。森はエルフたちの狩場のはずだが、いまのところそうした様子も見かけられなかった。

「こうして鳶みたいにぐるぐる飛んでてもマナを消費するばっかだから、とにかく適当に降りてみようぜ」

「なら、とりあえず森の北西に降りましょ。チェスターさんの手紙にも、そっちのほうって書いてあったし」

マナパックに貼り付けられていたチェスターの手紙は二通あって、一通が藤林すず宛ての紹介状であり、もう一通が『忍びの里』の場所を記した地図であった。もっともそれは、水鏡ユミルのエルフの村を囲む精霊の森を描いた稚拙な絵で、そこに『この辺』とおおざっぱに丸をつけただけのものだった。その丸が、森の北西辺りにつけられていたのである。メルとディオの時代でも、精霊の森は、別名、迷いの森、といわれていて、一度入り込んだら最後、よほどの幸運がなければ生きては出られない場所、といわれている。冬でも枯れぬ背の高い樹々が生い茂り、昼でもほの暗く、どんなに気をつけていても簡単に方向感覚を失うので、エルフやハーフエルフの案内なしに森を抜けることは極めて難しい。

そこへ恐れもなしに降りられるのは、迷ったら飛び上がればいいだけだからだ。

数分で、着陸に適した開けた場所が見つかった。水の綺麗な小さな池が見える。川はないから、地下水脈に何処かで繋がっているのだろう。ディオは辺りに人影のない事を確認してエンジン出力を絞り、反力を次第に弱めていった。比例して、レアバードはゆっくりと降下していく。鳥を模した翼が木に触れるか触れないかの距離で見事に抜け、結局、一度も接触することなく、池のほとりに着陸した。機体を包む反力場内の小石が僅かに浮き上がる。ウイングパックにレアバードを圧縮格納してしまうと、反力場はたちまち消滅し、石は落ちた。

ディオがレアバードをしまう間に、メルは辺りを見回した。どちらを向いても、幹の太い木の列が並んでいる。所々、白っぽい岩が埋まって顔を出しているのは何の名残だろうか？　触れてみると妙に滑らかだった。雨や川といった水に長年さらされて表面を磨かれたというよりは、高い熱で一気に表面を溶かされた、という風に見えないこともない。

クルールも物珍しいのか、島では見かけない花をつついたり、葉を噛んだりしていたが、そのうちに動きが止まって、何事かと見ると、クルールの前には一匹の栗鼠がいて、互いに見つめあっているのだった。栗鼠が首をかしげると、鏡のようにクルールも首をかしげる。余りの愛らしい仕草に、メルはクルールを抱きしめたくてたまらなくなった。

「済んだぜ！」

ディオがそう言った途端、栗鼠は驚いたのだろう、きびすを返して素早く逃げ出した。それだけならば良かったのだが、クルールが後を追って駆け出し、メルを慌てさせた。

「ディオの馬鹿！　声がおっきいのよ！」

やつあたりをし、メルはクルールを追って獣道に飛び込んだ。見失ったら、二度と見つけられないかもしれない。薄暗い獣道には雑草が生え、樹の根本には地衣類が絨毯を敷いたように生えている。クルールの鮮やかな緑の体毛は、そうした草や苔にまぎれそうになる。まてよ、と背中から声が聞こえ、ディオがちゃんと追いかけてきているのがわかり、メルは安心してクルールに集中できた。顔を打ちそうになる枝を腕で払いのけて進む。

クルールは背の低い、木苺の木の列に飛び込んで姿が見えなくなった。メルも同じようにそこを通ったが、枝が骸骨の指のように銀の髪にからんだ。髪が傷むのを嘆きながら抜けた場所は、行き止まりだった。地面が壁のように隆起して行く手を遮っている。クルールはその壁の少し手前で、地層がむき出しになった土の崖を見つめていた。地面にはここだけ枯れ葉が積もっている。

「はぐれたらどうするんだよ！」

本気で怒りながら木苺の木をなぎ倒すようにしてディオが追いつくと、クルールは二人を振りかえり、そして一歩前に——壁に向かって進んだ。すると、突如旋風が起こり、枯れ葉が渦を巻いて舞い上がりクルールの姿を隠した。二人は思わず腕で顔をかばった。風がおさまった時、クルールの姿は何処にもなかった。

「嘘っ、クルール!?」

メルとディオは慌てて駆け出した。クルールが消えた場所に足を踏み入れた途端、二人は異様な感覚を憶えた。石化させられたように体がほとんど動かない。周囲で枯れ葉が舞い上がる。

（ストーム!?）

メルは何者かに魔法をかけられたのかと思ったが、風に触れても肌は切れなかったので、真空刃を生む風属性の魔法の類ではなかった。

そう安心した途端、目の前が真っ白になった。思わず目をつぶったが、そうしていなければ、目を灼かれたかもしれなかった。だが熱は感じず、時間も僅かだった。瞼の裏で光が急速に遠のいていくのがわかった。それと同時に体も自由を取り戻し、二人はゆっくりと目を開けた。

「うきゅ！」

クルールが、手を上げて二人を迎えた。メルとディオはしかし、クルールに構う余裕はなかった。目の前の光景が、一変していたからである。確かについさっきまでは隆起した土壁があった。だが今はそれは消え失せ、代わりに何処の地方にいっても見なかった、変わった様式の家が並ぶ長閑な風景の村が現れていた。家は藁葺きで、壁はすべて土壁のように見える。すべて平屋で軒下には、ある家では大根が筏のように繋がれて下がり、ある家では柿の実が葡萄の房のようにまとめられて下がっていた。畑があり、盛られた土からは等間隔に何かの野菜の葉が顔を覗かせている。道を挟んで川沿いには、背の低い垣根のような、丸く刈り込まれた木が並び、地味な色の前あわせの服と、全体が膨らんだズボン、背に籠を背負い、頭にはタオルを巻いた年齢も様々な男女が、楽しげに談笑しながら作業に励んでいた。皆、髪は茶に近い金で瞳は一様に茶色をしていて、肌がすこし黄みがかっているのが、特徴といえば特徴だった。

メルとディオに気が付いた人は、作業の手を止めて向き直って深々とお辞儀をし、その礼儀正しさは二人をおおいに戸惑わせた。

（この村はこれまでの何処の町や村とも違うわ）メルも軽く会釈をした。（礼儀正しいし、愛想もいい。でも……なにか……壁を感じる）

（メル、ここが『忍びの里』かな？）体を寄せてきて、ディオが訊いた。（でも、どうなってんだ？　空から見たときはこんな村はなかったよな）

（あの旋風……なにかの転送装置みたいなものだったのかも）

（まさか！　そんな技術があるような村には見えないぜ。こっち見てにこにこしてる人達、手作業で何かやってたじゃんか。そんなもんが作れるなら、とっくに機械化されてるだろ？）

（原理なんか知らないで使ってるのかもよ。機械ってのはそういう物だ、ってパパがいってたわ）

ディオは納得していない様子だったが、しかし、それ以上、言い合いを続けるつもりはないようだった。

その時、メルとディオのすぐ背後で再び旋風が起こり、二人はぎょっとして離れた。旋風の中心は白く輝く光の柱で、それが徐々に薄れるに従い、中に人の姿が見えてきた。黒い衣装を着た、髪も眉も白く、顔には深い皺が刻まれていて、老人といっていい風貌の男だったが、その一方で背はしゃんと伸び、体はまったく老いを感じさせぬ逞しさが衣装の上からでも感じられた。

旋風が消え、鋭い眼光が二人を射抜くように見た。値踏みをされている、と彼らは感じた。

クルールだけが意に介(かい)さずに、二人の間に割り込むようにして前に出ると、片手を挨拶(あいさつ)するようにあげた。

「うきゅ！」

すると、瞳から厳(きび)しさが消え、男の顔はたちまちほころんだ。にやけた、といってもいい。その落差は、二人が思わず吹き出してしまうほどだった。男は、はっとして表情を引(ひ)き締(し)め、咳払(せきばら)いをしたが、後の祭りである。その様子に、作業をしていた人々の間にも忍び笑いが広がった。男はもういちど咳払いをした。

「……『忍びの里』にようおいでなさいました。御館(おやかた)様がお待ちでございます」

メルとディオは、考えてもいなかった言葉に驚いた。ここが『忍びの里』であったことは予想できたことだが、今日、ここを訪れることをどうして知り得(え)ることが出来ようか。わかるはずがない。急に、里全体が怪(あや)しげに思え、メルもディオも僅かに表情を硬(かた)くした。

「ご案内致(いた)します」

「あの、わたしたち、藤林すずさんに会いたくて来たんですが」

だが、男は何も答えずに歩き出した。聞こえなかった、ということはあるまい。二人は顔を一度見合わせて微(かす)かに頷(うなず)き、しかたなく後に続いた。ただ一匹、暢気(のんき)な様子のクルールは、小動物の愛らしさで里の人間を魅了(みりょう)しながら、これも三人の後に付いていった。

「お分かりのこととは存じますが」と振り向かずに男は言った。「この里は隠れ里。他言(たごん)は無

用に願いますぞ。もしも他言なさりしその時は……ふっふっふっ……いやいや、あえては申しますまい」

教えてもらうまでもない。これは恫喝だった。安易に話せば命はない、ということだろう。隠れ里というからには、人に知られては困るはず。口だけではなく本気のはずだった。別に答えを求めてはいないと思えたので、二人は黙って歩き続けた。

連れて行かれたのは、川に架かった扇状の木製の橋を渡った先にある、大きな平屋の館だった。他の家屋と同じく独特な建築様式の家で、人目を遮るために板を立てた塀の他に石や樹、竹など生やした自然の塀もあって、これは何処にいっても見られないものだ。戸は引き戸で、開けるとガラガラと大きな音がした。中に入ると、そこに広間はなく、すぐに一段高い、長い板張りの廊下が続いていた。

男は履き物を脱いで上がった。「お二人とも、靴は脱いでおあがりください。それがこの里の流儀ですので」

これも初めてのことだった。普段、靴を脱ぐのはベッドと風呂のときだけだった。これは何処へいっても、皆、そうしている。しかし流儀とあれば仕方がない。二人はブーツを脱いで廊下に上がった。はだしの足に木の感触が冷たく心地よかった。クルールは何も履いていないので、男が側においてあった布で足の裏を拭いた。

男は再び先に立った。黒い鏡のように磨き上げられた廊下は、歩くたびに小さな鳥の鳴き声

のような音を立てた。真っ直ぐに進んだ先は、下の方に美しい模様が描かれた紙を貼った引き戸で終わっていた。男は廊下の右端に寄ると、片膝と片拳を床に付いて腰を落とし、頭を低く下げた。

「御館様、お連れ致しました」

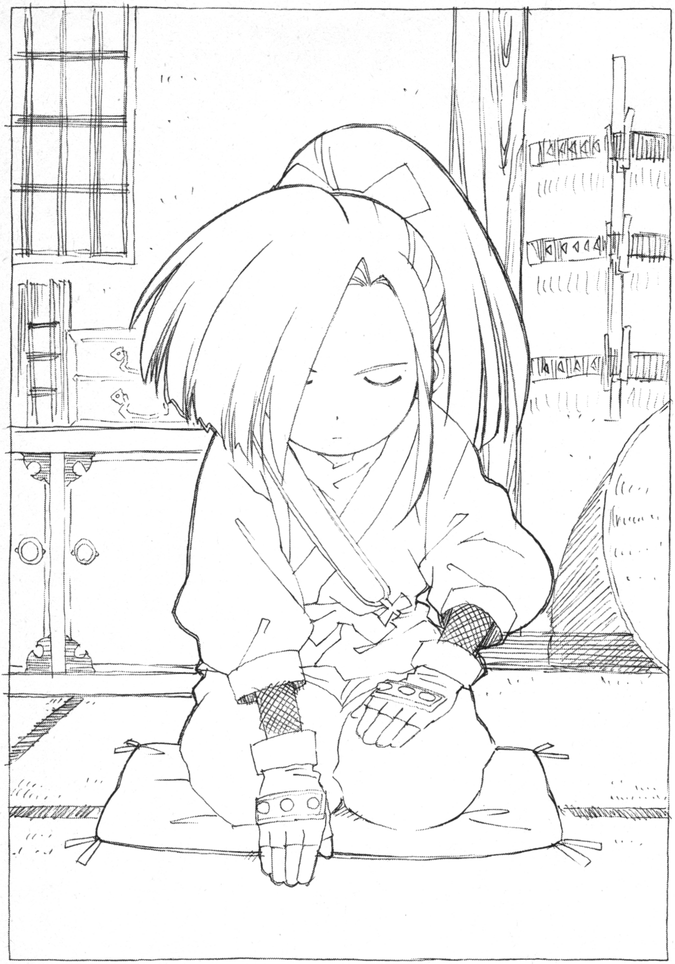
「御苦労」

(女……の子?)

　部屋の中から返った声は、確かに若い女性のものだった。聞きようによっては子供とも思える。音もなく、戸が左右に引き開けられた。部屋の中はどことなく青臭いような匂いがして、床には絨毯でも木板でもない、見たことの無い物が敷かれていて、中央にやたらと背の低いテーブルがひとつ置かれていた。そのテーブルの向こうに、声の主は座っていた。といっても椅子にではない。足を折り曲げ、床に直接である。

　少女だった。年の頃はメル＆ディオよりも二つ三つ若く見える。茶に近い金の長い髪をポニーテールにして赤いリボンで結んでいて、前髪が左の瞳を隠すようにかかっている。服装は他の村人と同じだったが、色は鮮やかな赤で、首には黄色のマフラーを巻いていた。指の部分を落とし、付け根に金属板を貼り付けたグローブをはめていて、袖からは鎖帷子が覗いている。明らかな戦闘服だ。

　しかし、そのことよりも印象が強烈であったのは、少女の顔だった。メルとディオとクルー



ルを見るその瞳には温かさのかけらもなく、愛らしい顔はまるで作り物の仮面のようで表情がまるでなかった。その仮面が口を利いた。

「どうぞお入りください、異国の方」

淡い色のくちびるだけが動いて音を紡ぐ。二人と一匹は逆らうことなく部屋に足を踏み入れた。床は不思議な弾力と感触で、硬めの糸で編んだ織物のようだった。二人と一匹の背中で引き戸が閉まったが、開閉は機械式というわけではなく、戸の左右に人が控えて開閉を行っているのだった。

「お座りを。楽になさってください」

楽に、といわれてもどう座ったらいいのかもわからない。顔を見合わせたメルとディオは、いつもしているように最も楽な姿勢——ディオは胡座、メルは横座りになって、少女と対峙した。クルールはまったく構うことなくテーブルの下に潜り込んで出てこなかった。

「ようこそいらっしゃいました。……わたしがこの里の頭領、藤林すずです」

一目見たときからわかっていた。聖六勇者の最後の一人、藤林すず。六人の内で、最年少にして、クレス・アルベインすら凌ぐ最強の戦闘技術の持ち主と伝えられている『忍者』と呼称される戦士である。確かアセリア暦四三五四年現在では十一歳のはずだから、メルとディオとはふたつ違いという事になる。クレスたちと出会った頃は、『忍びの里』の頭領はすずの祖父、藤林乱蔵であったと記録が残っているので、どうやら代替わりをしたようだった。

「ユークリッド国営科学アカデミーからいらしたということは、マナ消失についての再調査のご依頼でしょうか？」

「え？」

「しかしながら、調査結果は覆ることはありません。ユークリッド王には、そうお伝えください」

「ち、ちょっと待って」メルは慌てた。どうも誰かと勘違いされているようだった。「わたしたち、ユークリッドから来たんじゃありません」

「隠さなくてもいいです。あなたがたが乗っていたレアバードは、クレス・アルベインが使用していた物。あれは、国営アカデミーに返却されたあと、いまだ彼のアカデミーが所有していることはわかっています。……どうやらアカデミーは、微少のマナでレアバードを飛ばす技術を開発したようですね」

「なんで、オレたちがレアバードで来たって事――」

「里に近づく者は、雲雀一羽であろうと見逃されることはありません。あなたがたはユミル大陸に入った時点で、我らの監視下にあったのです」

「すげえや」ディオはただ感心した。「さすが『忍者』ってとこだよな、メル！」

「……ばか」メルは肘でディオの腕を軽く突いた。「そうじゃないでしょ？」

「あ、そっか」

ディオは頭を掻くと、腰のポーチへと手を伸ばした。途端、強烈な殺気が背中から吹き付けてきて、思わず振り返ると、引き戸の脇に待機していた二人の男が腰を軽く上げ、腕を背中に回しかけていた。そこには、鞘に収まった短刀があった。ディオは唾を飲みこんで手を上げた。

「勘違いです！」とメルはすずに向かって言った。「わたしたちはユークリッドから来たわけじゃありませんし、ディオも武器を出そうとしたわけじゃありません。紹介状がポーチの中にあるんです！」

すずはしばらくメルの顔を見ていたが、二人の忍者に小さく頷いてみせた。彼らは静かに、何事もなかったかのように元の姿勢に戻った。

ディオは安堵の息をついて、それからポーチから紹介状を取り出してすずの前に置いた。

「チェスター兄貴からだよ」

そのとき、初めてすずの仮面にひびが入った。まずは驚き、そうして慌ただしく手紙を取り上げると、懐から槍の先のような刃物をこともなげに出して素早く封を切り、便箋を取り出して熱心に読みふけった。一度読み終わってしまうと、もう一度始めから読んだ。そして丁寧に元の通りに折って封筒に戻すと、衿のあわせから胸元へとしまいこんだ。そのとき、少しうつむいた顔に浮かんだ表情は、懐かしい人からの便りに嬉しさと切なさが入り混じった、実に少女らしいものだった。

だが、再び顔をあげたときには、すずはまた仮面をつけていた。彼女は控えていた男たちに向かって、呼ぶまで下がっているように命じた。淀みのない、慣れた声だった。男たちは目礼して部屋を出ていった。しかしそれから数分程、すずは目を閉じ、何も言わず、何かを考え込んでいるようだった。やがて再び目が開かれたとき、仮面もまた外されていた。

「あの人達は遠くに下がりました。ごめんなさい、すっかり勘違いしちゃって……」すずは頬を僅かに赤らめもした。「レアバードが森に向かっていると聞いて、てっきりまたユークリッド王からの依頼かと思ってしまいました」

おっちょこちょいで、と苦笑したすずのはにかんだ笑顔は、メルでさえ、どきりとするほど愛らしかった。

ようやく伝説で語られているすずと、目の前の少女が重なって見えた。戦闘力は高いが、決して冷酷ではなく、また、そうなりきれぬのが彼女の魅力として劇などでは描かれる。だが、先程までのすずはそれとは違い冷酷な戦闘機械そのもので、人間の感情など一切持ち合わせていないような顔をしていた。危うくそっちを信じてしまうところだった。

「あなたたちは、『精霊の試練』を受けるために、未来からいらっしゃったのですね」

「紹介状には、そう？」とメル。

すずは頷いた。「わたしの管理している魔法素収束点に入るための『鍵』を渡して欲しい、と書いてありました。それはすぐにでもお渡しします」

「ありがとう、すずちゃん」メルは言ってしまってからはっとした。「ご、ごめんなさい。なれなれしい呼び方をしちゃって……チェスターさんがあなたのことを話すときに、そう呼んでたものだから」
「いえ、気にしないでください。そう呼ばれるのはひさしぶりで……とても嬉しいです」
「じゃあ、オレもすずちゃんでいい？」
「もちろんです」真面目（まじめ）な顔で真面目に答えるところがまた可愛（かわい）らしい。「それから、あなたがたはお客様ですから、敬語を使わなくてもいいです……そのほうが嬉しいです」
「じゃあ……そうさせてもらおうか――な？」メルはつっかえながら言った。ディオは言われるまでもなく、端（はな）から敬語など使ってはいない。「えーと……久しぶり、っていっていたけど、すずちゃんはここの皆からはなんて呼ばれているの？」
「御館様、と。四カ月程前、お祖父（じい）様から跡目（あとめ）を引き継いだときから、そう呼ばれています。その前までは、藤林殿とか、姫様とか、すず殿とか、すずちゃん、とか呼ばれていました」
「それがいきなり御館様、か……藤林乱蔵さんはどうしたの？」
「お祖父様は、引退したその日に世界旅行に出かけてしまいました。なんでも『青春を取り戻す』のだそうです」
「勝手な爺（じい）さんだなぁ」
ディオは軽口で言ったのだが、すずには通じなかったようだ。彼女は少し顔を曇（くも）らせて、首

を振った。「お祖父様は、本当ならもっと早くに引退しているはずでした。でも跡目が——父上が行方をくらましたために、そのまま頭領であり続けるしかなかったのです」
「あ」ディオは、すずがその結果、何をしなければならなかったのかを思い出し、頭をうなだれた。「ごめん、オレ……」
「気にしないでください。そのおかげでわたしは、チェスターさんやクレスさんたちと出会うことができ、あのひとたちといっしょに、素晴らしい旅をすることが出来たので……すか……ら……」
「すずちゃん？」何かを考え込むような様子に、メルは訊いた。「何か気になることが？」
「あ、いえ」すずは首を振った。「たいしたことじゃありません。あなたがたが来る少し前、隣の部屋で午睡をしていたとき、奇妙な夢を見たことを思い出しただけです」
「夢？　どんな？」
「大きな鳥の羽を背中に生やした女性が、わたしが旅で得たことを、双子の姉弟に話して欲しいと言ったのです。すっかり忘れていたのですが、急に思い出しました」
「ノルンだわ」
「うん、間違いない」
「ノルン？　翼を生やした女性のことですか？」
メルとディオは頷いた。「オレたちをこの冒険に引きずり込んだ張本人さ。なんでもノルン

の話によれば、オレとメルは、オレたちも知らない『過去の罪』のせいで心を封印されてて、本当の心との間の歪みのために、ほっとくと精神崩壊を起こすんだってさ。だから、そうならないために『精霊の試練』を受けて、すこしずつ『心』を解放してもらってるんだ」

「あなたがたも『罪』を？」すずは気遣わしげな表情を浮かべた。「でも……きっと大丈夫です。わたしの『罪』ほど重いことはないです。わたしのは、万死に値するほど重いですから」

「でも！」とディオ。「あの場合は、ああする以外に何が出来たのさ！」

すずは驚いてディオを見たが、すぐに納得した顔に戻った。「そうでした。あなたがたは未来から来た……だから、わたしが何をしたか知っているのですね？」

「一連の『ダオス戦役』のことは、クレスさんがすべて話してくれたの」メルはあえてそう答えた。すずの立場であったなら、やむにやまれぬ事情があったとはいえ、それが繰り返し上演され、本になっているという事実は辛いものだろう、と考えたからだ。「だから――」

「そうでしたか」

「わたしたちは《大消失》の真実も聞いたわ――つらいでしょうね、すずちゃんは」

クレスを始めとする皆は、《大消失》の結果が引き起こす様々な事件を実際に見ることはないが、すずは違うのだ。《大消失》が起きたのは、彼女の暮らす時代。しかも里は、エルフの村に近い（これについては確信はないが）場所にある。魔法を生活の糧にしている彼らの苦しみは、人族のそれと比較にならない程であったと記録にはある。

「後悔はありません」すずは言った。「ただの感傷だといわれるかも知れませんが、すくなくともわたしが賛成したのは別の理由があったからです」
「別の理由？」
「魔科学兵器です」
メルとディオは、肌が粟立った。「まさか」
「真実です。わたしたちは、依頼で行うほかにも常に諜報活動を行っています。ミッドガルズが滅ぼされたあと、ダオスに対抗する手段として、二つの意見が常にありました。ひとつが、アルヴァニスタ王国宰相・ルーングロムさんの『時空転移によるクレスさんたちの召喚』、もうひとつがユークリッド王国の『魔科学兵器の復活』でした。ユークリッドに多くの忍者が送り込まれていたのは、その実態調査のためであり、ダオスが過去に遡ってユークリッド一帯を隕石で攻撃したのも、早い内に芽を摘む為だったのではないか、とお祖父様も考えておいででした」
「あれは、師匠を狙ったんじゃなかったってこと？」とディオはいった。「……びっくりだな」
「師匠？」すずは首を捻った。「クレスさんから聞いたことのある、トリスタンというおじいさんのことですか？」
「いえ、違うの」メルは笑った。「ディオは過去でクレスさんに稽古をつけてもらってから、

あの人のことを『師匠』って呼んでるの。それだけ」
「そうでしたか」すずは頷いた。「話を戻しますが、ダオスのあの攻撃は、クレスさんたちを狙ったにしてはおおざっぱ過ぎます。実際、モリスン邸には何の被害もありませんでしたし、再建前のトーティス村もそうです。代わりに、ユークリッドの都には、直撃こそありませんでしたが、かなりの被害が出たことが記録に残っています」
「でも、ユークリッドの国営科学アカデミーは、魔科学の平和的利用を目指していたんじゃないの？　だって、もともとクラースさんの学校だったところだし。レアバードだって、その成果でしょう。それに、もしすずちゃんの言うとおりなら、なぜミッドガルズと同じように、ユークリッドはダオスに滅ぼされなかったの？」
「ダオスは、再び魔科学兵器が使われてユグドラシルが枯れるのを恐れたのだと思います。ミッドガルズには使える兵器がありませんでしたが、ユークリッドにはすでに、防衛用の魔科学兵器——魔光砲が城の尖塔に偽装して配備されていましたから。ダオスもわたしたちの仲間を洗脳したりして、ずいぶんと破壊活動を行っていました」
「破壊されたの？」
「わたしたちが防ぎました。仲間同士で殺し合って。それがどんな物であろうと、契約は契約ですから。しかし、クレスさんたちの話を聞いたお祖父様は、魔科学兵器をそのままにしておいたら、いずれ恐ろしいことになる、と懸念しました。だからこそわたしは、ダオスを倒した

あと、マナを封印するというクレスさんたちの提案にすぐに乗ったのです。それから僅か半年で、他の魔科学製品同様、魔科学兵器は使いものにならなくなりました」
「クレスさんたちはそのことを……？」
すずは首を振った。「知らない、と思います。……皆がダオスのことを考えているのに、そんなことを言って、打算的と思われたくなかったのかもしれません」
「そんなことない！」メルはきっぱりと言った。「だって、すずちゃんは、すずちゃんだけが、マナが消えたその後の世界で、それからも生きていくんだもの。現実の生活を考えるの当然だわ！」
「あ、ありがとうございます……」
「メル」ディオが肘でメルを突いた。「急にはりきるなよ。すずちゃん、びっくりしてるじゃんか」
「あ！　ご、ごめんなさい、勝手に意気込んじゃって」
すると、すずは首を振って、それからにっこりと笑った。初めて見る、心からの笑顔だった。
「楽になりました。……わたし、誰かにずっとそう言ってもらいたかったのかも知れません。
——そうそう、『鍵』でしたね。まずはここから一番近い『電気の洞窟』に入るための、合い言葉をお教えしましょう。……『開くは剣、告げるは時。おとずれるは死』……扉の前で唱え

てください。そうすれば、扉は開かれます」

「あ、待って、もう一度」メルはポーチから手帳と鉛筆を出し、すずが繰り返してくれた言葉を書き留めた。「ありがとう。――どうするディオ？　まだ陽も高いし、さくっといってみる？」

「うーん、そうだな。新しい衣装も試してみたいし……行くか！」

メルとディオは立ち上がった。

「御武運をお祈りします」

「がんばってくるよ」ディオはにっと笑った。「――クルール、行くぞ！」

「うきゅ！」

元気な鳴き声がして、クルールはテーブルの下から這い出してきた。狭いところに入っていたせいで、なんとなく平べったい。二人と一匹は戸の前に立ったが、今度は自動的には開かなかった。護衛兼引き開け役の人は下がってしまっていたのを思いだし、互いに苦笑いして、自分たちで引き戸を開けた。

「待ってください」廊下に出ようとしたそのとき、二人と一匹はすずに呼び止められた。「その動物……」

「ああ、クルールってんだ」ディオは得意気に言った。「オレの子分さ！」

「友達でしょ」とメル。「わたしたちの大切な仲間なの」

「仲間……」

すずは何かを考えているようだったが、それが何なのかは、メルにもディオにも、知る術は

なかった。

「すずちゃん？」

「……いえ、いいのです。お気をつけて。お帰りをお待ちしています」

そう述べると、すずはこの里の礼儀であろうやりかたで、深々と頭を下げて、二人と一匹を

送り出してくれたのだった。

5　最後の試練

南ユークリッド大陸の南部にある『電気の洞窟』の攻略には、さほど苦労はしなかった。唯一、困ったことと言えば、精霊ヴォルトの言葉がわからなかったという、その点のみであったが、それも学者の衣装を着ることで解決できた。ヴォルトから解放してもらったのは『創意工夫』の心——物を創り出すための発想力、好奇心、そうしたものだ。衣装作りはこれまで職人に任せきりだったが、すぐにこれまでの服に足りなかったもの、それを補うにはどうすればよいかが浮かんできて、さらに高い次元の《なりきり》が可能になった、とわかった。
「すずちゃんたちの『忍者』の服があるだろ？」と帰りの空でディオは言った。「あれをさ、作ろうと思ってたんだけど、ヴォルトのおかげでいいこと思い付いたんだ」
「いいけど、ちゃんと『忍者』をマスターしてからにしてよ？　迷宮で気絶したディオを抱えて歩くのなんかいやだからね」
「へー、いうじゃんか。とても『魔女っ娘の塔』でぴーぴー泣いてたなんて思えない発言ですねえ、お姉さま」

「うるさい！」

メルは後ろからディオのお腹を思いきり握った。直後、ディオは、くすぐったさのあまり爆笑し、レアバードはくるくると錐揉みをして落下し、危うく墜落死するところだった。メルは、次に腹が立ったときは、絶対に脇腹だけには手を出すまい、と誓った。

『忍びの里』に戻ったのは、そろそろ陽が傾くという頃だった。

不可思議なしかけで隠れ里に戻った二人は、すずの家に行こうとして、橋の側の綺麗に並んだ植え込みのところで、すずと同じくらいの年齢の少女達を見つけた。揃いの濃い葡萄色の衣装――忍び装束を着て、何やら楽しげに話をしている。二人が近付いて行くと、気づいた三人の少女達はおしゃべりを止めて直立し、深々と頭を下げた。

「こんにちは」とメルは話しかけた。「えーと……はじめまして、が先かしら？」

三人は戸惑った様子でくちごもり、互いに視線を交わし、どうしていいか決めかねていると見えた。

「オレは、ディオ・フォート。こいつは双子のメル・フォート」ディオはとっとと自己紹介をして、少女達をますます戸惑わせた。「そんでこいつが――クルールっていうんだ！」

「うきゅ！」

ディオに少女達の顔の高さに持ち上げられたクルールは、挨拶するように片手をあげた。愛らしい小動物の効果はやはりここでも絶大だった。少女達の顔はたちまち緩み、一人がおそる

おそる手を伸ばして毛皮に触れようとしてディオを見、彼があけすけな笑顔になると、すっかり安心して、クルールに触れた。一人がやれば、他の二人も同様に触れたがり、クルールは少女達に奪われる形でディオの手から離れた。

五人と一匹は、側の低い木の植え込みに移動した。聞けばそれはお茶の木だということだった。

少女達はそれぞれ、佳代、菊、鶴、と名乗った。皆、十一歳ということだから、すずと同い年である。

「あなたたちも『忍者』なの？」とメルが訊くと、三人は頷いた。

「でも『忍者』は男の人のことで、女の人は『くノ一』っていうの」と教えてくれたのは鼻の頭にそばかすがある佳代だ。「何でなのかは知らないけど」

「皆は、すずちゃんの友達？」

ディオがそう訊くと、三人はぎょっとなり、それからとんでもない、というように首を振った。

「御館様をそんな風にいったりしたら、大人の人達に怒られます」

「じゃあ、誰が友達なの？」

三人は顔を見合わせ、誰も、と言った。

「誰も？　誰も友達じゃないの？」

「だって、御館様だから……」と言ったのは、少し肌の浅黒い、鶴だ。「けじめはつけないといけないから」

菊も頷いた。「忍者は上下関係が厳しいの。だって、そうじゃないと命令を聞けなくなっちゃうから、って大人達がいうの」

「御館様がまだ御館様じゃなかった頃は、いっしょに修行したりもしたけど……」佳代は言った。「いまは、いっつも才蔵さんや半蔵さんが護衛についてるから、気軽に話なんかできないの。御館様が通られるときは、皆、地面に片膝をついて礼をしなくちゃならないし……もう、わたしたちの知ってる、すずちゃ——御館様じゃないから」

ね、と佳代は他の二人に話を振り、菊と鶴もそれに頷いた。

「それより、この子のこと聞かせて！」

と、うってかわって明るい声で菊がいった。『この子』とは、クルールのことだ。

そこでディオは彼女達に、クルールを見つけたときのことなどを話してやった。三人は目を輝かせてディオの話に聞き入り、クルールを触って喜んでいたが、やがて陽が西の山に傾くと、それぞれの家に帰っていった。

「……すずちゃんて可哀相」互いに手を振り交わして別れる三人の姿を見ながら、メルは呟いた。「本当なら、あの子達といっしょに遊んでて当然なのに」

「そうか？」

「兄貴のところの子供達を思い出したら？　メグは遊んでた？　他の子供達の面倒ばっかで、遊んでなんかなかったろ？」
「そうだけど、強制された上下関係なんかなかったわ。昨日までいっしょに遊んでいた子に、次の日からいきなり頭を下げるのよ？　下げる方も下げられる方もたまらないと思うわ」
「だからって、オレたちがどうこう言う問題じゃないよ」ディオはクルールを下ろすと、メルに指を突き付けた。「メル、下手な忠告なんかしたら、それこそおまえがオレにいつも口を酸っぱーくして言ってる、歴史を変える、ってことになるぜ」
「な、なによ今日は……突然、わかったようなこと言っちゃって……」
ディオはクルールを抱き上げると歩き出し、橋の真ん中で振り返ってにっと笑った。夕陽に照らされたその姿が急に大人びて見え、メルはどきりとした。
「オレが、メルが思ってるほど考えなしじゃない、ってことがわかったろ？」
「……知らないわよ、ばか」メルはわざとツンケンしてさっさとディオを追い越すと、すずの家へと向かって歩いた。（ちぇっ……ちょっと格好いい、って思っちゃったじゃない。生意気だわ、ディオのくせに）
クルールを抱いたまま、ディオはすぐに追い付いて横に並んだ。

とくんとくん、というほんの少しだけ速い胸の鼓動が、なんだかとても心地よかった。

その日、当然のように二人と一匹はすずの家に泊まることになった。紙を貼った引き戸——襖の開け閉めをしていた、才蔵、半蔵の二人は、夜は館の外にいて、すずを守るとのことだった。

広い館であるのに、メイドのような役割の人間はいないとのことで、夕食は通いで作る者がおり、今夜は客が、つまり二人と一匹がいるので応援を呼んだ、と才蔵がすずに報告しているのを二人はすぐ脇で聞いていた。その夕食の膳を囲んだのは、三人と一匹だけだった。その頃には、屋敷の中には彼らしかおらず、さらに普段はたった一人で食事をしているのだという話をすずから聞いて、メルとディオはチェスター達との賑やかな食卓を思い出し、あまりの寒々しさにぞっとした。

「人といっしょの食事は楽しいです」とすずは言った。

「あの二人は？　才蔵さんと半蔵さん」

「彼らはあくまで護衛ですから、いっしょに食事をすることはありません」

「でも、頼めば——」

すずは苦笑した。「彼らは断ります。命じれば別でしょうけれど、そうまでして食べても、おいしくはないとおもいます」

それはそうだった。おそらく会話もないだろう。ただ食べるだけなら、一人でも同じことだ。会話は大切な香辛料、という言葉があったのをメルは思い出した。

それは別にしても、その夜の食事はメルとディオには珍しいものばかりで、味の方も満足だった。出されたのは、ただ炊いただけの米、魚を干して薄く削った物で下味をつけ、ミソという調味料を溶いて、焼いて臭みを抜いた川蟹を入れたスープ、ヌカという独特の臭いのする物の中に漬け込んだ数種類の野菜、それに村を流れる川の上流で捕れたという川魚を、辛みの強い塩を擦り込んで焼いたもので、調理にほとんど油を使っていないのには驚いた。味付けも淡白で、スープも焼き蟹の味がはっきりとわかるほどだった。それだけに魚の味は際だっていた。塩を振っただけの魚がこんなにおいしいということを、二人は知らなかった。ただ、困ったのは、この里独特の食事をするための道具で、『箸』というものらしかったが、二本の棒状のものを片手で器用に操る必要があって、メルとディオにはとうてい扱い兼ねた。

「そういえば、チェスターさんたちも、うまく使えませんでした」すずは立ち上がると、二人のために見慣れたフォークとスプーン、それにナイフを出してきてくれた。「里を訪れる外の人達のために買ってあったのを忘れてました」

それで何とか食べることが出来たのだが、結局、魚は手で食べることになった。すずは箸を使って器用に小骨を取っていたが、スプーンやフォークでそんな芸当が出来るはずもなかった。だが、手づかみで行儀悪く食べるのもまた楽しかった。すずさえも真似をして、手で食べ

始めた程である。
「温泉があるんですよ」
　食事が終わった二人と一匹にすずはそう言って、入浴をすすめた。
「すずちゃんもいっしょに入ろ？」メルは彼女を誘った。「きっと、お風呂の作法も違うんでしょう？」
「そうだよな。その辺も教わらないと――」
「あんたは別に決まってるでしょ！」メルはディオの頭を平手で張った。「すけべ」
「冗談に決まってんだろ！」
　どうだか、というようにメルは肩を竦めた。
　膳を自分達で片付けて、皆はすずの案内で館内にある温泉に向かった。入り口のところで男と女に分かれていて、ディオとクルールは男用に、メルとすずは女用の脱衣所に入った。
「でもさあ、クルールって雄なのかな？」と壁の向こうでディオの声がした。
「雄でしょ」とメルは返した。「なんとなくそんな感じだけど」
「ま、どっちでもいっか！」
「きゅーっ！」と元気な声が聞こえた。
　タオルで前を隠して脱衣所を出ると、そこは外で、メルはぎょっとした。大きな池のような入浴場所とその周囲を高い竹の塀で囲んであるので、外から、もしくは男性用の方から見える

ことはない。それでも夜空が見えるというのは落ち着かない半面、何ともいえない開放感があった。

「お湯に入る前には、かけ湯をしてください」すずはそう言って、見本を見せてくれた。「汚れやすいところを軽く洗(あら)うんです」

「中で洗うんじゃないの？」

「体を洗うのは外です。お湯は温(あたた)まるためのものです。先に洗ってから入ってもいいですけど、今日は少し冷えますから、先に少し温まった方がいいと思います」

「へえ……ディオ、聞こえた？」

おう、と返事があった。だが返事だけで、その直後には、お湯に飛び込む音がした。ふたつしたから、クルールも飛び込んだか、投げ込まれたかしたのだろう。

「……しょうのないやつ」

ため息をつき、気がつくと、すずがくすくすと笑っていた。

「ごめんね、あんな奴で」

すずを見習ってかけ湯をして、湯に入った。彼女もすぐに入ってくる。

「楽しい人です」

本気なのかわからなかったが（確かに楽しいって言えないこともないか）とメルは思った。

何をしているのか、仕切りの向こうではディオとクルールの賑やかな声がする。こちらの様子

を気にかけている様子はない。

（……よし、昼間のことを訊いてみよう）

とメルは心を決めた。おせっかいなのだろうが、すずの様子はあまりに不自然に彼女の目には映っていた。メルは自分と同じように頭にタオルを巻き付けたすずのすぐ側に寄ると、肩を並べた。

「広いお風呂だね」とメルは切り出した。自然、鼓動が速くなる。「友達とかもよく入りに来るの？」

「いえ」すずの答えは明確だった。「……そういう間柄の人は、里にはいませんから」

「どうして？」

「わたしは命令する立場ですから。忍者は非情なのです。頭領は時として、配下の者に死地に赴くよう命じなければなりません。もっと直接的に、死を命じることもあります。なれあいは決断を鈍らせます。お祖父様が旅行に出かけたのも、わたしを立派な頭領にしようとしてのことなのです。上に立つものは、孤独なのです」

そう言ったすずの決意は、強がりでもなんでもない、本物だと感じた。

メルは何も言えなかった。何が言えようか。確かにディオの言う通りだった。これは、メルが立ち入れることではない。

「でも」すずはメルを向いてはにかんだ笑みを見せた。「今日は楽しいです。ミントさんとア

ーチェさんといっしょにお風呂に入ったときのことを思い出しました」

「すずちゃん」メルは衝動に逆らえず、すずの手を握りしめた。「友達になろう！」

「え……」

「わたしはここにずっといるわけじゃないし、一カ月か二カ月で帰らなくちゃいけないけど……それでも、わたしはすずちゃんに命令されることもないから、なれあったって平気なんだから！　だから！……ね？」

「あ、ありがとうございます……」すずは、はにかんだようすで顔をうつむけた。頬が赤いのは、湯で温まったせいだけではあるまい。「……うれしいです」

そのとき、頭の上から声が降ってきた。

「女同士で、なーにやってんだか」

ぎょっとして見ると、ディオが仕切りの上から体を乗り出して、二人を見下ろしていた。クルールまでもいっしょである。

「なにやってるってのは、あんたのほうでしょ！」

メルは側に浮いていた桶を掴むと、思いきり投げた。

良い音を立てて桶はディオの額に命中し、跳ね返ってクルールにも当たった。ひとりと一匹の姿が消え、派手な水音が後に続いた。

その様子に、すずは大笑いした。それはようやく見ることの出来た、十一歳の少女の飾り気

のない姿だった。

「前にも同じことがあったんです」とすずは風呂から上がった後で教えてくれた。「チェスターさんがミントさんとアーチェさんの入っているところを覗こうとして、アーチェさんに桶で撃ち落とされたのです」

「あのチェスターさんがねえ……」

「あのチェスターさんが、です」すずは、ふふ、と笑った。「それからしばらくは、アーチェさんと喧嘩をする度、『スケベ大王』って呼ばれてました」

「情けないぜ、兄貴」ディオは赤くなった額を擦って言った。「情けなさすぎる」

二人とも、いまは『浴衣』という服を借りて着ていた。すずも同じである。何かの職業の衣装、というわけではないので《なりきる》ことはないようだった。クルールは毛がつんつんに立っているが、これは濡れたせいである。よく拭いてやって、丁寧にとかせば、元のように戻るので、メルはこの里の寝具である『布団』の上でそれを行った。

部屋に戻ったときには、それはすでに敷かれていて、これも半蔵か才蔵の仕事だということだった。メルとすずが同じ部屋、ディオとクルールは襖を隔てた別の部屋という割り振りだった。

布団に入ったのは、日付が変わった頃であったろう。

隣の部屋からは、ディオとクルールの寝息が聞こえている。風呂であれだけ大騒ぎしたから

疲れたのだろう。
「今日は本当に楽しかったです」すずは言って、メルの方を向いた。「本当に久しぶりでした」
「わたしも」メルもすずの方を向いた。「温泉って面白いね。外でお風呂に入ったのなんて初めて」
「好きなときにいつでも入ってくださいね」
「一緒にね」
「はい」
「ね、すずちゃん」メルは布団から手を出すと、すずに向かって伸ばした。「手、繋ごうか？」
すずは戸惑い、それからメルと同じように手を出すと、しっかりと握った。メルはそのまま手を布団の中に戻した。
「落ち着きます」すずは囁いた。「なんだか、すごく久しぶりにゆっくり眠れそうです」
「うん」メルは握る手に少し力を入れた。「大丈夫だから、ゆっくり眠ろう？」
すずは、こっくりと頷いた。
人の体温は、何より心を落ち着かせてくれる。互いの確かな温もりを感じながら、『罪』という共通の過去を持つ二人の少女は、静かに、そして穏やかに、深い眠りへと落ちていった。

天窓から射し込む月の光が、ルナの輝きが、二人の少女を、ただ優しく包んでいた。

それから半月の内に二人と一匹は、ユミル大陸の南、アーリィ大陸の東にある『闇の洞窟』に挑み、実体のない影のような精霊シャドウに力を示して『均衡』の心を解放してもらった。

残り少ないせいなのか、直接的に感情に訴えるような心の解放は、このところなかった。ゆえにクラースの時代で体験したような、激しい感情の揺れもなく、落ちついて『忍びの里』での日々を過ごすことが、二人は出来た。

すずにしても、午前中は各地に派遣している忍びからの連絡の報告会や、自主訓練などで忙しいようだったが、午後は、たまにアルヴァニスタやユークリッドから人が訪ねてくる程度であったので、メルやディオと過ごす時間を十分に取ることが出来た。三人と一匹はよく連れだって出かけ、村を見て回ったり、川で釣りをしたり、時には精霊の森に出かけていって、果物を取ったりした。

すずの笑顔が頻繁に見られるようになり、里人は戸惑いながらも好ましく思ってくれているようだった。厳格な上下関係に縛られながらも、里人は皆、一様にすずを好ましく思っていることは、彼らに交じって農作業を手伝い、子供達と一緒に体術の訓練をし、《なりきって》様々な仕事をする中でよくわかった。彼らの本業である『忍び働き』を目にする機会はなかったが、幸いであったのかもしれない。話している限りではそんなことは感じないが、いざ事が

起こった際には、彼らは一騎当千の働きをする殺人機械になるのだから。

「大きな戦争はしばらくないと思います」とある晩、すずは言った。「いまは失われたマナの代わりとなるエネルギーを求めて、各国が協調して研究に当たっていますから。完成した暁にはどうなるかわかりませんが、メルさんたちを見れば、大丈夫らしいことはわかります」

すずの推察通り、今より未来への五十年の間、確かに戦争らしい戦争は起きていなかった。代替エネルギーの使用が実用化するのには、クラースの基礎研究のおかげもあってそれほど時間はかからないが、国家間で戦争ができるほどの余裕はないのだ。それに、ミッドガルズ王国が消滅したことで、二大王国となったアルヴァニスタとユークリッドの友好関係が続いているというのも大きい。すずの話では、ダオス討伐の方法では対立があったようだが、魔科学そのものが意味をなさなくなったことでユークリッドの国防構想が根底から覆り、敵対している余裕などなくなったのだという。まだ時折、ユークリッド王からは魔法素探索の協力依頼が来るというが、一切断っているらしい。初め、メルたちを使者だと勘違いしたのもそうした事があったためだった。

続く半月で、二人と一匹はトレントの森の深部、通称『精霊の森』と呼ばれる魔法素収束点へ挑んだ。森は異様に広く、しかも歩いているそばから木が勝手に移動して道を変える迷宮であったので、時には三日もさまよったあげく、結局、里に戻るということも一度や二度ではなかった。

「拙者も御館様の供をして何度か入ったことがあるが、いや、恐ろしい場所であった」と話してくれたのは、才蔵という四十絡みの忍者である。「道標の石版があったであろう？　御館様にいわれて解読を試みたのだが……拙者にはさっぱりであった。御館様は苦もなくお解きになり、我らを巨大な石版のある場所へお連れくださったのだが、あれはなんであったのか……」

二人にはそれが『黒の石版』と呼ばれる物だとわかった。勇者達はそこで、百五十年前の過去においては壊れてしまっていた『契約の指輪』を直し、この時代においては三種の武具を合成して時の剣『エターナルソード』を完成させている。それらはすべて、石版に宿る、精霊オリジンの力である。迷宮の謎をすずに訊くわけにはいかなかった。試練はあくまでそれに挑む者たちだけで解かねばならない。

その最深部までようやっと辿りつけたのは、六度目のアタックでだった。

すべての精霊を統べる、精霊の王と呼ばれるオリジンだけあってその攻撃は凄まじく、幾度も危機が訪れたが、ディオが『忍者』の上級衣装である『忍者頭』の衣装を身に付けていたことが勝敗を分けた。雷撃系の最大最強呪文『インデグニション』の発動寸前に、分身して前後から斬りつけ、何とか勝利することが出来たのだ。

オリジンは『無心』の心というものを解放してくれたのだが、これは二人には何のことだかさっぱりわからなかった。何も考えない、空っぽな気持ちとはなんなのか？　何の役に立つのか？

「それは、あらゆる武芸者が目指す境地のことだと思います」
二人の話を聞いたすずはそう言った。
「すずちゃんたちもそこを目指しているの？」
「達人と呼ばれる人々は、皆、無心の境地に至り、戦いの中で自在にその域に入ることが出来るといわれています」
「でも、どうして『無心』が強いの？」
「命のやりとりの場では、あれこれ考えてから動くのでは遅いからです。相手がこうきたからこうしよう、ああきたからああしよう、では駄目なのです。しかし人は考える動物ですから、何も考えない、しかも生きるか死ぬかのときにそうするというのはとても難しく、それが動きを鈍らせます」
「でも何も考えなかったら、何も出来ずに死んじゃわないか？」
「考える前に体が動く――そうしたことがありませんか？」
「そりゃ、あるけど」
「達人が達人である所以は、それが人並外れているからです。すべてを体が憶えているのです。何も考えないでいるのと、無心の境地とは似ているようでまったく違うのです」
「じゃあ、オレたちもそれができるかもしれない、ってことかな」ディオはメルを見た。「凄く強くなれる、ってこと？」

「そうかもしれないけど、体が憶えてなくちゃ、ただぼーっとしてるのと同じなんだから《なりきって》もマスターしている衣装でないと駄目かもね」

「『忍者頭』も、もうすぐなんだと思うんだよな」ディオは右拳を左掌に打ちつけた。「メルは？　次は『賢者』にするの？」

メルは頷いた。「あれは二種類の魔法を同時に唱えられるから、攻撃的にいくならもってこいだとおもう。最後の場所は、守りに入って戦えるほど甘い場所じゃないんでしょ？」

最後の場所——メルが言ったのは、ミッドガルズ大陸南部の、『十二星座の塔』があった場所に近い所にある、『魔王の洞窟』と呼ばれる魔法素収束点である。

「あそこには魔界に通じる道があるのです」すずは言った。「精霊プルートがあの場所にいるのは、クラースさんの遺命というよりも、二つの世界の往来を阻むためのようです。彼は精霊を名乗ってはいますが、本質的には少し違う者のようだ、とオリジンは言っていました。だからプルートはオリジンの命に従うことはありません。まさに彼は王なのです。十分に気をつけてください。魔界に飲み込まれれば、魂は二度と浮かび上がれませんから」

二人は、すずの言葉をしっかりと心に刻みつけた。

だが、すぐには出発しなかった。オリジンとの戦いはかなりの怪我と疲労として残っていたし、破れた服の繕いや、いま少し自分を高める事が必要だと思われたからだった。もちろん、口には出さないがもうひとつの理由もあった。

すずのことである。
精霊プルートに力を示し、試練を無事に乗り越えれば、もはやこの時代からは去らなければならないのだ。寝泊まりしているこの家が、自分達が来る前の寒々しい姿に戻り、すずもまた、友達もなく、里の頂点に立つ者として、ただ一人、孤独に向き合わねばならないのかと思うと、このまま帰っていいものだろうか、と悩まずにはいられなかった。だからといって、このままずっとここにいるというわけにもいかない。あとたったひとつとはいえ、封印を解かなければ、やがて精神は崩壊を起こしてしまうのだ。
二人が決断を下しかねていることに対し、すずは何も言わなかった。あえて何も言わないことが、彼女の気持ちを雄弁に語っていた。
五日もすると、衣装の繕いも済んでしまい、体の方も完全に復調して、出発を阻む理由は何もなくなったが、それでも二人はなんやかやと理由を見つけては、先伸ばしにしていた。
ある日、目が覚めると外は雨が降っていた。雨天の空をレアバードで飛行することは難しい。農作業も訓練も一部を除いて中止である。忍びの里は二人と一匹が来て以来、初めての静けさに包まれていた。
自分に言い訳をしないでいいというのは、心がとても楽だった。雨が屋根を、地面を叩く音だけがする中、三人はそれまで何度となくしてきた、クレスやクラースたちのことを話した。ここは、彼らにとっては未来であるから、どんな様子であったかを話したところでなんの差し

支えもなかったし、すずも何度でも聞きたがった。そして、その日初めて、今の彼らの話へと話題が移った。今まででなかったのが不思議なくらいである。
「誰か、訪ねてきたりしないの？」とメルが訊いたのは、『囲炉裏』という暖炉の役目に似た暖房器具の周りに、三人と一匹で座って午後のお茶を楽しんでいたときだ。「今はクレスさん達の時代からだいたい五十年後だから……六十七、八歳？　皆、まだ元気なんじゃない？」
そんな事を言い出したのは、根底に、すずを再びひとりにしたくない、という思いがあったのは確かだった。
すずは首を僅かに傾げた。「さあ……どうでしょう」
「訪ねていったりしないの？」
すずは少し寂しげに微笑んだ。「頭領が里を離れるわけにはいきませんから。それに、ミゲールの都にはクレスさんもチェスターさんもミントさんもいません。アーチェさんの御実家も、今は他の人が住んでいますし」
「そうなの？」
「はい。それに、クレスさんたちと旅をしていたときに、何度かミゲールの都にも立ち寄りましたが、アルベイン道場はあっても、すでにお弟子の方が継いでいて、この時代のクレスさんたちは行方がしれませんでした。最後に連絡があったのは、皆さんと別れてすぐで、魔法素収束点の管理を頼むものでした。それきりです」

「リックスたちはどうしたんだろう……なあ、メル。見にいってみない？」

メルは首を振った。「駄目よ。もし会えたとしてどう説明するの？　子供だとでも？　驚かせて、未来を変えてしまうかもしれないわ」

「……そっか」

雨はいつまでもやまず、その日はそれで、その話はおしまいだった。

慌ただしく事態が動き出したのは、三日後の昼過ぎである。その日、ようやく雨は上がり、晴れて、高い青空が姿を見せていた。

三人と一匹は囲炉裏を囲んで、米の飯を握って塩を振り、海の苔を固めて紙状にしたノリというものを巻いたのと、甘く漬かった大根の漬物で昼餉をとっていた。そこへ、

「失礼つかまつる」

との声が掛かり、一人の若い『忍者』が入ってきた。初めて見る人物で、赤毛で、目を覆うような仮面を付けているのが他の『忍者』とまったく違っている。男はメルとディオを見ても何もいわず、赤装束の懐から一通の書状を取り出して、すずの前に差し出した。

「乱蔵様からの書状にございます」

「お祖父様からの？」

すずは手にしていた湯呑みを置くと、書状を手に取って開いた。この里の文章は、外の世界と違って縦書きである。読み難いと思うのだが、気にならないらしい。手紙は何十回と折り畳

まれた長いもので、読み終わるまでには五分以上かかったが、誰も何も聞かずにただ待ってい
た。やがて手紙から目を上げたすずの顔はとても明るかった。
「いいしらせ？」
「はい。お祖父様が帰ってくるのです」すずは本当に嬉しそうだった。「もう十分外の世界を
堪能（たんのう）したから、里に帰ってどこにもいきたくないそうです。それに、なんだかすごいおみや
げがあるって、書いてあります」
「よかった！」メルはすずの手を握った。「じゃあ、もう一人で御飯を食べなくてすむんだ
ね？」
すずは頷いた。「それに、お祖父さまは元・頭領で引退した身ですから、わたしが命令する
こともありません」
「これで、もう大丈夫だな」ディオがメルをつついて言い、彼女も頷いた。
「……行かれるのですね？」
「うん」メルはすずの手を強く握った。「いくわ。最後の魔法素収束点（マナスポット）——『魔王の洞窟』
に」
「『魔王の洞窟』は十九階層（かいそう）。迷宮の中を徘徊（はいかい）しているのは、魔界から洩（も）れ出た魔物達です。
中には障壁（しょうへき）のせいで、ただ斬りつけたのではほとんど傷つけられない相手もいます」とすずは

忠告してくれた。「このぐらいなら、プルートも気にしないでしょう」
『魔王の洞窟』の外見は、後ろから見ると山にしか見えないが、前に回ると、まるで巨人の顔だった。すべてを飲み込もうとするかのように大きく開いた口の奥に洞窟へと続く道があった。
悪魔そのものといった像が建ち並び、床には何のためかもわからぬ魔法陣が描かれている。
「衣装はどうする？」階段を前にディオは訊いた。「オレは『忍者頭』でいくけど」
「わたしは『賢者』でいくわ。武器での攻撃が効かなかったときに、二連続で魔法を使えれば十分、サポートできるでしょ」
「さすがに……空気が違うよな」階段の先に続く闇を見つめて、ディオは呟いた。「ほら、肌が粟立ってるよ」
「わたしも。――でも、これで最後だもんね」
ディオは力強く頷き、はげますように笑顔を見せた。
階段を降りると、クルールはすぐに変態した。それはまるで少女人形のような姿で、二人を驚かせた。
「もしかして、クルールって女の子だったのかな？」
「うーん……この姿は、関係ないと思うけど……」
だが、愛らしい姿のわりに、能力は攻防のバランスの取れたものだった。物理的な攻撃を軽

滅する障壁を張る『バリアー』と、相手の上に切っ先の鋭い水晶を高速回転させて落とす『クリスタル』。すぐに疲れるのが欠点だが、その辺りは助け合える。
実際、幾度かは危ないところをクルールの『バリアー』のおかげで切り抜けることが出来た。
敵は、竜族の末端のドラゴンエビルを始め、三つの首を持つ犬の姿で鉄をも溶かす火炎を吐くケルベロス、その鳴き声を聞いたものは金縛りにあうという少女の姿をした魔物バンシー、人の顔と黄金の獅子の体と鬣に蝙蝠の翼と蠍の尾を持つ魔獣マンティコア、といったそうそうたる面々で、これが徒党と組んで襲いかかってくるのだから、戦闘は苛烈を極めた。
ただひたすらに戦い、魔物達の屍を累々と背後に積み上げて、ようやく十八階にたどり着いたときには、誰もがもう、立てないほどに疲れていた。実際、座り込み、メルはグミを齧り、『賢者』の唯一の回復呪文『キュア』を唱えて、全員の傷を癒した。肉体的な疲れ、怪我の方はそれでよかったが、精神面はそうはいかなかった。気力を奮い立たせるのに、彼らはやはりグミを使った。もはや暢気に弁当を広げる気にはならなかった。そうしたとしても、とても食べる気にはならなかったろう。体には、魔物達から浴びた返り血の臭いがむせるほどに染みついていた。
「わたし、着替える」のそりと立ち上がって、メルはディオが見ていることなどどうでもいいといった態で『賢者』の衣装を脱ぎはじめた。

「何着るの？」
「……『プリーステス』。きっと、力押しでどうにかなる相手じゃないでしょ」
「そうだな」ディオは懐から銀色という、いかにも体には悪そうな色をしたグミをだして口に放り込み、クルールにも食べさせてやった。「オレはこのままでいくよ。さっき、体に《なじんだ》のがわかったし」
ポーチから出した『プリーステス』の衣装に着替えたメルは、少し気分がよくなったようだった。「血が臭くってたまらなかったわ」
「オレなんかそのままだよ」ディオは袖に鼻を寄せて、うえっ、と舌を出した。「もう一着作っておけばよかったな」
「不経済でしょ」身も蓋もないことをいって、メルはディオの腕を取って立たせた。「さあ、いきましょ。ほら、クルールも」
「うきゅ」こちらもメルに手を取られて何とか立った。
メルは右腕にディオをつかまらせ、左手でクルールの手を握り、共に最後の階段を降りた。それは、まさに奈落へと続いていると思えた。暗闇が延々と続き、もしやすでに魔界へ入り込んでしまっているのでは、と疑い始めたとき、唐突に光が見え、二人と一匹は急いで階段を降り、ようやく最深部へと辿りついたのだとわかった。
どこからか風が吹いている。それに混じって聞こえる、泣いているとも、笑いともつかぬ声

は、風が岩を通るときに立てる音の悪戯だろうか？
広間の奥には階段のついた祭壇のようなものがあって、その向こうに見える壁には、巨大なねじくれた角を生やした、山羊とも猿とも人ともつかぬ怪物の彫刻があり、見ようによっては、石にされて閉じ込められているようにも見えた。
そのとき、大地が震撼して、轟音と共に祭壇の上部が吹き飛んだ。砕けた岩が周囲に飛び散り、メルとディオはクルールをかばって床に伏せた。もうもうと立った土煙が、ゆっくりと薄れていくと、祭壇の上に巨大な影が見え隠れしていた。二人と一匹は立ちあがり、剣を、杖を構えた。
やがて、土煙は完全に晴れ、恐ろしい姿が現れた。竜の頭蓋骨に黄金の冠を戴き、鋭い鉤爪の二本の指を生やした異様に長い腕を胸の前で交差させている。胴体は短く、蟬の腹を思わせ、宙に浮かんで、裾の破れたマントを魔界の風になびかせている。虚ろな眼孔にわだかまる闇が、涙のようにどろりと溶けて流れた。
「小さきものたちよ！　命の灯火をいまだ宿すものよ！　ここは魔界へと通じる関！」眼孔と同じ闇を宿した口腔が呪いにも等しい声を発した。「汝ら、我に挑むか⁉」
言葉が炎の蛇となって広間を暴れ狂い、二人と一匹の姿は、紅蓮の中に飲み込まれてたちまち見えなくなった。
「我が名はプルート！　冥界の王なり！」

火炎地獄の中で、魔王の哄笑が高く響き渡った。

すずが村の入り口に立つようになって、すでに三日が経っていた。彼女は午前の仕事が済むと、すぐに出かけていき、そして陽がくれるまでそこで何かを待っているのだった。

無論、側には才蔵と半蔵が控え、周囲に目を光らせている。ゆえに、外から帰ってきた忍びたちは、一様に驚く羽目になった。

「御館様は、いったい何を待っておられるのだ？」

里人たちの間で噂になったが、真相を知っているのは二人の護衛だけだった——すずは、メルたちの帰りを待っていたのである。

二人と一匹が出かけてから、すでに十日が過ぎていた。レアバードであれば『魔王の洞窟』までは遅くても半日。それから最終階層まで、どんなにかかっても二日という所だった。それを考えれば、帰りがあまりにも遅すぎる。なにかあった、としか思えなかった。本心では自分で洞窟へ潜り、確かめたいところだったが『試練』である以上手を出すわけにはいかない。周辺への探索隊を出すことすらためらわねばならない立場に、すずは苛立った。私情で忍びたちを動かすわけにはいかないのだ。

（メルさん、ディオさん……）すずはくちびるを噛みしめた。（どうか無事で……）

そのとき目の前で、再び風が渦を巻いて光の柱が伸びた。また誰かが戻ってきたのだろう。

もしかして、とすずは拳を握った。だが、光の柱が徐々に消えていくに従い、希望は薄れた。影は三つ。だが、いずれも大人のそれであったのだ。
しかし、予想もしなかった喜びが、すずを待ち受けていた。
「お祖父様⁉」
現れた影は、二人の老いた男女を従えた祖父、藤林乱蔵であったのだ。才蔵と半蔵も、それとわかると、すぐにすずの両脇にかしこまった。
「おお、すず！　儂を出迎えてくれたのか？」
「い、いえ……そういうわけではないのですが……」
「大頭様、御戻りなさいませ」と才蔵が言い、
「里の者、皆々、御館様の元、精進を重ねておりまする」と半蔵も言った。
「そのようじゃな」乱蔵は辺りを眺め回した。「新しい頭領は、なかなか良くやっておるらしい。……おまえたち、御苦労じゃったな」
二人の忍びは頭を深く垂れた。どうやら泣いているらしい、とすずにもわかった。（お祖父様にただ一言、誉められただけなのに……）やはり到底、自分では里人の心を掌握することなど出来ない、と思い知るのはこんな時だ。
『すず、気にすることはないぞ』乱蔵が声に出さず、くちびるだけを動かしてそう言った。影話、という術だ。『こやつらは儂と同じ爺じゃからな。若い者の心はすでにお主にある。儂や

お主の父の銅蔵は、皆を引っ張って行く形で里をまとめたが、お主は皆に支えられることで里をまとめればよい。肩の力を抜け。すずはすず。けっして儂や銅蔵にはなれんのじゃからな』
すずは瞠目した。離れていても、乱蔵にはお見通しだったのだ。すずは、片目をつむって見せた祖父の胸に飛び込みたくなるのを必死に堪えねばならなかった。例え、皆に支えられていくのが自分にあったやりかただったとしても、弱さを見せていいことにはならない。
すずは、小さく頷くことで、わかったという意思を伝え、乱蔵も瞳に優しい光を浮かべて頷いた。
「……ところで大頭様」と半蔵が訊いた。「そちらの方々は、お客人でしょうか？」
「ん？　ああ、そうじゃ！　すっかり忘れておった！」
乱蔵が笑いながら自分の頭を叩くと、後ろの男女の口から爽やかな笑いがこぼれた。
すずはどきりとし、だが、ありえないと否定した。それは、あまりに懐かしく、あまりに甘美な夢。
「ひどいなあ、乱蔵さん」と男の方が言って、笑顔になった。白いものが混じってはいるが、まだまだ濃い金の髪が揺れる。「いつ会話に加わったらいいのか、困りましたよ」
(まさか……)すずは知らずに手を口に押し当てていた。
「あなた、ほら……」女性の方が男の肩を軽く叩いて、何かへ注意を促した。「こっちが先でしょう？」

「え？……ああ、そうだね」男はすずを向くと、懐かしそうに目を細め、そうして、すずがよく知っている笑顔を見せた。「ひさしぶりだね、すずちゃん」
「クレス……さん……？」
「そうだよ。すっかりおじいさんになったろう？」クレスは、ふふふ、と笑った。「すずちゃんは変わらないなあ」
「あたりまえですよ、クレスさん。すずちゃんにとっては、あれからまだ一年も経ってないんですから」
「ミント、さん……」
「お久しぶり、すずちゃん。逢いたかったわ」
「クレスさんっ！　ミントさんっ！」
もう、我慢なんかできなかった。すずはたちまちあの頃に――皆で旅をして、大切なものを沢山教えてもらったあの頃に戻って、二人の胸に飛び込んでいた。
「どうじゃ、すず」乱蔵は得意気に胸を反らした。「とびきりの土産じゃろう？」
すずは涙で顔をくしゃくしゃにして、ただ頷くことしか出来なかった。
そのとき、物見の伝令が叫んだ――「トレントの森にレアバードが墜ちた！」
はっとして、すずは顔を上げた。涙の跡の残る幼い顔は、一瞬にして、多くの人間を束ねる者の顔に変わった。すずはクレスとミントから体を離すと一礼した。

「才蔵、半蔵、行きます！」
「はっ！」
「御意！」
三人の忍びの姿は、たちまち風と木の葉に紛れて掻き消えた。
「やれやれ」乱蔵は頭を掻いて、クレスとミントに笑いかけた。「若い者はせわしない。年寄りは家でのんびりと待つとしますかな」
クレスとミントは互いに見つめ交わして微笑み、ええ、と答えた。

「うわ、老けたなあ！」と言うのがディオの第一声だった。直後にメルに足を思いきり踏まれ、すぐに悲鳴に変わったが。
クレスとミントは二人のやりとりに朗らかに笑った。その顔にも体にも、五十年の歳月が確かに刻まれていたが、人柄はまったく変わっていないことがすぐにわかった。
「ところで君達の方は大丈夫なのかい？」クレスは訊いた。「レアバードで森に墜ちた、って里の人が言ってたけど」
「墜ちたんじゃないよ、師匠。ちょっと急降下しただけさ」
「嘘ばっかり！　ディオの修理がへっぽこだったからあんなことになったんじゃない」
「なんだよ！」

「なによ！」
「まあまあ」苦笑して、クレスは二人をなだめた。「落ちついて」
メルとディオはひとしきり睨みあった後、鼻を鳴らして互いにそっぽを向いた。クルールはミントの膝に抱きかかえられて、我関せず、といった顔をしている。
「ところで、どうしてこんなに遅くなったんですか？」二人の間をとりなすように、すずは訊いた。「心配しました」
その一言は効いた。
二人は申し訳なさそうに、事の顚末を話した。実は、プルートには苦労の末に勝利したものの、いざ帰る段になって、レアバードの調子が悪くなり、近くの村に修理に必要な部品を買いに行くのに二日、魔科学者に《なりきって》実際に修理をするのに二日かかり、それからなんとかだましだまし飛ばしてトレントの森の上まで来たときに、急に出力が下がって危うく墜落しかかり、ぎりぎりで出力が回復して事無きを得た、というわけだった。
「ごめんね、すずちゃん」とメル。「連絡のしようもなかったから……修理して戻る方が早いと思ったし」
「怪我をしたとかじゃなくてよかったです」
メルとすずは手を握りあい、微笑みを交わした。
「ところで師匠たちはなんでここに？」

「旅の途中で、乱蔵さんに出会ってね。別にどこに行くという目的がある旅じゃないから、ひさしぶりにすずちゃんに会おうと思って来たんだよ。まさか君達がいるとは思わなかった」

「嬉しい驚きでした」ミントはクルールの頭を撫でて、気持ちよさそうな声を上げさせた。

「お元気そうで何よりです」

「そういえば、師匠たちはどこに引っ越したの？　すずちゃんの話だと、ミゲールの都にはもういなかったって聞いたけど」

「五年くらい前に、魔法素収束点の視察をするついでに、ミントと二人であちこち世界を見て回ろうと思ってね。道場を弟子に任せて旅に出たんだ。いまはだから住所不定」

クレスはミントを見つめ、彼女は何とも幸せそうな笑顔を返した。

「チェスターさんは一緒じゃないんですか？」すずと手を繋いだまま、メルは訊いた。

「あいつも旅の途中だけど」クレスは苦笑した。「またアーチェと喧嘩して、家出したのを連れ戻しにいってるんだ。——聞いた話だと、もう二年になるのかな。アーチェはあの性格だからね。なかなかつかまらないみたいだよ」

「兄貴……情けないなあ……」ディオはがっくりと肩を落とした。「じゃあ、リックスの奴とかは？」

「皆、結婚したり、商売を始めたりして、他の町へ巣立っていったよ。この間、ヴェネツィアに行ったんだけど、アニタの——メグの娘の結婚式があってね。僕らは旅から旅の生活で連絡

がつかなかったから、偶然の巡り合わせに驚いてたよ」

「メグ、幸せになったのね……」

クレスは頷いた。「皆もね。ジェニファーはエリオットと結婚してユークリッドでパン屋をやってる。エリーもユークリッドにいるよ。人形師になって、画家の旦那さんと楽しく暮らしてる。あの子を、その道に進ませたのは、メル、君が魔法のように治して見せた、ミリカがいたからだよ。ミリカは今でも、あの子の工房に大切に飾られている」

その話に、メルは涙が出た。会うことが出来ないのが残念だが、それを知ることが出来ただけで満足だった。

「アリスは二十歳のときに町に来た旅芝居の一座の看板役者に見初められて、今ではアルヴァニスタで劇場を持つまでになった。エドとカートも、自分たちと同じ双子の女性と結婚して、アルヴァニスタでレストランをやってる。繁盛していて、今度、ヴェネツィアに支店を出すそうだ」

「リックスは？」

「道場を弟子に任せた話をしたよね？」

「じゃあ……」

クレスは頷いた。「そう。彼がいまのアルベイン道場の道場主さ」

「でも、一番弟子はオレだぜ、師匠」ディオは胸を反らし、親指を立てて自分を指した。「忘

れないでくれよな」
一座は、楽しげな笑いに包まれ、それは夜遅くまでやむことはなかった。

三日後、メルとディオ、そしてクルールの、自分の時代へと帰る時が来た。ノルンが現れて、時の扉を閉めると告げたのだった。いつまでも開いておくのは、時空の歪みを助長することになりかねない、ということだった。
すずと乱蔵、クレスとミントと共に、二人と一匹は里を出てトレントの森に出た。里の人々にもなるべく見られない方がいい、という判断からだった。
ディオは池の側でレアバードを解凍した。修理は今度こそ完全で、墜落の心配はないと彼は請け負ったが、メルは怪しげな表情をした。パックに圧縮された魔法素もまだ十分に残っていて、燃料切れを起こす心配はない。
「これ、おみやげです」
すずが差し出したのは、干した大根と干した柿、それに味噌と海苔だった。
「ありがとう」とメル。
「パパたち、きっと驚くぞ。こんなの食べたことないもんな！」
ディオは圧縮用の袋にすべてを入れて圧縮すると、レアバードの荷物入れにしまった。
「元気でね、すずちゃん」メルは彼女と固く抱き合った。「わたしたち、ずっと友達だから

ね」
「わたしも忘れません……ぜったいに！」
メルは頷き、名残を惜しみながら体を離すと、手を繋いだままクレス達の方を振り向いた。
「クレスさん……時々でいいから、すずちゃんに会いに来てあげてくださいね」
「僕らはしばらくこの里にいるつもりだよ」クレスはミントと視線を交わした。「ここは静かで、とても居心地がいいからね」
ミントもこっくりと頷いた。
「君達も元気で。……逢えてよかった。さすがに僕らは、あと五十年は生きられないだろうから」
ディオもそれはわかっていた。「師匠……オレ、もっと修行して強くなるよ。《なりきる》事をしなくてもいいくらい」
「できるさ。なんてったって、ディオは僕の一番弟子なんだから」
「うん！」ディオは鼻をすすった。「さよなら師匠！　さよならミントさん！　兄貴にもよろしく！——すずちゃんもたまにはオレのこと思いだしてくれよな」
「はい。忘れません」
「へへっ」ディオは照れた笑顔を浮かべると、くるりときびすを返してレアバードに走り、クルールも短い手をすずたちに振って、それからディオの後を追った。

「わたしもいかなくちゃ」まだ指は繋いだままだった。「もう……いかなくちゃ」

「メルさん、お元気で」

「うん……すずちゃんも……」メルは下がり、するり、と指が離れた。「元気で……」せいいっぱいの元気を振り絞り笑うと、涙がこぼれて落ちた。それを払うようにメルは駆け、エンジンをかけて待っていたディオの後ろの席に飛び乗った。

爆発的にエンジンを吹かし、レアバードは一気に上昇した。足下に、皆の姿はたちまち小さくなり、すべては森に溶けて見えなくなった。

「もう見えない」メルは涙を袖でぐいと拭った。「……さよなら、すずちゃん」

「帰ろう、メル。パパとママが待ってる」

「……うん」

「よし！　島までひとっ飛びだ！」

ディオは、思いきりスロットルを開けた。

レアバードは何かを振り切るように飛んだ。

速く――ただひたすらに速く。

6　二律背反

　月の絵に手をかざして精神を集中させると、光が溢れて辺りを白い闇が覆った。いいかげん慣れた感覚が全身を包む。時空を越える時に感じる不快感は、戻るときにはほとんど感じない。行きは細い穴にむりやりに押し込まれて嵐の海に放り込まれる感じで苦しいが、帰りはスポンと引き抜かれる感じで、爽快感すらある。目を閉じても開いても、見えるのは白一色の世界。感覚的には上も下もない。それが、まず重力が戻って体の上下が定まり、それから色が戻ってくるのが、時空転移の常。アセリア暦四三五四年からの帰還も、なんら変わる所はなかった。足の裏に床の固さを感じ、霧が晴れるように世界に色が戻ってくる。見なれた工房の姿が徐々に織り上げられ、やがてエリックとファーメルの姿がそれに加わった。
「パパ！　ママ！」
　メルとディオは幼い頃に戻ってしまったかのように、両親に体当たりと変わらぬ勢いで抱きついて、危うく転倒させるところだった。懐かしい温もりと匂いがする。メルとディオは、しがみつくようにして顔を埋め、息を吸い込んだ。何故だかとても安心する。大きな手とやわら

かい手が背中を撫でてくれるのがわかって、メルもディオも顔を埋めたまま、嬉しくて笑顔になった。一匹だけ出遅れて残されたクルールは、自分の抱きつくところがないとわかると、何とか割り込もうと頭をぐりぐりと押し付けて、エリックとファーメルの笑いを誘い、二人もようやく顔を上げて、共に笑った。
「終わったんだよ、パパ、ママ！」抱きついたまま、ディオがそう報告した。「オレたち、自分を取り戻したんだ！」
「そんなに変わらなかったけどね」メルはあごをエリックの胸に付けたまま喋った。「結局、わたしたちって根が『良い子』だったみたい」
それを聞くと、ファーメルは微笑んで、ディオの跳ねた銀の髪を撫でた。「わかってたわ、そんなこと。……それじゃあ、もう危ないことはしなくてもいいのね？」
「そうだけど、オレ、もう少し冒険してもよかったな」
「わたしはもういいわ」とメルは肩を竦めた。「しばらくは家に居て、本を読んだり、絵を描いたりするの」
エリックは双子の背中を大きな手で軽く叩いた。「これからのことは、また明日にでも考えればいいさ。とにかく……おかえり」
「ただいま、パパ」メルは言い、なぜだか急に気恥ずかしくなって、もう一度、エリックの胸に顔をうずめて、服に鼻を擦りつけた。ディオも「ただいま、ママ」と言って、甘えてみせ

た。クルールは割り込むのをあきらめ、エリックの背中に飛びついてよじ登り、メルとディオに負けないとばかりに「きゅー！」と鳴いたが、ただいま、と言っているつもりなのかもしれなかった。

「あなた、今日は御馳走にしましょうよ」ディオの頭を抱いたままファーメルが言うと、エリックも、それはいい、と手を叩いた。「じゃあこれから町に行って、最高の料理を注文して――」

「わたし、そんなのよりママの煮込みハンバーグがいいわ」

「ええ？　つい昨日食べたばかりじゃない」

メルとディオは笑った。「それって、すずちゃんの時代に出かける前の夜のことでしょ。ママには昨夜のことかもしれないけど、わたしたちにはもう一カ月以上も前のことなんだから。絶対、煮込みハンバーグがいい！」

「オレも！　そりゃあ、ジャポン料理もおいしかったけど、やっぱりママのハンバーグが一番だよな！」

その通り、と言うようにクルールも手を上げた。

「でも……」

「いいじゃないか、ファム」手を放したために落ちそうになったクルールを右手で支えて、エリックは笑った。「この子たちが食べたいっていうんだ。それにファムの料理はレストランの

料理なんかよりもずっとおいしいよ」
「愛情は最高の調味料、よね」メルは両親の顔を見上げて、にひひ、と笑った。
「そういうこと」とエリックは臆面もなく言って、素早くファーメルにキスをし、ディオに「ワオ！」と声を上げさせた。
「……わかった、ママの負け」ファーメルはそう言ったが、嬉しさは隠しきれていなかった。
「あなたたちの好きなものを作ってあげる。そのかわり、お手伝いしてね」
「やった！」ディオは逞しくなった腕を振り上げた。
その時、玄関広間に、来訪者を告げるノッカーの音が響き渡った。
「誰だろう？」
「先生じゃないの？」とメルは、振り向いたエリックの腰に、まだぶら下がりながら言った。
「往診とか」
「パパもママも何処も悪いところなんかないぞ」
ふたたび扉を叩く音が響き、しかもそれは先刻よりもよほどせわしなかった。エリックは頭からクルールを下ろし、腰からメルの腕を解くと、ひとり工房を出て、玄関扉へと向かった。
その間にも、もういちど、今度はもっとせわしなくノッカーの音がした。残された三人と一匹は、扉の隙間から様子を窺っていた。
「ちょっと！　誰もいないの⁉」

エリックが取っ手に手を掛けようとしたとき、扉の向こうでそう大きな声がして、メルとディオは誰がやって来たのか気付いて驚いた。扉が開かれ、その向こうに立っていたのは、ピンクで統一された独創的なデザインの服を着て、同じピンクの髪をポニーテールにしてリボンを結び、右手に箒、左手に編籠を下げた少女である。

「アーチェさん！」

エリックが誰何する前に、メルとディオは工房を飛び出して少女――アーチェ・クラインに駆け寄った。ファーメルもクルールの短い手を引いて工房を出、夫の側に立って双子の喜ぶさまを見たが、夫婦共、事態を把握できてはいないようだった。

「そろそろ終わった頃だろうと思ってさ」

「すごい！　どうしてわかったの？」

魔女っ娘は顔の前で指を振った。「アーチェさんをなめてもらっちゃ困るわね。そんなのマナの動きを感じれば一発一発」

「さすがだなあ……やっぱり年の功、って奴？」

「うっさい！　そういう憎まれ口をきくおこちゃまは、蛙にしてやるかんね」アーチェの言葉にエリックとファーメルはギョッとなったが、彼女の瞳は笑っていた。「そんでもって新種の蛙として学会に報告して『銀色ディオ蛙』って名前を付けてもらっちゃうんだからね」

「いいじゃない、ディオ」双子の弟を肘でつついてメルはちょっぴり意地悪く笑った。

ディオは舌(した)を出した。「やなこった！」

「あの……アーチェ、さんて……」エリックは恐る恐るといった様子で、会話に口を挟(はさ)んだ。

「もしかして、アーチェ・クラインさん……？」

「そだよ。……あ、そっか！　御両親とははじめましてだっけ！」アーチェは箒をくるりと回して小さなイヤリングに変えてしまうと、耳に付け、それから礼儀正しくお辞儀(じぎ)をしてみせた。「はじめまして。アーチェ・クラインです」

「あ、これはご丁寧(ていねい)に……エリック・フォートです」つられるようにエリックも頭を下げる。「こっちが、妻のファーメルです。……あー、いつぞやは子供たちがお世話になったそうで……」

「いえいえ。あたしこそ、あれは楽しかったです」

「……なんか、らしくない」ぼそりといったのは、ディオだ。「いまさら猫(ねこ)かぶったって遅いと思うけど」

アーチェはディオを向いた。「あのね、あたしだって礼儀ぐらいはわきまえてるの。これでも長ああああく生きてるんだからね——ま、肩凝(かたこ)るけどさ」

そうして肩を回してみせたアーチェの姿に、メルとディオは笑い、エリックとファーメルも思わず吹き出したのだった。

アーチェも参加したその夜のささやかな祝宴は、メルとディオの希望もあって、料理のメインは煮込みハンバーグだったが、ファーメルははりきって大量に作り、いくらでもおかわりが出来て、クルールを含めた全員が、それこそ喉のすぐそこまでハンバーグが詰まっている感じになるまで食べたのだった。アーチェなどはなんと十個も食べ、エリックとファーメルの目を丸くさせた。

「ん～、おいし！」特製のデミグラスソースがよく染みこんだハンバーグを両方の頬に詰め込んだまま、アーチェは涙を流さんばかりだった。「このハンバーグ自体もすっごくおいしいけど、普段、ほとんど一人でごはんだからさー、やっぱり人と食べるごはんは特別おいしいよね！」

魔物の徘徊する八階建ての塔の最上階でただひとり暮らすアーチェの、その孤独がうかがえて、エリックは思わず「いつでも来て下さいよ」と言ったが、すると、メルとディオ、それにアーチェ本人の顔に、してやったり、という笑みが浮かんだ。

「やったね、アーチェさん」メルが手を上げ、パン、とアーチェと掌を打ちあわせた。「これでパパ公認よ！」

「パパはハメられたのかな？」エリックは苦笑した。「でも、本当にいつでも歓迎しますよ。メルとディオのよき友人として。――なあ、ファム？」

ええ、と言ったファーメルの笑顔は本物で、心から同意しているのがわかるものだった。す

るとアーチェは照れたように顔を伏せて、口を動かし、ハンバーグを飲み込んでから、小さな声で、ありがとう、と言った。

皆、あれだけ食べたにもかかわらず、デザートには、アーチェが持ってきてくれた手製のカスタードクリームパイとローズティーに舌鼓をうった。甘いものは別腹、とはよくいったものので、エリックはさすがに遠慮して紅茶だけにしたが、他の四人と一匹で、大きなパイは綺麗になくなってしまった。

食後は二階の居間に移動して、暖炉の前でメルとディオの冒険談を聞いて過ごした。アーチェは、すずや年老いたクレスに出会ったという話に、懐かしそうに目を細め、溜息をつくと暗がりに顔を向けた。泣いていたのかもしれなかったが、エリックとファーメルはそっとしておいた。自らは若いまま、友が、愛するものが、年老いて死んでいくということは辛いことなのだろう。だからこそ、エルフたちは人と交わらず、同じ時間を持つ者たちと閉じこもるのかもしれない。

炎の中で薪が白く変わり、崩れる頃、メルとディオは話し疲れて眠ってしまった。メルはクルールの耳を、ディオは足を握ったまま。しかも話に臨場感を出すとか言う理由で、なりきり師の服にわざわざ着替えていた。

「そろそろ帰るね」とアーチェは静かに言った。礼儀正しい言葉遣いは本当に最初だけであった。もっとも誰とでもすぐに打ち解けられ、憎まれないのが彼女の魅力なのだろう。

「泊まっていらっしゃればよろしいのに……部屋は沢山ありますから」
「せっかくの親子水入らずを邪魔しちゃ悪いから——って、もう十分邪魔したか」アーチェは、あはは、と笑った。
エリックとファーメルは、玄関まで彼女を見送り、それから居間に戻った。
「あーもう、これじゃあベッドになんか運べないわ」絡み合って寝こける双子と一匹を見てファーメルは溜息をついたが、その顔は笑っていた。「このままここで寝かすしかないわね」
エリックは自分たちの寝室から毛布を持ってくると、双子と一匹に掛けた。「今夜は暖かいからこれで大丈夫だろう」
「わたしたちは？」ファーメルは夫の腕に自分の腕を絡めると、豊かな乳房を二の腕に押し付けた。「いくらなんでも寒いんじゃない？」
「他の方法で暖まるさ」
「方法って？」ファーメルは楽しみを待つ女の顔になっていた。「どうするの？」
「わかってるんだろう？」
エリックが言うと、ファーメルは喉の奥でくすくすと笑い、体を押しつけたまま夫を寝室へ引っ張っていって、そのままベッドに倒れこんだ。
「待った！　ドアを閉めないと」絡み付く腕を何とか解いて立った。子供たちが起き出してくる気配はない。静かに扉を閉じて振り返ると、ファーメルはもう服を脱いでいた。

「来て」

エリックも服を脱ぐと、久しぶりの妻の体の匂いにのめり込んでいった。

黒い夢だった。

何千、何万という人々の怨嗟の声が、真っ暗な闇の中に絶え間なく響き、おんおんというひとつの大きな唸りになりながら、しばらくすると、またひとつひとつの声に変わり、やがてまた大きな唸りに戻るということを繰り返している。

何を呪い、何を怨んでいるのか。

混沌とした音の中で、だが、それだけははっきりとわかった。

(オレを)――(わたしを)――(怨んでいる!)――(呪っている!)

メルは、ディオは、黒の中ただ一人、色を持った、生きた存在だった。生きている――その事を、黒い闇は怨んで――呪っている。温かい血が、柔らかな肉が、白い肌が、水晶の瞳が、欲しい、よこせ、返せ、と叫ぶ。メルは、ディオは、訳も分からずに駆け出していた。そうしてみると、もう何時間も走り続けているような気もした。黒い声が、腕が、無数の甲虫のように、波のように、かさかさ、ひたひたと迫ってくる。

「返せ」

耳元に生温かい息を感じて、メルは、ディオは、悲鳴を上げた。

「よこせ」

黒い腕に足首を掴まれ、メルは、ディオは、転倒した。

そこもまた、闇。

顔のすぐ下で、黒い骸骨が口を開け、柔らかい頬を噛みちぎられた。

ぞぞ、と闇が押し寄せる。

何万という口が、メルを、ディオを口汚く罵り、侮蔑し、呪い、何万という腕が、服を剥ぎ取り、髪を引き抜き、皮を剥いだ。身に覚えのない怨みに、メルは、ディオは、許しを請い、全てを投げ出したが駄目だった。

メルは、ディオは、その体を、心を、陵辱され尽くされた。あらゆる苦痛を味わわされ、あらゆる屈辱を噛みしめさせられた。

そうして最後には、骨のひとつひとつまでバラバラにされて、それでも死ねずに、ただ苦痛だけがあって、許してください、死なせてください、とひたすらに、時のない空間で哀願するしかなく、しかし——

声になっていない、くぐもった悲鳴を上げて、メルとディオが跳ね起きたとき、暖炉の火はすでに燃えつき、辺りには青い闇だけがあった。夢と現実の狭間に意識を漂わせたままであった二人は、周りに素早く視線を走らせ、熱を嫌って暗がりで丸くなっていたクルールをみつけ

ると驚いたが、もう二分もするとここが安全な自宅であるとようやく納得できた。

服は嫌な汗で気持ち悪く張りついていたが、疲れきっていて、着替えをする気にもなれなかった。（なんて嫌な夢……）メルは額に張りついた髪を払い、それからようやく、ディオが自分を見ていることに気がついた。

「……ディオも見たの？」

双子の弟は頷いた。「やっぱり、メルもか」

「あれは……あんな……」言葉には出来なかった。思い出そうとしただけで、吐き気が込み上げ、思わず口を押さえた。頭痛もする。体温が急に上がって、また汗が噴き出た。「……だめ」

「とにかく、明かりをつけよう。暗いところにいると、夢が漏れ出してきそうだよ」

「嫌なこといわないで！」メルは自分でも驚くくらいヒステリックに反応してしまい、ディオの目を丸くさせて初めてそれと気付いて口を覆った。「……ごめん」

ディオは何も言わなかった。黙って立ち上がると、ランプのところへ行こうとして、だが果たせなかった。行く手を遮ったものがいたのだ。

「ノルン！」正に彼女だった。見間違いようもない。

「……夢を見たのですね」

メルとディオはその言葉だけで体を震わせた。

ノルンが背中の純白の翼を大きく広げると、月の輝きに似た冷たい白い光が隅々まで届き、部屋の闇を追い払ってくれた。眩しさでクルールが身をよじったが、二人には気にする余裕などなかった。その夜のノルンは、これまでとは違って見えた。光は強く痛いほどだ。表情もその輝きのせいで巧く読み取れない。

「わたしは初めに、あなたたちがなぜ心を封印されたかを話しましたね？　憶えていますか？」

ディオは頷いた。「オレたちが知らない『罪』ってやつだろ？」

「そうです。あなたたちは『試練』を乗り越え、自分を取り戻しました。しかしそれは『罪』への贖罪とは何ら関係のないことです。あなたたちの心は、それを知っているのです。だからこそ『罪』を『夢』という形であなたたちに見せたのです。忘れさせないために。これから毎夜、生の続く限り、あなたたちはあの夢を見るでしょう。それがあなたたちの贖罪なのです」

「あれを毎夜!?」と言ったメルの声は悲鳴に近かった。「死ぬまで!?　そんなの堪えられない！」

「そうだよ！　だいたい『罪』ってなんなんだよ！　俺たちが何をしたっていうんだよ！　あんな風に怨まれるなんて、全然、身に覚えなんかない！」

「……知りたいですか？　あなたたちの『罪』がなんであるのか」ノルンの声は静かだったが、ひどく重々しかった。「方法はあります。そして、あなたたちが己の『罪』を知り、己と

向き合えば、悪夢から逃れる術も見つかるかもしれません。……それを試してみますか？」
考えるまでもなかった。あれを毎夜など、生き地獄と変わらない。二人ははっきりと頷いた。

「では、参りましょう」ノルンは二人に手を差し伸べた。「終わりの城へ」

彼女の手は白く輝いて、まるで救いの御手のように、メルとディオには見えた。吸い寄せられるように自らの手を彼女のそれに重ねる。そのときふと、クルールを置いていくのだろうか、という考えが浮かんで、メルは振り返った。クルールはちょうど目が覚めたところのようで、耳が立ち、何かにひどく驚いている様子だった。

短い足で駆け寄ってくる。メルはひどくのろのろと手を伸ばした。時間が延びているような感覚があった。

「うきゅーっ！」

手は届かず、すべては光の中にのみ込まれた。

居間から三人の姿は蜃気楼のように消え失せた。

クルールは止まれずに転び、まるい体が玉のように転がって、壁にぶつかってようやっと止まった。

「きゅーっ！」

一声鳴いて、癇癪を起こしたようにひとしきり手足をばたつかせると、クルールはもう一度転がってしゃんと立った。そして、急に短い足で走りだし、三人が消えた辺りで飛び上がってくるりと回った。

丸い緑の姿が揺れ、月の光に溶けるようにクルールは消えた。

後にはただ、静まり返った夜だけが残った。

白光が消えた時メルとディオが立っていたのは、まったく見知らぬ場所だった。一見すると、天然の洞窟のように見えるが、それにしては区画が整いすぎている。じめじめと湿っぽく、あちこち苔むして、しかもひどく魔法素が濃いと感じられた。明かりはいっさいないのに、壁そのものが淡く光り輝いて、薄ぼんやりと明るい。

「ここは……？」ディオはノルンに訊いた。

「ヴァルハラの町の近くの断崖、その底にある洞窟です。空間転移——時は越えず、立ち位置だけを変える魔法を行い、移動したのです」

「なんだか不思議な場所……」

「ここにはかつて、ダオス城がありました。しかし、クレス・アルベインによって主が倒された数年後、大地震が起きて城は大地の裂け目に飲み込まれたのです。そのとき土台から天地が返り、逆城となって埋もれました。私たちがいるのは、その城のかつての一階です。ここは

時空の歪みが最も大きい所。時の逆行が起きる場所」すう、とノルンがメルとディオの側を離れた。

「ノルン？」

「そしてここは――」突然、ノルンの表情が激変した。穏やかな仮面は吹き飛び、恐ろしい悪魔の顔が現れた。「おまえたちの死ぬところだ！」

「えっ!?――ああっ！」

直後、メルとディオは、ぞっとするような感覚を味わわされた。レアバードで急降下したときに、腰の辺りから何かを引き抜かれるような、そんな気持ちの悪さがあった。

ノルンの姿は溶けて空中に消え、ずるり、とメルとディオの体から、煙のようなものが分離し始めた。離れるにしたがって白煙は、骨を持ち、肉を持ち、徐々に人の形になっていく。それが振り向いた時、メルとディオは喉の奥でちいさく「ひっ」と声を上げた。そこにあったのは、他ならぬ自分の顔だったのだ。

けたけたと嗤いながら分離した《もう一人のメルとディオ》は、腰が立たずに座り込んでしまった二人を見下ろした。同じ《なりきり師》の服に、同じ銀の髪、同じ顔。だが、どこか不安定であり、確固たる輪郭がないと感じられた。

「うふふ、驚いてるのね」と《もう一人のメル》が言った。「でも大丈夫。すぐに何も感じなくなるから」

「そうさ！　おまえたちはすぐにいなくなっちまうんだからな！」《もう一人のディオ》が嗤った。「偽者がオレたちが寝てる間に、好き勝手やりやがって！　返してもらうぜ――その体！」

何を言われているのか、二人にはさっぱりわからなかった。しかし、何をされようとしているのかはわかった。ドッペルゲンガー――エリックが言っていたもう一人の自分。互いの存在を許さず、どちらかは消滅する……。二人は逃げようとしたが、体は痺れたようになって動かなかった。

「消えちまえっ！」

「消えちゃえっ！」

《もう一人のメルとディオ》の声が重なり、瞳が紅く輝く。

「うきゅーっ！」

合わせ鏡のような四人の間に、突如、クルールが現れ、クルールの尻尾の付け根の星が輝いて、メルとディオの瞳を灼いた。

思わずつぶり、動く両腕で顔をかばい、体を丸めた。火をつけられるのか、凍らせられるのか、それとも夢のようにバラバラにされるのか――しかし、いつまで待っても、何も起こらなかった。

恐る恐る、メルは目を開けた。また、風景が一変していた。《もう一人の自分たち》はどこ

にもおらず、代わりに目の前にクルールが倒れているのが一番に目に入った。慌てて抱き上げると、気を失っているだけのようで、丸いお腹が規則正しく上下していて、何処にも怪我はないようだった。

（クルールが何かして、それで助かったのかな……？）目をつぶる寸前に、星型が激しい光を発したのをメルは確かに見ていた。（この子は魔法が使えるから、何か自分たちの知らない術を使ったのかも）

ノルンが自分たちをあの城へ運んだ術をメルは考えた。空間転移。そう言っていた。あれが魔法なら、クルールが使えても不思議はない――無理にでもそう思うことにした。そうでなければ、眼前に広がる光景に堪えられそうにない。

（だってここは……まるで地獄のようだもの）

それほどに奇怪。こんな場所がアセリア暦四四〇八年の何処かに存在するとは思えない。メルはすぐ隣でうつ伏せになって倒れているディオの肩を掴み、一瞬の逡巡のあと、強く揺さぶった。固い岩盤の大地に鼻を擦って、ディオは跳ね起き、メルはほっとした。もし起きなかったらどうしようかと思ったのだ。

「いってえ……」のろのろと体を起こしてディオは鼻の頭を撫でた。少し強くやりすぎてしまったか、赤くなっている。「くっそーあいつら――うわっ！　なんだここ⁉」

ディオが驚いたのは無理もない。それほど異様な光景なのだ。

　二人と一匹がいるのは固い岩盤の上である。樹はおろか、草ひとつ生えていない。手触りは、前にも触った事のある、固まった溶岩のようだ。平らで、それほど遠くないところで四方全ての地面が消えて無くなっていて、まるで角材の断面の上にいるようだった。自然の風景は、時折、そうした柱を作り出すことがある。噴火口まで溶岩が上がってきて冷えて固まり、その後で山だけが無くなればこんな風にもなるかもしれない、とメルの理性は理屈を引きずり出したが、おそらくそうでないことはわかっていた。同じような場所が、二人と一匹がいる場所からあと六つ見ることが出来、その下部には柱などはなく、鍾乳洞の天井を切り取ったようで、全てが空中に浮いているのだった。空も尋常ではない。黒と青の闇が溶けあわずに交じり合ってつねに流動しているような様子である。台座の上には、ひとつにひとつ城が建っていて、それぞれの台座は完全に独立し、橋などで繋がっている様子はなかった。

「……どこだよここ」立ち上がり、辺りを見まわしてディオは唸った。

　メルはまだ立てずに、膝の上にクルールを抱きかかえたまま首を振った。と――

「ここは時のない場所」なにもない空間から、光を纏い、ノルンが出現した。「人によっては『暗黒時空』と呼ぶ、人の記憶の封印された場所です」

　だが、ディオは聞いてはいなかった。ポーチから圧縮されていた剣を取り出し、瞬時に解凍してそれを構えた。「騙したな！」

「メル、ディオ……あなたたちをここへ連れて来たのはわたしではありません。あれは《もう

一人のあなたたち》が造ったわたしの影……あなたたちの体を奪うために、最も時空の歪みが大きいこの場所へ誘い出されたのです」

「どういうことだよ」ディオは構えを解かずに訊いた。

「彼らはあなたがたを『偽者』といいましたが、それはある意味では正しいのです。なぜなら、彼らこそが『罪』を犯したあなたたち――遠い過去のあなたたちなのですから。あの子たちもまた、メルとディオなのです。あの子たちはその『罪』のためにここに本当の心と共に封印されていました。しかし『試練』を乗り越え、全ての心が解放されたために、自由になったのです」

「知ってたんだな」

ノルンは頷いた。「けれども、こんな事になるとは思ってもいませんでした。あの子たちはあなたたち自身。心が解放されれば、自然と融合してひとつになり、その時『罪』のことも思い出すだろうと、そう考えていました。『罪』の重さに耐えられるかどうかは、心を取り戻す過程でのあなたたちの成長しだい――それが、わたしのあなたたちに対する『審判』でした。しかし《今のあなたたち》と《過去のあなたたち》は余りに遠くなりすぎた……あなたたちは様々な人々との出会いのなかで大きく成長し、強い光を放つようになりました。光が強ければ、闇は濃くなります。封印されていたあの子たちは、あなたたちのその光に堪えられなかった。だから消そうとしたのです」

「……消して、それでどうするつもりなんだよ」
「あの子たちは、未来の閉じた過去の存在。閉じた時間は始まりの場所へ戻り、歴史を繰り返します。——つまり『罪』の再現」
「なんだよそれ！」ディオは怒りに任せて剣を地面に叩き付けた。高い音が辺りに響いて、吸い込まれるように消えた。「その『罪』ってのはなんなんだよ！」
「あなたたちの知らぬあなたたちの『罪』の記憶は、あの六つの城に封印されたままのようです。扉を開けば、その記憶が蘇るでしょう。あなたたちがこの『試練』を乗り越えれば、再び目覚めることができるでしょう」
「目覚める？」
「いまのあなたたちは肉体を持った存在ではありません。『罪』に負け、自己の存在を否定すれば、その瞬間、あなたたちは消え失せます。その時、《もう一人のあなたたち》はメル・フォートとディオ・フォートとなって、あなたたちの時代で『罪』を再現するでしょう」
「それが本当だって証拠があるのかよ」
「何も」ノルンは言った。「……ディオ、それでも信じてもらえますか？」
「ちぇっ。どっちにしたって、そうしなけりゃここから出られないんだろ？——いいよ。やるよ。……それでいいか、メル？」
「それしかないものね」メルはふうと息をついた。「早く終わらせてパパとママのところに帰

ろ？」

ディオは頷いた。

「では、城の扉を開きます。心をしっかりと保ちなさい。そして見るのです。これもまた、あなたたちの可能性の枝のひとつ――」

ゆっくりと巨大な扉が開かれ、炎が……氷が……光が……闇が……『罪』と共に溢れ出した。

メルとディオは全てを見た。自分たちが犯したというその『罪』を。

その時、二人はいまよりも大人だった。メル――メルティア・ヴォート、二十七歳。ディオ――ディオス・ヴォート、二十七歳。

二人はその時も双子の姉弟であり、ヴォート家に引き取られて育てられ、ディオスは養父にならい軍人となっていた。一方、メルティアは科学者となり、世界を支える樹で生成されるという無限エネルギーを使った研究と実験を行っていた。

その大樹の名は『カーラーン』といった。

ただ一本の樹が支えていると伝えられる星は『デリス・カーラーン』と呼ばれていた。

その星は、大地に約十億の民を擁し、頂点にただ一人の指導者を頂く共和国家としてまとまっていた。だが、決して平和だったというわけではない。外から見れば些細な、だが当人たち

にとっては重大極まりない理由で、各地では小さな紛争が繰り返されていた。

パレスセダムとパレスグドラという、よく似た名前の小さな二つの国の争いも、国境付近で散発的に行われるそうした争いのひとつにすぎないはずだった。だが、武器は武器を、血は血を呼び、紛争はしだいに互いの領土へ染みのように広がり、もはや全面戦争へと突き進むしかなかった。

ディオスとメルティアは、そのパレスグドラに住んでいた。

養父はパレスグドラ軍の指揮を執る将軍であり、ディオスは養父の下で二十の頃から戦場を駆け、敵からは『銀の悪魔』と恐れられる魔騎士だった。戦争は長引き、その間に、大学や各企業の科学研究機関は皆軍属となった。メルティアが主任を務めていた研究所も、同じだった。同僚は魔科学の兵器への転用を恐れて研究所を去ったが、彼女は残り、新たな同僚と共に研究を続けた。魔法素を人の想念によって変換し、強力なエネルギーを得ることが、彼女の目標だった。デリス・カーラーンの民が日常的に使える『魔法』が、想念変換の微細なものだと突き止めたのはメルティアであり、彼女はその研究にこだわっていた。

だが、開戦から六年後、パレスセダムが隣国と同盟を結んだことで、戦況はパレスグドラに一気に不利に傾いた。共和国議会の長にして、デリス・カーラーンの盟主であるダオスから停戦命令が発せられたことも無関係とは言えなかった。そのためにパレスグドラはどの国にも援軍を求めることが出来なかったのである。

それでも一年はもった。

しかし、そこまでだった。パレスセダム軍は、パレスグドラの首都にまで軍を進め、議会城の陥落は目前だった。ヴォート将軍は残存兵力を全て城に集結させ、徹底抗戦を告げた。

「敗北者に未来はない！　彼奴らは我らを一人として生かしてはおかぬだろう！」ヴォート将軍は城の中庭のバルコニーで傷だらけの将兵に向かい、口から泡を吹き、目を血走らせ、拳を振り上げた。「戦うのだ！　戦って死ね！　家族を敵の手に渡してはならぬ！　渡すくらいなら自らの手で殺せ！　自決せよ！」

城の周囲はパレスセダムの地竜部隊の吐く炎で空まで赤黒く焼け焦げている。あの下では何千という民衆が、確かに焼かれ、竜の足に踏み潰されて死んでいる。

（養父のいっていることは、あながち嘘ではない）バルコニーの奥、カーテンに隠れるように、ディオスは控えていた。（だが、養父はもう駄目だ）

養父ばかりではない。軍そのものがすでに組織としての役を為していなかった。逃げ出したものも多い。そうするべきなのはわかっていた。だがディオスにはメルティアがいた。双子の姉がここを離れるとは思わなかった——姉もまた、狂気に取り付かれていた。

彼女は想念で世界を救えると信じていた。魔法素を幸福の想念で変換して戦場に撃ち込めば、争う心が消え、平和が訪れると。魔科学砲の建造に黙って手を貸したのもその為であり、そのことを知っているのはディオス一人だった。

（だけどメルティア……もうこの国には、幸福の想念など、どこにもないんだ）
それは、メルティアも気付いていた。気付いていながら、しかし目をつむり、耳を塞いだのだ。
「ディオス」バルコニーから戻った将軍は彼を呼んだ。「おまえに最後の命令を与える。将軍として、そして父親としての最後の命令だ。――あれを使え。メルティアがうるさいことを言うなら、力ずくで黙らせよ」
「は」
ディオスは敬礼すると将軍に背を向け、二度と振り返ることはなかった。皆が戦いに赴き、無人となった中庭に、落ちて頭蓋骨の砕ける音がしても振り返りはしなかった。彼の足はそのまま城の地下へと向かった。そこには魔科学砲の制御室があるのだ。行き着くまでに何度か大きな揺れがあった。攻城兵器が撃ち込まれているのだろう。一階の隠し階段は半ば崩れていた。無理矢理体を通し、奥へ進むと、分厚い鋼鉄の扉も変形して曲がっている。力任せに引き剥がすと、中もあちこちで天井が崩れ落ちていた。
瓦礫の下敷きになったメルティアを見つけるのに時間はかからなかった。石をどけ、抱き起こすと肺が潰れているのがわかった。
（ディオス……わたし、なんのため……に……）
くちびるがそう動いて、メルティアは死んだ。

ディオスはメルティアを片腕に抱いたまま立ち上がると、魔科学兵器の制御装置の前に立った。砲はすでに発射待機状態になっていた。操作方法は知っている。養父に言われてとうに憶えていた。

ディオスはスイッチを押した。魔科学砲は人の想念を――うずまく『憎しみ』を糧に魔法素を変換し、それを魔光に変えて無差別に発射された。敵味方の区別なく光は全てを灼き尽くした。だが、長くはもたなかった。魔法素が急速に減少したためだった。消費量が供給量を遥かに上回った結果だった。

(メルティア……俺は……俺は……)

魔光は十五万の人々を一瞬にして消し去り、メルティアとディオスもまた、青い光に呑まれて消えた――全ての魔法素と共に。

「大樹カーラーンは枯れました」とノルンは言った。「カーラーンとは星の歴史。樹が枯れれば歴史も消え、全ては存在しなかったという事になります」

二人と一匹は闇の中にいた。上も下もない。そこに立ち、全てを見たのだった。メルとディオの頬は涙に濡れ、瞼は赤く腫れ上がっていた。余りにも残酷な、余りにも恐ろしい『罪』だった。メルとディオは、メルティアとディオスの人生を追体験したことで、心を握り潰されんばかりだった。堪えられたのが不思議だった。全ては闇に塗りつぶされている。ノルンはその

中で、ただひとつ輝く光だった。

「わたしはノルン——大樹カーラーンの精霊です。ダオスは、世界樹であるわたしを、彼の民である十億の人々を救う手段を求めてデリス・カーラーンを旅立ちました。わたしは、最後の刻を僅かでも遅らせるために仮死状態に入りました。けれど進行する枯死は止めることは出来ませんでした。死は緩慢に枝先、根先から忍び寄り、次々と歴史が消えていきました。それが止まったのが、十四年前のことです。ダオスがその命と引き換えに得た『大いなる実り』がデリス・カーラーンに届いたのです。わたしは蘇り、歴史は再生しました。けれども、わたしは人間がわからなくなっていました。わたしを枯らそうとしたのも人間なら、命をかけて蘇らせてくれたのも人間。彼らの本質は『善』なのか『悪』なのか……それを見極めたいと考え、わたしは虚空に漂っていたメルティアとディオスの魂を見つけ、記憶を封じ、肉体を与えて、この星へと送ったのです。ダオスはこの星では『悪』でした。『善』『悪』の判断のあいまいなこの世界——わたしは、わたしの母でもある世界樹マーテルが守る世界で、人間の本質を見極めたかったのです……」

「だがノルンよ。そなたに我ら人間を裁く資格があったのか？」

　そう声がすると、メルとディオの足元から、闇が急速に引いていった。彼らが立っていたのは、硝子の床の大きな部屋だった。道のように赤い絨毯が敷かれ、その先は一段高い玉座へと続いていた。

声の主はそこに座っていた。気だるげに肘掛けに腕を乗せ、頬杖をついている。歳の頃は二十代半ばといったところだろうか。絵のような端正な顔立ちをして、藍色の瞳が二人と一匹を見下ろし、緩やかなウェーブを描く黄金の長い髪が、肩から腕へと流れ落ちている。全身を覆うような黒い服に身を包み、その背には二重になったマント、手首には三つの金環をはめ、腕と足、そしてマントの裾には同じデザインで、金糸で美しい縁取りがなされていた。

「ダオス……」とノルンは呟いた。

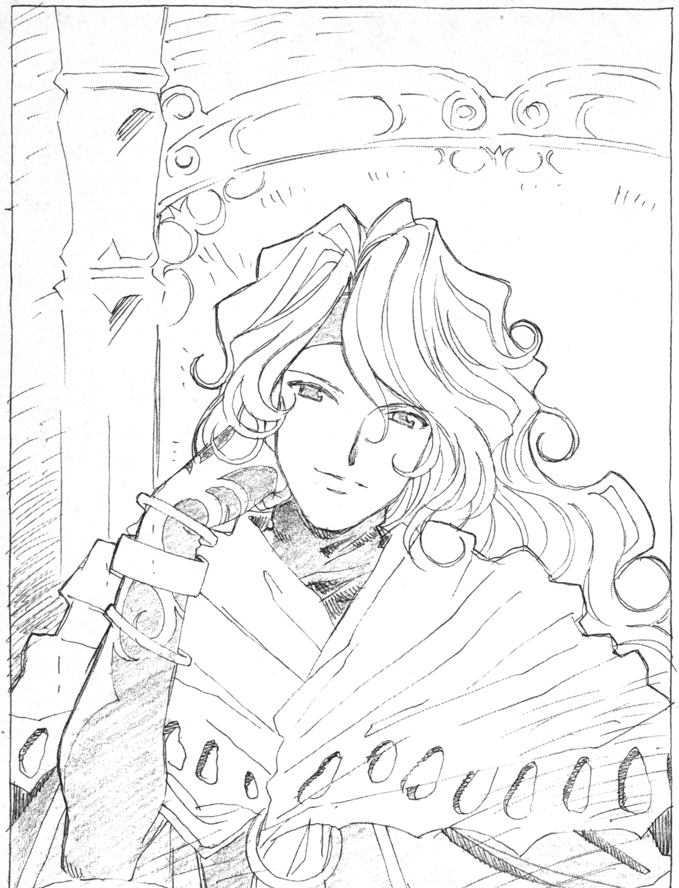
メルとディオは驚いて玉座の男をよく見た。到底『魔人』と呼ばれた人物とは思えなかった。唇には薄い笑みが浮かび、瞳には優しい光が満ちている。

「驚くことはない、デリス・カーラーンの民よ。ここはビフレスト城の最上階。そして、今ここにいる私は実体ではない。過去の幻想。この星に残る記憶の残滓だ。人は私を盟主と呼んで慕い、また、魔人と呼んで恐れた。どちらが本物でどちらが偽者というわけではない。この世に『悪』と呼べるものがあるとすれば、それは人の心だ。だが、それは同時に『善』でもある」

「でも、わたしたちはとり返しのつかないことをしてしまった！」メルが叫ぶようにいった。好奇心が十五万の人々の命を奪ったのだ。「それをどうつぐなえばいいの……」

「撃ったのはオレだ！」ディオの声も悲鳴だった。「オレが撃ったんだ！」

だが、ダオスは微笑みを浮かべたまま首を振ると立ち上がり、二人の側に寄って膝をつい



た。その手が肩に置かれると、二人は体を硬（かた）くした。
「あれはメルティアとディオスがしたことだ。この星で、この星の人々に慈（いつく）しまれて育った、メル・フォートとディオ・フォートのしたことではない」その言葉は胸に染み、過去を見たときからメルとディオの心を際限無く切り刻んでいた刃（やいば）をたちまち溶かしてくれた。「人は間違いを犯す存在だ。私もかつて、この星で間違いを犯した。だが、どういう形であれ、生まれ変わった者が前世のことで責められるべきではない」
　メルとディオは声を喉（のど）につまらせて、しゃくりあげた。
　ダオスはノルンを向いた。「メルティアとディオスは、君によってこの子達へと転生（てんせい）させられるまでの数百年、あの最後の時を繰り返してきた。もう十分だろう。彼らもまた、我が民。解放してやってはくれぬか？」
「それは私の役割ではありません。あの子達が許される道はひとつ……それはメルとディオと再びひとつになることだけ。けれど、その結果、何が起こるかは分かりません。いまここにいるわたしには、未来は不確定なのです。……それに、あの子たちはデリス・カーラーンの悲劇をこの星で再現するために、時空の歪みを故意（こい）に大きくしました。やがてマーテルによる時の修正が行われるでしょう。その時、この星の存在ではない我々がどうなるのか……それはわからないのです」
「それでも……彼らも我が民なのだ」

「……どうしますか、メル、ディオ」

メルは鼻をすすった。「それで贖罪になるのなら……わたし、メルティアを受け入れます」

「オレも……オレはオレだし」

「すまない。メル、ディオ」ダオスは立ち上がり、後ろへと下がった。「さあ、帰るがいい。そして、過去に打ち勝つのだ」周囲の光景が流れはじめ、ダオスとその部屋は、瞬く間に遠く離れていった。「さらばだ、我が民よ……」

もう会えないのだ——メルとディオは、胸に突き上げる別れの痛みに、自分たちが本当に彼の星の民であると知った。

やがて全ては闇に包まれ、メルとディオは再び気を失った。

ディオが目を開けたとき、最初に飛び込んできたのは苔生した石の天井だった。否——床だ。かつては床だった場所。逆さになった立派な椅子が見える。玉座だ、と気づいたのはすぐだった。肘掛けには蝙蝠が列を為してぶらさがっている。

(戻ってきた！)

いきなり動くようなことはせず、ディオは体のあちこちを少しだけ動かして状態を調べた。

——なんともない。縛られてもいなかった。腰のポーチもそのままだ。視線を横に走らせると、左にはメルが寝かされていた。クルールは右の腿のすぐ脇にうつぶせになっている。足の

方で別の気配がして、見ると、《もう一人の自分》達がそこにいて何かを話し合っていた。ディオはそろそろと左手を伸ばして、メルの脇腹をつついた。彼女はここが弱い。ぴくん、と体を震わせ、メルはゆっくりと目を開けた。

(気をつけろ)ディオは囁いた。(ゆっくりだ。体の状態を調べて)

メルは頷き、指を曲げたり、足をゆっくり動かしたりして、そうしてもう一度、頷いた。ディオも頷き返し、クルールを頼む、とまだ眠ったままの緑の獣を指さし、そうして――跳ね起きた。

「ディオス！　メルティア！」ディオの声に、ふたりはぎょっとなった。「馬鹿なことはやめろ！　この星をデリス・カーラーンと同じ目に合わせたって、おまえたちの痛みや苦しみが消えるわけじゃないんだぞ！」

「戻ってきた⁉」メルティアは驚いていた。「どうして⁉　今度はあんたたちがあの牢獄で、永遠に苦しむはずなのに！」

「ダオスがわたしたちを助けてくれたの」クルールを揺り起こして、メルは答えた。「あなたたちを心配していたわ。苦しみから解放してやって欲しいって頼まれたわ」

「解放？――はっ！」ディオスはディオと同じ顔でどうしてこんな顔が出来るのかわからないほど凶悪な笑みを浮かべた。「だったらその体をさっさとくれよ！」

「ひとつになるんだよ！」ディオは言った。「そうすれば――」

「ひとつになったとき、表層意識に残るのは、俺か？　おまえか？」ディオスは指を突き付けた。「うまいこと言って俺達をまたあの魂の牢獄に忌まわしい記憶と共に閉じ込めようったってそうは行くか！」

「そんなこと！」

「うるさい！」メルティアは叫んだ。「……こうなったら少々手荒くしなくちゃ駄目ね。ディオス、この子達を一度殺して、それから体を奪いましょう。傷は後から再生すればいい」

「そうだな――よし！」

ディオスは指笛を吹いた。すると暗がりから二人の魔族が現れた。ジャポンソードによく似た剣を携えた一人と、明らかに魔法の使い手とわかる一人――共に人間とほとんど変わらぬ姿をしている。魔族は竜、または人の姿に近いほど、手強いといわれている。ディオスの指笛に従って現れた二人は、相当な《力》の持ち主だと、これまで培ってきた経験がメルとディオに告げていた。だが、メルティアとディオスは、魔物をメルとディオにけしかける為に呼んだのではなかった。どちらが魔族かわからないほど邪悪な笑みを浮かべると《もう一人の自分》たちは魔物と融合を始めたのだ。魔物達は融合が進むに従って、まったく別の姿へと変貌していった。ディオスもメルティアも共に頭から羊のそれにも似た巨大な角を生やし、ディオスはそれ自体が生きている漆黒のマントを纏い、メルティアは美しい鳥を思わせる服とマント姿になった。

「着替える時間はやらないぜ！」ディオスは剣を抜いて躍りかかった。「そのまま死にな！」恐ろしく重い一撃がメルを襲った。だが、ディオは素早く腰のポーチから『忍者頭』の為のジャポンソードを解凍して出すと、二人の間に割って入り、ディオスの剣を弾き返した。

「なに⁉」後ろへよろけながら、ディオスは驚いていた。「《なりきって》もいないのに、なんで――」

「オレは、クレス・アルベインの一番弟子だ！」ディオは刀を大上段に構えた。「そこから引きずりだしてやる！」

完全に外れた間合いから、思いきり刀を振るう。切っ先はただ空を斬った。だが――

「ぎゃっ！」

ディオスの後ろで、メルティアが悲鳴を上げ、肩から血が噴きだした。真空刃ではない。それならばディオスに気づかれずにメルティアを斬ることは出来ない。ディオスは見た。膝をつくメルティアの背後で、閉じていく《空間》を。

ディオの放った一撃は、アルベイン流の奥義のひとつ『次元斬』――空間を斬り裂いて離れた場所と場所を繋ぎ、相対距離を零にして相手に斬りつける技であった。

「ばかなっ！」

驚愕するディオスとメルティアの間に、すと、とメルが放った小刀が落ちてきて突き立った。気がついたときには遅かった。周囲で放電が始まり、小刀がまるで避雷針のような役割を

して、生まれた稲妻のすべてを集め、メルティアとディオスの体を灼いた。
「伊賀栗流忍術――『雷電』……」
つぶやいたメルもしかし『なりきり師』の服のままだった。
「何故……だ……」
「《なりきる》力は服にあるんじゃない。オレ達の中にある」ディオは仁王立ちになって言った。「衣装はきっかけにすぎない。いろんな人に出会って、『人生』を知り、『罪』を知り、『悲しみ』を知った。そして気がついた。オレたちはもう、衣装に頼らなくても《なりきる》ことができる――オレたちはオレたちのまま、なんにだってなれるんだ！」
「もう、苦しまなくていいのよ」メルの声は優しかった。「どちらかが残るんじゃないわ。ひとつになるの。メル・フォートでもあり、メルティア・ヴォートでもある存在になるだけ――だから、怖がらないで」
「怖がってなどいないわ！」メルティアは血だらけの手を上げた。「天に輝く数多の星々よ！その光を礫に変え、我が声に応えて降らせよ！――レイニースター！」
「うきゅーっ！」
鼻先に角をもち、鋼よりも硬い鱗の、まるで巨大な古代の地竜のような姿に変態したクルールが、メルとディオの前に出た。ふたりはすばやくクルールの体の陰に隠れた。光の礫がクルールの体で砕ける。だが、多少の傷は出来ても、少しも堪えてはいないようだった。

「わからずやっ！」

叫び、メルはポーチから弓のセットを解凍して出すと、クルールの背中に駆け上がり、ただ一本、矢をつがえて構えた。ディオはメルに優しく手を添える、チェスターの姿を見た。

弓を離れた矢は、メルティアとディオスの目の前の、かつては天井であった床に突き刺さった。外れた——そう思った時、矢を中心に半径二m程の場所が爆発したように吹き飛び、メルティアとディオスもそれに巻き込まれた。

熟練の弓使いの技『衝破』だ。だがメルがいま放ったそれは、威力が桁違いだった。地属性魔法の最上級『アースクエイク』に匹敵する。

——勝負は決した。

メルティアもディオスも、素体となった魔物の体がひどく傷つき、もはや立つことすら出来ない様子だった。

メルとディオは二人に近づき、膝をついた。

見下ろされ、ディオスは唸った。「おまえたちは、馬鹿だ……過去の自分を否定するなんて……俺たちを負かして、それで、めでたしめでたしだと……思ったら、大間違いだ！　過去を消せば、おまえたちも消える！　消えてなくなるんだ！」

「それは違う」ディオはきっぱりと言った。「言っただろ？　オレたちはひとつになるんだ。どちらかが消えるんじゃない。……もう、あの『罪』を繰り返す必要はないんだよ」

「そうよ」メルはもう口も利けないメルティアの手をそっと握った。「もう大丈夫」

ディオも《もう一人の自分》に手をさしのべた。

ディオスの目から、涙が溢れた。「……おまえら……とんだ……馬鹿野郎だよ」

救いの手を、ディオスは握った。

四人の体が輝き、メルとディオは自分の中にメルティアとディオスが入り込み、溶けあっていくをの感じた。これでもう苦しまなくていいんだ、という安堵感が込み上げてきて、自然と涙が溢れた。

手の中で魔物は元の姿に戻った。メルが法術をかけてやると、魔物は毒気を抜かれたようになって、何処かへと去っていった。

「どう?」とメルが訊いた。「なんか変わった?」

「別に……わかんないな」ディオは自分の手を眺めた。「どっちも自分だったんだから、こんなものなのかもな」

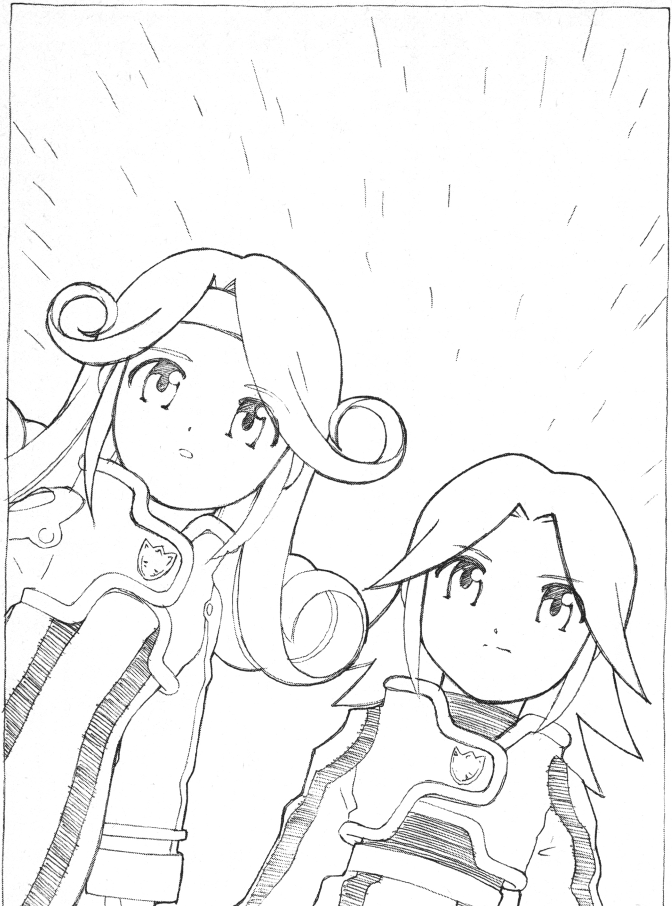
メルは笑顔になった。その時、元の姿に戻ったクルールが二人の側を離れるのに気づいて

「どこいくの?」と彼女は呼びかけた。すると、クルールは立ち止まって振り返り、不意にそのまま前のめりに倒れた。

「クルール!?」

二人は駆け寄ろうとして、だが、驚いて足を止めた。倒れたクルールの背中から光が溢れ、

人の形になったのだ――純白の鳥の翼を背中に持った人の姿に。
「ノルン⁉　なんでノルンがクルールから――」
「わたしはこの子の体を借りて、ずっとあなたたちと共にあったのです。大丈夫、クルールは眠っているだけです」
それを聞いて、二人は胸をなでおろした。
「ありがとう、メル、ディオ。あの子達を受け入れてくれて。……ダオスの言う通り、わたしには人を裁く権利などありませんでした。わたしの傲慢が、あの子達の心を歪ませ、魔物に憑いたとはいえ、あのような姿へと変えてしまいました。人は『善』『悪』を合わせ持っているからこそ人なのですね。あなたたちと共に旅をして、それを知りました。ありがとう、メル、ディオ」
「いやあ……」ディオは照れたように笑顔になった。
「しかし」不意にノルンの顔が厳しくなった。「『試練』はまだ残っています。間もなく時の修正が始まります。――メル、ディオ。わたしと戦うのです」
「えっ⁉」と二人は同時に声にしていた。
「わたしやダオス、そしてあなたたちはこの星の歴史――世界樹ユグドラシルの枝に入り込んだ異分子です。多少であれば、世界樹は優しく包んでくれますが、メルティアとディオスの広げた歪みは大きすぎたのです。わたしもまた、デリス・カーラーンの世界樹――マーテルの思



いは手に取るようにわかります」
「わたしたちはどうなるの……」
「元々存在しなかったことになるでしょう」
「そんな！」ディオは叫んだ。「さんざん苦労してここまできて、消えるってのかよ！」
「希望はあります」ノルンはディオを制した。「メル・フォートとディオ・フォートは、魂は別でも肉体はこの星の物質からわたしが創（つく）りあげたものです。その一点において、あなたたちは正（まさ）しくこの星の民。後はわたしたちの中にある歪みをぶつけあい、相殺（そうさい）すればあるいは――」
「だから、戦え、と……？」
「そうです。これが最後の……わたし自身への審判でもあります。さあ、メル、ディオ。全ての力を使い、自分の運命を切り開きなさい」ノルンは雪のように真っ白な翼を広げた。「手加（てか）減（げん）は無用ですよ」
メルとディオは頷いた。彼女の言葉が真実だと言うことは、魂が理解していた。
メルがポーチから杖をだして構えた。「……『天空満ちるところ我はあり――』」
ディオも剣を構える。呪文はない。だがその体内に急速に気が集中していくのが光となって見える。
ノルンもまた、手にした杖を天に向かって上げ、そうして微笑んだ。

魔法素(マナ)が満ちた。

「インデグニション！」

「冥空斬翔剣(めいくうざんしょうけん)！」

「――ビッグバン」

渦巻(うずま)く光が、爆発が、炎が、あらゆるものを飲み込んだ。

（ありがとう、メル、ディオ……またいつか、どこかで……）

破壊の嵐の中、全てが消えていくのを感じながら、メルとディオは、そうノルンの声を聞いたと思った。

アセリア暦四四〇八年、十一月十日。

ヴァルハラの町の側(そば)、ダオス城跡で起きた噴火(ふんか)らしき爆発は、遺跡の全てを跡形もなく吹き飛ばし、断崖(だんがい)に立った火柱は、常闇(とこやみ)の大陸アーリィの空をも、赤く、明るく照らしたという。

その日以来、《なりきり師》の双子の姉弟(きょうだい)、メル・フォートとディオ・フォートの姿を見たものは、誰もいなかった……。

7　明日への鐘

「エリック、ファーメルの様子はどう？」出迎えてくれた彼に、アーチェは訊いた。「少しは元気、出た？」

エリックはやつれた顔を力なく振ると、アーチェを家の中に招き入れ、自分は椅子に倒れるように座った。クルールが駆け寄ってきて、アーチェの膝に両手を乗せる。彼女は丸い頭を優しく撫でてやった。

「まだ工房に閉じ籠もってるの？」

「ええ」

「ええ、じゃないよ。いい加減にしないと死んじゃうよ？」

そんなことはわかっている、という風に、エリックは声を払うごとく手を振った。今にも消えてしまいそうな様子に、アーチェもそれ以上、彼を責める気にはならなかった。

（もう二カ月か……）

メルとディオがいなくなってから、それだけの時間が経っていた。

初めに気がついたのはエリックだった。『精霊の試練』終了記念のパーティの翌日、いつまでも降りてこないメルとディオ、それにクルールを起こそうと、二階へ行くと、二人と一匹の姿はなかった。その日は朝から空は不気味に赤かったが、夫妻の気にするところではなく、また友達のところにいったのだろう、と考えていたのだが、夜になっても戻らないのを案じて町に出向き、初めて二人と一匹がどこにもいないことがわかったのだった。町の人々の手も借り、一週間、島中が捜索されたが、何の痕跡も見つけることは出来なかった。島の外に出たとは考えられなかった。なぜならレアバードは家に残されたままだったからだ。さらに三日捜索は続けられ、だが、ついに打ち切られた。

ただ一匹、クルールが家に戻ったのは、そのすぐ後だった。

傷だらけのぼろぼろの姿で、森の中に倒れていたのを、何も知らずに遊びに来たアーチェによって、空から発見されたのだった。

クルールは、『なりきり師』の証である『鸚鵡の紋章』を大事に抱えていた。ふたつとも焼け焦げ、鸚鵡の姿を判別するのも難しいほど溶けていた。この発見を受けてさらに五日、森を中心に捜索が行われたが、やはり何も見つからなかった。

ファーメルに変化が起こったのはこの頃だった。夢を見た、と彼女はいった。メルとディオの夢を。

「ママ……いままで育ててくれてありがとう。オレ、がんばったよ。すごく、がんばった！

……だけど、さよならみたいなんだ。頑張りが足りなかったのかなあ……」

「ママ、わたしきっと忘れない。この世界から消えてしまっても、絶対に忘れない。……でも、ママは忘れてね。忘れるわ、きっと。だって、わたしたちは……もとからいなかったんだもの……」

二人はそう言ったのだという。

同じ夢を、エリックも見ていた。翌日から、ファーメルは工房に閉じ籠もり、何をいっても出てこなかった。すでに鍵は壊れている。無理やり引きずりだそうとした跡だった。ファーメルは暴れ、エリックは足をナイフで刺されて諦めるしかなかった。ちら、と見えた限りでは、何か絵を描いているのだとわかった。以来、食事だけは差し入れて、あとは放っておくようになった。

その食事にしても、エリックが作るのではない。アーチェとローカス医師が交替で世話をしなければ、あっという間に二人は餓死してしまっただろう。

今日はアーチェの当番だった。

「今晩は何にする？――っていっても、まともなのはマーボーカレーだけだけどさ」もっとも三食そうであっても、夫妻が気にするとは思えなかった。「じゃあ、それで――」

そのとき、工房の扉が乱暴に開かれ、中からファーメルが現れてアーチェをぎょっとさせた。

　彼女は、髪はぼさぼさで肌も服も垢じみていて、それ以上に、剝き出しの手や前掛けが絵の具でひどく汚れていた。臭気もひどい。爪の何本かは剝がれてしまって無く、その腕いっぱいに、小さなキャンバスを抱えていた。

「人が来る……」

　それが、約一カ月ぶりに聞いた彼女の声だった。

　誰が、と問おうとしたとき、言葉通りに扉が叩かれた。アーチェはクルールの手をどけて椅子を立つと、玄関の扉を開け――瞠目した。

「ん？　アーチェじゃないか。なんでおまえがここにいるんだ？」

　低いが優しい声で言い、訪問者は鍔広の帽子の縁を、つい、と持ち上げた。じゃらり、と手首の鳴子が鳴る。ハットバンドの代わりのように並んだコインが太陽にキラリと光った。

「ク、ク、ク、クラース⁉」

　訪問者は大仰に片眉を上げた。「他に誰に見えるというんだ。二百年も生きて、老眼になったか？――失礼。お邪魔する」

　陸に上がった魚のように口をぱくぱくさせるアーチェを後目に、クラースはさっさと中に入ってしまった。

「うきゅっ！　うきゅーっ！」クルールが短い足で駆け寄って、嬉しそうに飛び跳ねた。

「お、クルール。元気そうじゃないか」クラースはクルールの喉らしき場所を掻いてやった。

「よしよし」

「あの……あなたは……？」どうでもよさそうに、エリックが訊いた。「どなたでしょう……？」

「失礼。私はクラース・Ｆ・レスター。この時代の人間ではありません」

エリックの顔に、双子がいなくなって以来初めて、好奇心が刺激された色が浮かんだ。「まさか……レスター博士？」

その呼び方にクラースは苦笑いを浮かべたが、否定はしなかった。「こちらが奥さんですね。メルとディオが前に話してくれました」

驚いたように、ファーメルは体を震わせた。

「クラース、馬鹿！」アーチェは我に返り、クラースを怒鳴った。「何も知らないで——」

「知っている」アーチェの言葉を手で制してクラースは言った。「今日ここに来たのは、メルとディオに何が起こったのかを話すためだ」

「知っているのですか!? あの子たちがどこにいるのか！」

「私が話せるのは、何が起きたか、という事だけですよ、エリックさん。早合点しないで頂きたい」

エリックは、勢い込んだ分、がっくりとして椅子に腰を落とした。

「クラース——確かにクラースだわね。それは認めるわ。つまり、どういうこと？」

　クラースは勝手に椅子を引いて座ると、一同を見渡した。「私は、精霊マーテルに頼まれて来ました。なぜなら、あのノルンとは、『大いなる実り』によって蘇ったデリス・カーラーンの世界樹の精霊――つまり、マーテルにとっては娘にも等しい存在だったからです。マーテルは、ノルンのしたことが、あなたがたご夫婦を嘆き悲しませていることを知り、私に、時代を越えて真実を告げてくれるように、と頼んだのです。――しかし、聞きたくないというのであれば、無理強いはしません」

「真実……」エリックが唾を飲み込んだのがわかった。彼のすぐ横にいつの間にか寄ったファーメルが座り込み、汚れた手で夫の足を痛いほどに掴んだ。何枚かの絵が床に落ちる。エリックは顔をしかめたが、何も言わず、手を外そうともしなかった。「……お願いします」

「わかりました」

　そうして、クラースは語った。あの晩、何が起こったのかを。メルとディオの生い立ち、その『罪』と『罰』も含め。

「ノルンはマーテルによって星へ――デリス・カーラーンへ還されたということです」とクラースは話の最後を締めくくった。「だが、メルとディオがどこへいったのか、それは彼女にもわからない」

「クラースっ!!」エリックとファーメルの顔に、激しくはないが深い絶望が刻まれたのを見て、アーチェは怒鳴っていた。「あんた、わざわざそんなことを言いに来たのっ!?」

「まあまて、アーチェ。話は最後まで聞くものだ」クラースは苦笑して、エリックとファーメルに向き直った。「……マーテルは私にこう告げました。『二人の魂はおそらく歴史の枝と枝の間のどこかへ落ち込み、迷っているのでしょう。私には二人の心細い泣き声が聞こえます』と」

「泣いて、る？」ファーメルの瞳が揺れた。

クラースは頷いた。「メルとディオは、時間の狭間で迷子になっているのです。戻ってくるのには道標が必要です——時空転移の時に『錨』が必要だったように、今度は『灯台』が必要なのです」

「しかし何をどうすれば……」

クラースは床に落ちた、札のようにも見える絵の一枚を拾い上げた。「これは？」

「妻が、メルとディオから『試練』の旅の話を聞いて描いたものです」

「失礼」

クラースは床のものはもちろん、ファーメルの腕に残っていたものも含めて、全ての絵を取り上げ、テーブルに広げた。

絵は、全部で二十一枚あった。

「この絵がどうかしたの、クラース？」

アーチェの質問には答えず、クラースは絵を一枚一枚決められた場所があるかのようにテー

ブルの上に並べていった。それが済んだとき、二十一枚の絵は不思議な形に並べられていた。それはまるで一本の『樹』のように見えた。

アーチェがそのことをいうと、クラースは当たりだ、と言った。「これは『生命の樹の方陣』だ。今は、骨牌占術のひとつだと思われているが、もともとは魂を導く為の呪陣なんだぞ。この絵には、奥さんの強い『想い』が込められている。それはこの方陣を通して、きっととても強い光になる」

「じ、じゃあ、メルとディオは帰ってくるんですか⁉」

「希望はもてるでしょう」クラースは立ち上がった。「どのような形で帰ってくるのかはわかりませんが」

ファーメルは立ち上がりクラースの手を取ると、彼が眉をしかめるほど強く握りしめた。

「……ありがとう」

クラースは頷き、帽子をほんの僅かに上げて暇の挨拶をし、きびすを返した。

「あ、あたし、ちょっと送ってくる」

アーチェはそう二人に声を掛けたが、エリックもファーメルも聞いていないようだった。二人とも、一心に方陣に向かって祈りを捧げていた。

「ちょっと！　待ってよ、クラース！」家を出たところで追いつき、彼が止まるのを見て、アーチェは背中で扉を閉めて息をついた。「……あれ、本当のこと？」

「方陣のことか？」

「それもそうだけど、マーテルの話もよ。……へたに希望を持たすようなこと言うのって、残酷じゃん」

「おまえなあ……」クラースはため息をついた。「大体、私がこんな所まで来なくちゃならなくなったのはアーチェ、おまえのせいなんだぞ！」

「へ？　あたし？」

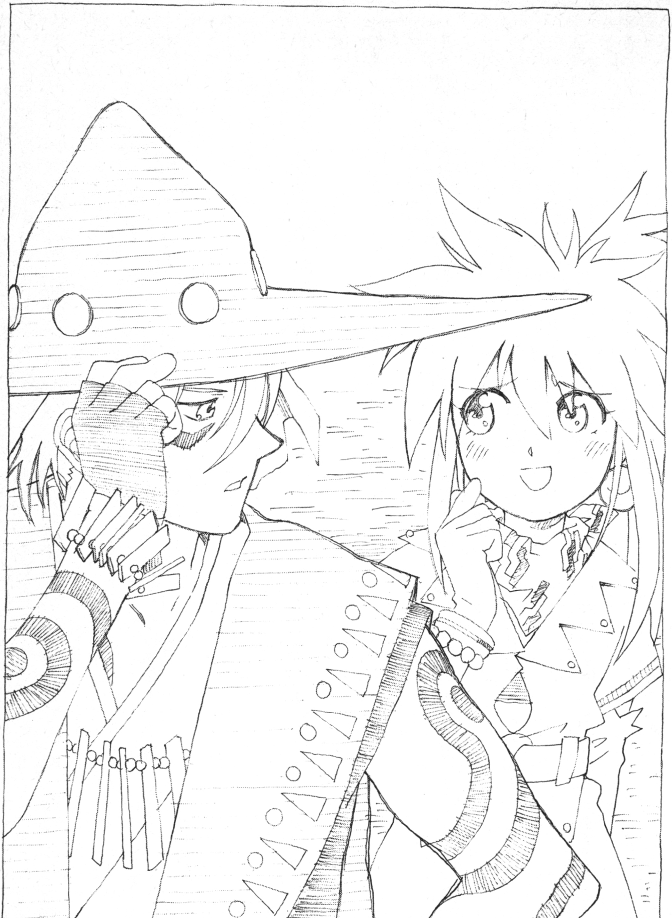
「そ・う・だ」クラースは形のいい指をアーチェの鼻先に突き付けた。「すっかり鈍くなって、最近じゃ精霊の声もほとんど聞こえないんだろう？　いっくら呼びかけても云でも寸でもないから、マーテルはわざわざ時間を越えて私のところに来たんだ。世界樹の頼みじゃ無碍に断るわけにもいかないだろうが。おかげで封印した『エターナルソード』をもう一度、使うはめになった」

　クラースは鞘に収められた腰の剣を叩いた。

「あ、あはははは」アーチェは苦笑いして視線を外した。「そういえば精霊たち、最近は静かだなーとか、思ってたんだよね」

「まったく！」言ってクラースは、しかし吹き出した。「……まったく、アーチェらしいな」

「……久しぶりだね、クラース」アーチェの瞳が揺れて細められた。「ね、町でお茶してこうよ。すぐに帰ることないんでしょ？　今日の当番は、ローカス先生に代わってもらうから」



「そうだな」クラースは、記憶にある懐かしい顔で微笑んだ。「それじゃあ、たっぷりお説教してやろう」

アーチェは笑いながらクラースの背中を叩いた。

彼女の瞳から涙がひとつこぼれたのを、クラースは見て見ぬ振りをした。

☆

夜明けの光が射す廊下の何往復目かを終えたエリックに、アーチェはこちらも何回目かの声を掛けた。

「ねえ……うっとおしいんだけど。座ったら？」

「え？――あ、すみません」

彼は素直に謝り、長椅子の、アーチェの隣に腰を下ろしたが、視線は相変わらず目の前の部屋の扉に据えられたままで、どうにもそわそわと落ち着かなかった。

（まあ、無理もないけどね）アーチェは苦笑した。（チェスターもクレスもそうだったし。男ってのはこういうときからっきし度胸がないんだから）

一途に見つめるエリックにならって、アーチェも部屋と廊下を区切る扉に視線をやった。

あの中では、今、新しい命が産まれようとしている。

エリックとファーメルの子だ。

ファーメルが妊娠していることがわかったのは、メルとディオがいなくなってから、三月半後のことだった。クラースの残した『おまじない』のおかげで希望を見いだした夫妻は、その頃にはかなり回復していて、それでやっとローカス医師が、定期的に行っていた健康診断で気がついたのだった。

時期的に考えて、あのパーティの夜に出来たのだとしか思えない、とエリックはローカスに言ったという。その前後、夫婦はベッドを共にしておらず間違いなかった。そのことはエリックを少なからず戸惑わせたが、ファーメルはメルとディオが帰ってきたのだと疑わず、宿った命を守るために、不健康な生活をぴたりとやめた。

そんなことがあり得るのか、というエリックの質問には、ローカス医師は肩を竦めるしかなかった。「魂が――そうしたものがあるとして、いつの時点で肉体に宿るのかは、誰にもわからんよ」

だが、そんな理屈はファーメルにはどうでもよいように見えた。そしてエリックも、妻に引きずられる形で、元気を、健康を取り戻していった。

フォート家には、再び穏やかな日々が戻ってきた。アーチェもローカスも、家に訪れる回数を減らし、この頃では週に一度くらいだった。

昨日はアーチェの当番日であり、陣痛が始まったのは、その日の夕方だった。年齢のことも

あり、心配なのはわかるが、とりわけ長い時間かかっているというわけでもない。部屋の中には、助産婦の他に、ローカス医師もいるのだから、何かあればすぐに知らせてくれるだろう。

アーチェは欠伸をした。エリックは今度は貧乏ゆすりを始めた。小刻みに上下するのがおもしろいのか、クルールがまとわりつこうとする。

その時、誕生の声がした。

「産まれた！」

エリックが急に立ち上がったので、クルールは後ろに球のように転がった。

それにかまっている余裕は、エリックにはない。飛びつくように扉の取っ手に手を掛けたとき——

もうひとつ、誕生の声がした。

「え……!?」アーチェは空耳だと思った。しかし、すぐに泣き声は二重になって、空耳でもなんでもないとわかった。

「双子だ！」エリックは狂喜した。「ああ、神様！」

エリックは扉を壊すように開けて中に入った。クルールが後を追おうとするのを、アーチェが抱きとめた。「あたしたちはあとね」

「うきゅ……」

下がった耳を掻いてやると、少し気分が盛り返したのか、クルールは短い尻尾をせわしなく

振った。
部屋の中を覗くと、エリックがファーメルの手を握っているところだった。
「あの子たちが帰ってきたのよ、あなた」目の下にくっきりと隈のできた顔に微笑みを浮かべて、ファーメルは言った。「間違いないわ。だって、男の子と女の子ですもの」
「本当に……？」
ファーメルははっきりと頷いた。「メルとディオよ」
「おめでとうございます、エリックさん」年老いた助産婦が、青と桃色の産着に包まれて元気に泣く二人の赤ん坊を彼に見せた。「本当に元気な赤ちゃんですよ」
エリックは頷き、手を伸ばしては引っ込める、という動作を、何度も繰り返した。
「抱いてあげて、あなた」
突然の妻の言葉に、彼は驚き、そしてうろたえた。「ぼ、僕が？」
「他に誰がいるの？　大丈夫。壊れたりしないから――ほら、あなたが抱くのをためらったりするから、ますますひどく泣いてるわ」
そんなこともないのだが、エリックは心を決めたようだった。本当に、おっかなびっくり、双子を渡されると、両腕で包むようにして抱きあげた。
すると、それまで泣いていた双子はぴたりと泣きやみ、嬉しそうな笑い声を上げた。
エリックは、腕の中の小さな命をよくよく見た。

濡れた髪は確かに銀。桃色の産着に包まれた娘の髪は、ほんの僅かだが端がまるまる癖がついていて、青の産着に包まれた息子の髪はやけに硬そうだった。

「ああ……」エリックは涙して、うなだれた。「まちがいない……この子たちは……メルとディオだ……」

肩を震わせる夫の背中を、ファーメルは慈愛のこもった瞳で見つめて微笑んだ。

(クラース……あんた、たいしたもんね)アーチェはクルールを抱いたままそっと後ろに下がると、長椅子に腰を下ろして、夜明けの空を見上げた。(あの子たち、本当に帰ってきたよ)

エリックは顔を上げ、双子の柔らかい頬に、かわるがわるキスを贈った。

「……おかえり。僕たちの大事な子供達」

双子の赤ん坊の嬉しそうな笑い声が、朝日の中で弾けた。

それは、エリックとファーメルにとって、始まりを告げる教会の鐘の音だった。

家族という、素晴らしい日々の。

《おわり》

あとがき

皆様、新世紀おめでとうございます。
「テイルズ オブ ファンタジア〜なりきりダンジョン〜」、上巻が二十世紀最後の月に出て、下巻が二十一世紀最初の月……つまり！　この物語は世紀を跨いだ物語になったわけですね。いやーめでたい。なんとなく。
お借りしていた特製ROMもナムコさんに返してしまったし、『なりきり』とはこれでお別れかと思うと寂しい限り。
でも、「テイルズ オブ ファンタジア」の世界にこうして関わらせていただけたことは、大変でしたけど、とても光栄なことであり、貴重な体験でした。
あとはこれを次に活かせれば……ってあるのか、次？　担当様ぜひぜひまた、よろしくお願い致します。
（読者の皆の反応が良かったらね。担当様・談）
それはもう、重々承知しておりますとも。

この上下巻を読んで、ゲームをやりたくなった、と思ってくださる人がいたらよいなあ。

それにしても二十一世紀です。

ううむ、おかしい。子供の頃の未来予想では、車は全部エアカーで、小旅行の感覚で月に行くことができて、衛生軌道上には巨大な宇宙ステーションが浮かんでいるはずだったのに……ひとつも実現していないとは。

ロボットだけは、ついに二足歩行が出来るものが出来上がりましたが、家庭にやってくるのには、まだまだ時間がかかりそうです。

欲しー。

ロボットのいる生活――なんて素晴らしい！　これぞ二十一世紀！

あーでも、私の部屋には入らないや。漫画やら小説やら資料本やらゲームやらが山積みになってるから。残念無念。

残念といえば、「テイルズ　オブ　エターニア・限定版」は手に入りませんでした。

油断したのがまずかった。上巻が書きあがって、近所のお店に予約に行ったときには時既に遅し。締め切られた後だったのでした。

当日、秋葉原に行くことも考えたんですが、小旅行になっちゃうし、原稿も佳境だったので

あきらめました。

ネット上でも予約してたところがあったらしいんですが、情報を聞いて見にいったときには売り切れ。

ちくしょー、運がなかったです。

ま、このあとがきが書きあがったら通常版を買いに行って、のんびりとお正月から始めようと思ってます。

楽しみだなあ。

それでは皆様、二十一世紀もよろしくお願い致します！

またいつか、何処(どこ)かで！

二〇〇〇年　十二月　中旬

結城(ゆうき)　聖(しょう)

この作品の感想をお寄せください。

あて先　〒101―8050
東京都千代田区一ツ橋２―５―10
集英社　スーパーダッシュ編集部気付

結城　聖先生

松竹徳幸先生

テイルズ オブ ファンタジア
～なりきりダンジョン・下巻～

結城　聖

集英社スーパーダッシュ文庫

2001年1月30日　第1刷発行
2003年4月20日　第7刷発行
★定価はカバーに表示してあります

発行者
谷山尚義

発行所
株式会社 集英社
〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
03(3239)5263(編集)
03(3230)6393(販売)・03(3230)6080(制作)

印刷所
図書印刷株式会社

ISBN4－08－630022－2　C0193

スーパーダッシュ

著者紹介

結城　聖（ゆうきしょう）

３度の飯と同じくらいに、玩具とゲームが好き。狭い家には新旧のゲーム機と玩具がゴロゴロしている。
誰か１／１クルールを作ってくれないかなと他力本願妄想中。

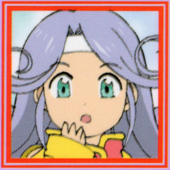
松竹徳幸（まつたけとくゆき）

A型、しし座
アニメーターやってます
キャラデザもたまにやります
イラストも頼まれれば描きます
他の仕事もやれと言われればやりまちゅー

ISBN4-08-630022-2

C0193 ¥552E

定価 本体552円十税



前世の罪のために、本当の感情を封じられている双子のディオとメルは、
謎の精霊ノルンの導きで再び過去へと旅立った。
そこで、時空の六勇者の一人、チェスター・バークライトと出会う。
彼は、様々な事情で親を失くした子供たちと暮らしていた。
伝説とは違う、やさしい素顔に驚かされる二人。
英雄の中の英雄クレス・アルベインと、聖女ミント・アドネードとも
感激の対面を果たした二人は、次々と試練を乗り越えて、心を解放させていく。
そんなディオとメルの行く手に、衝撃の事実が待っていた…!?

D スーパーダッシュ